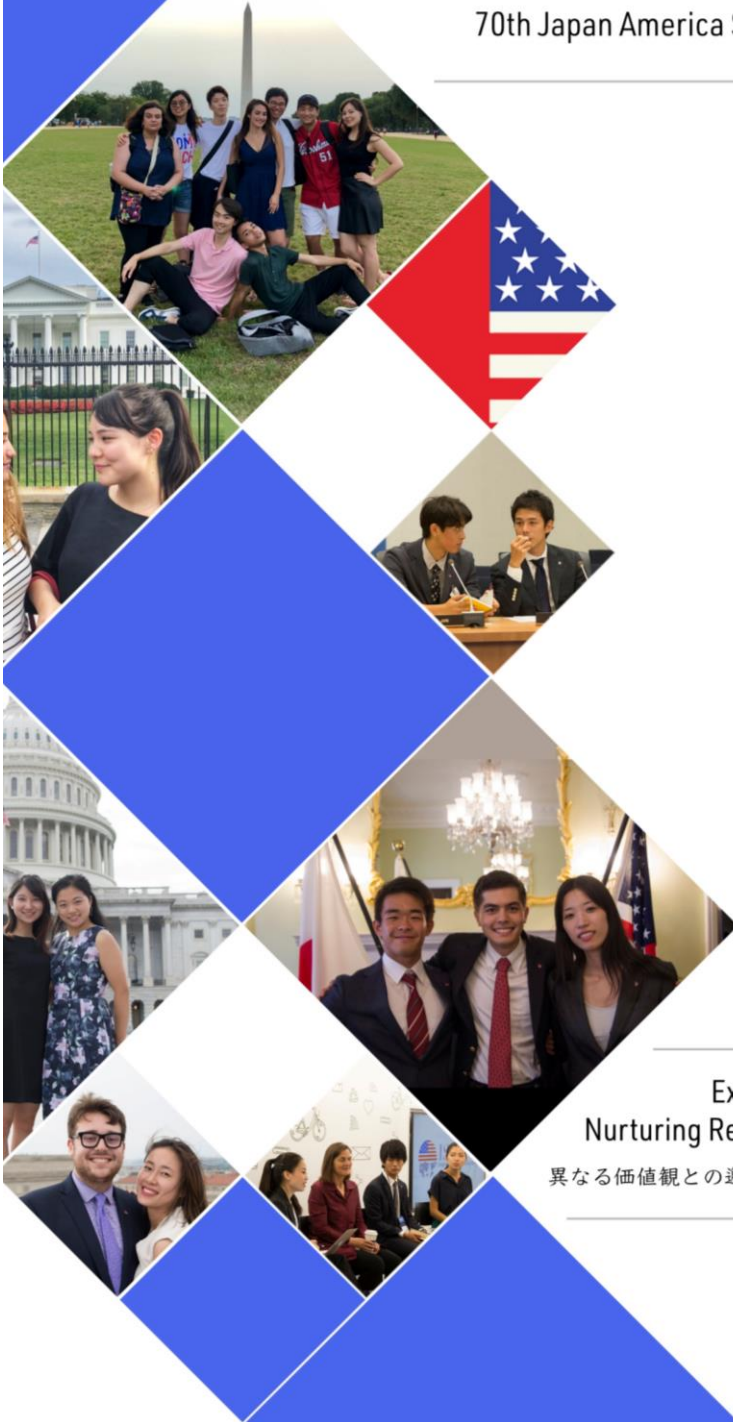

第70回日米学生会議 報告書

70th Japan America Student Conference



Exchange and Growth
Nurturing Relationships in a Global Society

異なる価値観との邂逅～対話をもたらす成長への探求～

第 70 回日米学生会議

日本側報告書

目次

第1章	日米学生会議とは	4
	実行委員長挨拶	5
	本文中の略語	6
第2章	第70回会議 概要	7
	第70回会議 活動内容	11
	第70回会議 実行委員名簿	13
	第70回会議 参加者名簿	14
第3章	事前期間中の活動報告	17
	第69回会議報告会・70回説明会	18
	選考活動	19
	春合宿	19
	防衛大学校研修	22
	佐渡島自主研修	23
第4章	本会議中の活動報告	27
	マディソンサイト	28
	レキシントンサイト	37
	ワシントンD.C.サイト	45
	ポートランドサイト	54

第 5 章	分科会の活動報告	64
	テクノロジーによる社会変革の可能性	65
	人間の精神を考える～社会における心の健康～	69
	今日における仕事と家族のあり方	74
	環境と人類～持続可能な共生社会とは～	78
	宗教哲学～現代における信仰と思想～	82
	アイデンティティ ～グローバル社会における単一化と多様化～	86
	教育の意義と改革	91
第 6 章	事後期間中の活動報告	96
	中国研修報告会	96
	第 70 回会議報告会/第 71 回会議説明会	97
第 7 章	第 71 回会議概要	98
	第 71 回会議 テーマ	99
	第 71 回会議 実行委員メンバー	100
	第 71 回会議 分科会テーマ	101
第 8 章	後援・賛助・協力	102
第 9 章	メディアへの掲載	110

A large graphic on the left side of the page, partially cut off by the edge. It features a red circle on the left and a blue circle on the right containing white stars, resembling the top half of the American flag. Below the blue circle, there are horizontal stripes in white and red, also partially cut off.

■□第 1 章

日米学生会議とは

第1章 日米学生会議とは

第70回日米学生会議 実行委員長挨拶

平成最後の第70回日米学生会議は幕を閉じた。

長い夏も終われば呆気ない。我々は「異なる価値観との邂逅 ～対話をもたらす成長への探求～」というテーマを掲げ、3週間に及ぶプログラムを設計した。思えば日々自分自身の無力さに打ち拉がれる事もあった。そこへ立ち向かい続けること、そして皆と対話し人々の良さを汲み取ることがいかに重要かを毎日学んだ。第69回では対話を通じた相互の共通理解を最終目標としていたが、我々はその対話の先にある自身の成長をゴールとして会議を進めていった。

日本側は会議前から様々な挑戦をした。その代表的な例は中国研修であろう。日米関係を知る上で中国を学び考えることで、日米関係を俯瞰的に理解するという目的である。一方、企画は困難を極めた。初めてのクラウドファンディングへの試み。そして社会的にこの企画はどう映るのか考える必要があったのだ。今「日米」学生会議はどんな価値をもたらしているのか。その真価を問わざるを得なかった。

一方でこの日米学生会議の存在はいつの時代も重要な存在だというのは変わらない。実際に運営側を通じて知り得た社会の実態。その中にある日米学生会議という日米のパイプを構築するソフトパワーの存在。日米関係は安定し、以前よりもその役割は異なるにせよ、その草の根の交流は20年後、30年後に日米人材を育てる為の重要な役割を果たしているに違いない。今後も日米の代表団として現状の真実に対し多角的に見つめ、今後の社会の激変を話し続ける必要があるだろう。その対話がフェイクニュースや偏向に満ち溢れた情報のなかで生きる術である。トランプ大統領はなぜいま米中貿易戦争に踏み切ったのか、米中・日中激突の可能性、アメリカ人から見た日本国憲法改正の意味。学生故に話せる事があり学び続けられる。自身の当たり前前に攻撃を仕掛けられても、現実に根ざし、前に進む力を日米学生会議は与えてくれた。

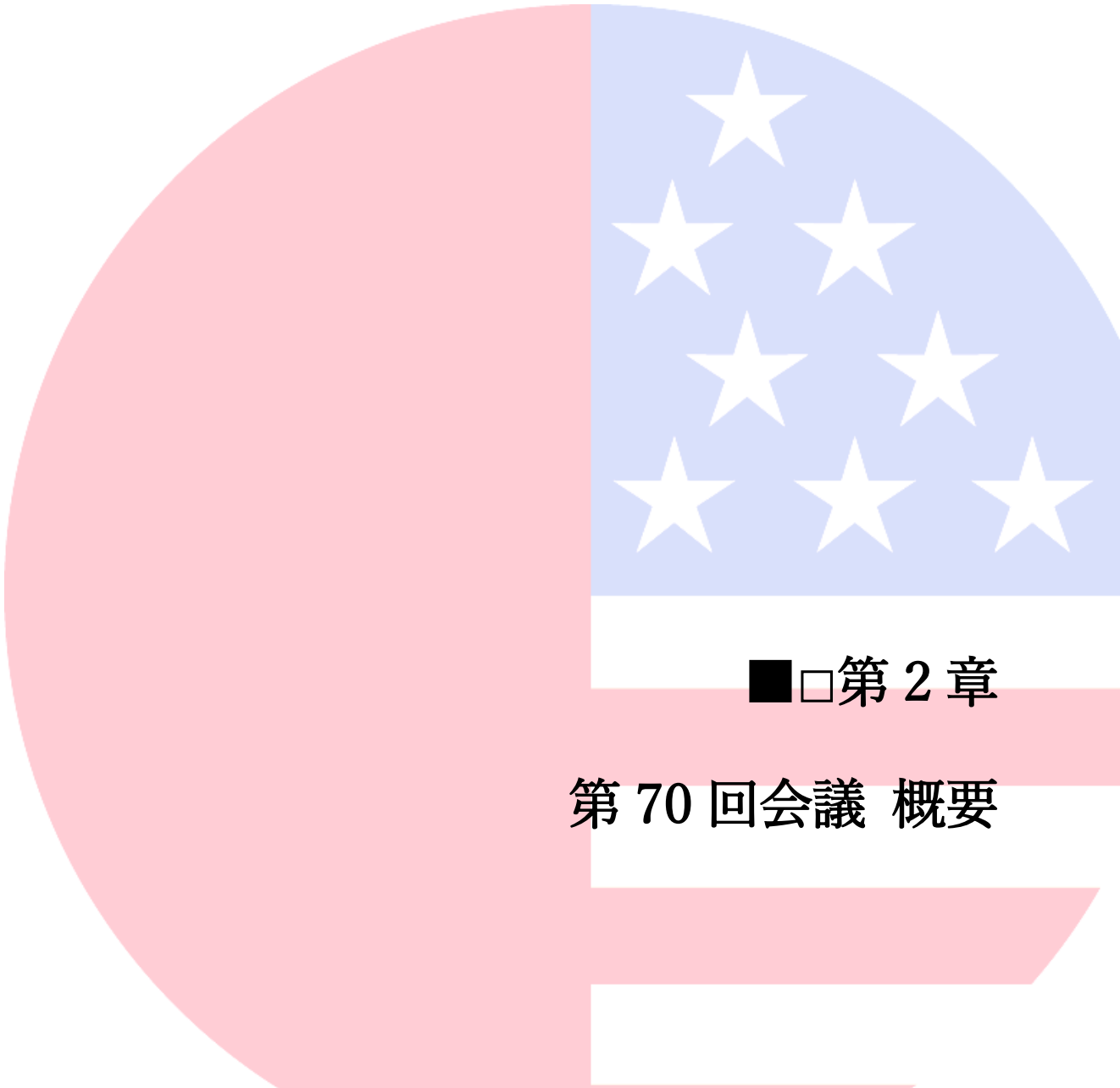
第70回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、財団・企業の皆様、開催地の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興

会、ISC Inc. の皆様、JASC アラムナイの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力頂いた全ての皆様の存在があってなり得たことである。日本側代表として、ここに第70回会議終了のご報告をさせて頂く。本当にありがとうございました。

第70回日米学生会議実行委員長
長谷川 信寿

本文中の略語

JASC (ジャスク)	: 日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer (ジャスカー)	: 日米学生会議の現役および過去の参加学生
IEC	: 日本側主催団体の国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	: アメリカ側主催団体 (International Student Conferences)
EC	: 実行委員会、または実行委員 (Executive Committee)
AEC	: アメリカ側実行委員会 (American Executive Committee)
JEC	: 日本側実行委員会 (Japanese Executive Committee)
デリ、デリゲート	: 日米学生会議参加者 (Delegate)
ジャバデリ	: 日本側参加者 (Japanese Delegate)
アメデリ	: アメリカ側参加者 (American Delegate)
アラムナイ	: 日米学生会議の過去の参加者 (Alumni)
サイト	: 本会議開催地 (Site)
RT	: 分科会 (Round Table)
リフレクション	: 参加者が腹を割って会議の感想や反省点を話し合う場



■□第 2 章

第 70 回会議 概要

第2章 第70回会議 概要

第70回会議テーマ

異なる価値観との邂逅 ～対話をもたらす成長への探求～

第一回日米学生会議。「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念のもと、4人の学生が1934年、太平洋を渡り、日米学生生会議を創設した。満州事変勃発による日米関係の悪化を憂慮した彼らが、自らの知識、勇気、そして希望を胸に世界へと飛び出したのである。

そして今回70回目を迎えた。創設当時とは異なり、日米関係は目下良好だ。その長く深い関係は確固たるものとして、世界平和の基盤に大いに貢献していると言えるかもしれない。しかし、2016年11月に開催された大統領選挙以降の強力なナショナリズムの台頭に伴い、根本から見直す必要も生じてきた。満州事変という世界に激震が走る大きな動きではないかもしれないが、間違いなく、今、日米は時代の荒波の中を進んでいかなければならない。

社会の諸問題を世の学生はどう見つめるのだろうか。自らが属する国家、もっと身近な例であれば大学や就職予定先の企業、部活やサークル、アルバイト。所属、という概念、価値観はそれだけで時として一歩引いて物事を見ることを難しくする。アイデンティティを証明するものとして守ってくれる一方、時には偏見となり、壁ともなりうる。だからこそ、その殻の一歩外に出ること、そして世界が今、どう動いているのかを自分の目でしっかり捉えようとするのが大切なのではないかと思う。「邂逅」という言葉はただ出会うということではない。いろんな価値観との出会い、たとえ理解ができなくてもそれに実際に触れること、感じること、学ぶこと、知ること、それこそが、この荒波の中を生きる羅針盤となるのではないだろうか。

今年度は米国開催。多様な価値観との出会いは、自分と向き合うことと表裏一体だ。相手を理解しようとすればするほど、知ろうとすればするほど、自分と比較する。自分が持つ知識を最大限生かし、新たな情報を取り入れながら、必死にもがく。そのプロセスこそ

が、今、我々に求められていることなのではないか。第一回の参加者と第70回の参加者。今はスマートフォンもパソコンも、あることが前提。手紙でやりとりをしていた頃に比べコミュニケーションも随分と楽であるし、海外の情報も一瞬で手に入る。それでもやはり顔を見て、現地を歩いて、考えもがく、という一夏のプロセスを今でも続けることの意味を、それを何としても実現させたいという実行委員の熱い思いと共にこのタイトルに込めた。プログラムが立て続けに計画されており、それら一つずつ消化するための間も無く次々に色々なことがあり、忙しく、厳しい夏だった。この経験から、各々学んだことをこれからの人生に生かしていけるようにしたいと願う。

第70回会議 開催概要

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【開催期間】

会議開催期間：2018年8月6日～8月28日

【企画・運営】

第70回日米学生会議実行委員会

事業実施期間：2018年4月1日

～2019年3月31日

【後援】

外務省、文部科学省、米国大使館、一般社団法人日米協会

【参加者】

日本側：36名（実行委員8名を含む）

米国側：30名（実行委員8名を含む）

【賛助】（順不同）

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団、公益財団法人双日国際交流財団、公益財団法人平和中島財団、一般社団法人日米協会、京都日米協会、The Miner Foundation、日本たばこ産業株式会社、ANA ホールディングス株式会社、日本航空株式会社、楽天株式会社、住友商事株式会社、日米学生会議同窓会

【開催地と日程】

マディソン（ウィスコンシン州）：

8月7日～8月11日

レキシントン（ヴァージニア州）

8月11日～8月17日

ワシントン D.C.：

8月17日～8月22日

第2章 第70回会議 概要

ポートランド（オレゴン州）

8月22日～28日

《マディソンサイト》

【ホスト大学】 University of Wisconsin,
Madison

《レキシントンサイト》

【ホスト大学】 Washington and Lee
University

《ポートランドサイト》

【ホスト大学】 Portland State University

第70回会議 活動内容

1. 分科会活動

【目的】特定の議題に関して、5~7月の事前準備期間、8月の本会議期間を通して集中的に議論を行うことで、学生の知識向上と相互理解、その過程を通じた人格的成長を目的とする。

【分科会一覧】

1. テクノロジーによる社会変革の可能性
2. 人間の精神を考える～社会における心の健康～
3. 今日における仕事と家族のあり方
4. アイデンティティ～グローバル社会における単一化と多様化～
5. 宗教哲学～現代における信仰と思想～
6. 教育の意義と改革
7. 環境と人類～持続可能な共生社会とは～

【活動概要】

本会議において活動の中心となる分科会が7つ設けられており、日米各5名の学生が、本会議期間中に30~40時間もの時間をかけて議論を重ねる。学生たちは、議題や開催地に対して理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修「フィールドトリップ」や調査などを行いながら、議論の質向上を図る。特に、フィールドトリップは討論の対象となっている問題の現場や現状を実際に知ることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な多様かつ具体的視点を得るための重要な活動となる。

2. 全体活動

【フォーラム】

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または現地学生を交えたパネルディスカッションなどを通して、参加者のみでのディスカッションとは異なる視点から知識を得たり、社会に対して学生の意見を発信したりする。

【スペシャルトピックディスカッション】

全員が議論できるような議題を定めて、所属分科会以外の学生と議論・交流を深める。

【リフレクション】

参加者が一同に集い、約3週間の共同生活で分科会における議論の対立や人間関係の葛藤から生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことにより参加者間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより、参加者に会議の充実や円滑な運営のために努力している姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

【ファイナルフォーラム】

最終開催地の東京で行われるファイナルフォーラムでは、主として分科会の議論の内容や活動報告を行い、第70回日米学生会議の成果として現代社会が抱える諸問題に対する学生なりの視点を社会に発信する。



第70回会議 実行委員会名簿

————— 日本側実行委員 —————				
氏名	大学	学部・専攻	学年	分科会
長谷川 信寿	学習院大学	経営学部経営学科	3年	実行委員長
佐々木 彩乃	九州大学	法学部	3年	テク
伊藤 江理華	東北大学	医学部医学科	3年	精神
押切 彩	明治大学	経営学部経営学科	4年	家族
金澤 つき美	中京大学	総合政策学部総合政策学科	4年	環境
豊坂 竹寿	東京外国語大学	言語文化学部言語文化学科	3年	宗教
藤本 ミケイラ	青山学院大学	文学部フランス文学専攻	3年	アイ
李 呂威	国際教養大学	グローバル・ビジネス学科	4年	教育

————— 米国側実行委員 —————				
Name	University	Major	Class	RT
Emlyn Lee-Schalow	Rutgers University	Marketing	2019	Chair
Jacques Chaumont	Williams College	Statistics and Japanese	2018	Technology
Kitanna Hiromasa	Washington and Lee University	Economics and East Asian Studies	2019	Environment
Carolyn Hoover	Duke University	Neuroeconomics and International Development Policy	2020	Identity
Emika Otsuka	Carleton College	Political Science and International Relations	2020	Religion
Nicole McNevin	Wheaton College	Anthropology and Urban Studies	2017	Education
Ethan Mattos	Hobart and William Smith Colleges	Public Policy, Sociology, and Women Studies	2017	Family
Christina Zhou	University of California, Los Angeles	Biology	2017	Health

第70回会議 参加者名簿

————— 日本側参加者 —————				
氏名	大学	学部・専攻	学年	分科会
小杉 優	慶應義塾大学	法学部 政治学科	2年	テク
並木 裕太	明治大学	総合数理学部 ネットワークデザイン学科	3年	テク
松田 実	東京外国語大学	国際社会学部 国際社会学科	3年	テク
吉沢 翔平	東京大学院	公共政策学教育部 公共政策学専攻 国際公共政策コース	M2年	テク
木下 朋	名古屋大学	医学部 医学科	4年	精神
手代木 秀太	群馬大学	医学部 医学科	3年	精神
豊福 明日香	北海道大学	歯学部 歯学科	4年	精神
安日 太郎	山口大学	医学部 医学科	2年	精神
怒谷 彩花	早稲田大学	国際教養学部 国際教養学科	4年	家族
岩本 華苗	九州大学	法学部	2年	家族
細越 賢	学習院大学	経済学部 経営学科	3年	家族
南 秀弥	法政大学	国際文化学部 国際文化学科	3年	家族
佐藤 美緑	立命館大学	経済学部 国際経営学科	4年	環境
塩見 涼太	立命館大学	理工学部 ロボティクス学科	4年	環境
村上 真優	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	2年	環境
山本 采奈	東京外国語大学	国際社会学部 中央アジア学科	3年	環境
常 恵喬	東京外国語大学	国際社会学部 英語学科	4年	宗教
タクール 小迫 亜満	国際教養大学	国際教養学部 基盤教育課程	1年	宗教
土谷 里紗	慶應義塾大学	法学部 法律学科	2年	宗教
吉田 恵理奈	防衛大学校	人文社会学部 国際関係学科	3年	宗教
アドリアン ウィルダンディヤワン	電気通信大学	情報理工学部 メディア情報学プログラム	3年	アイ
嶋田 幹大	慶應義塾大学	経済学部	1年	アイ
佐野 弘樹	神戸大学	国際文化学部 国際文化学科	4年	アイ

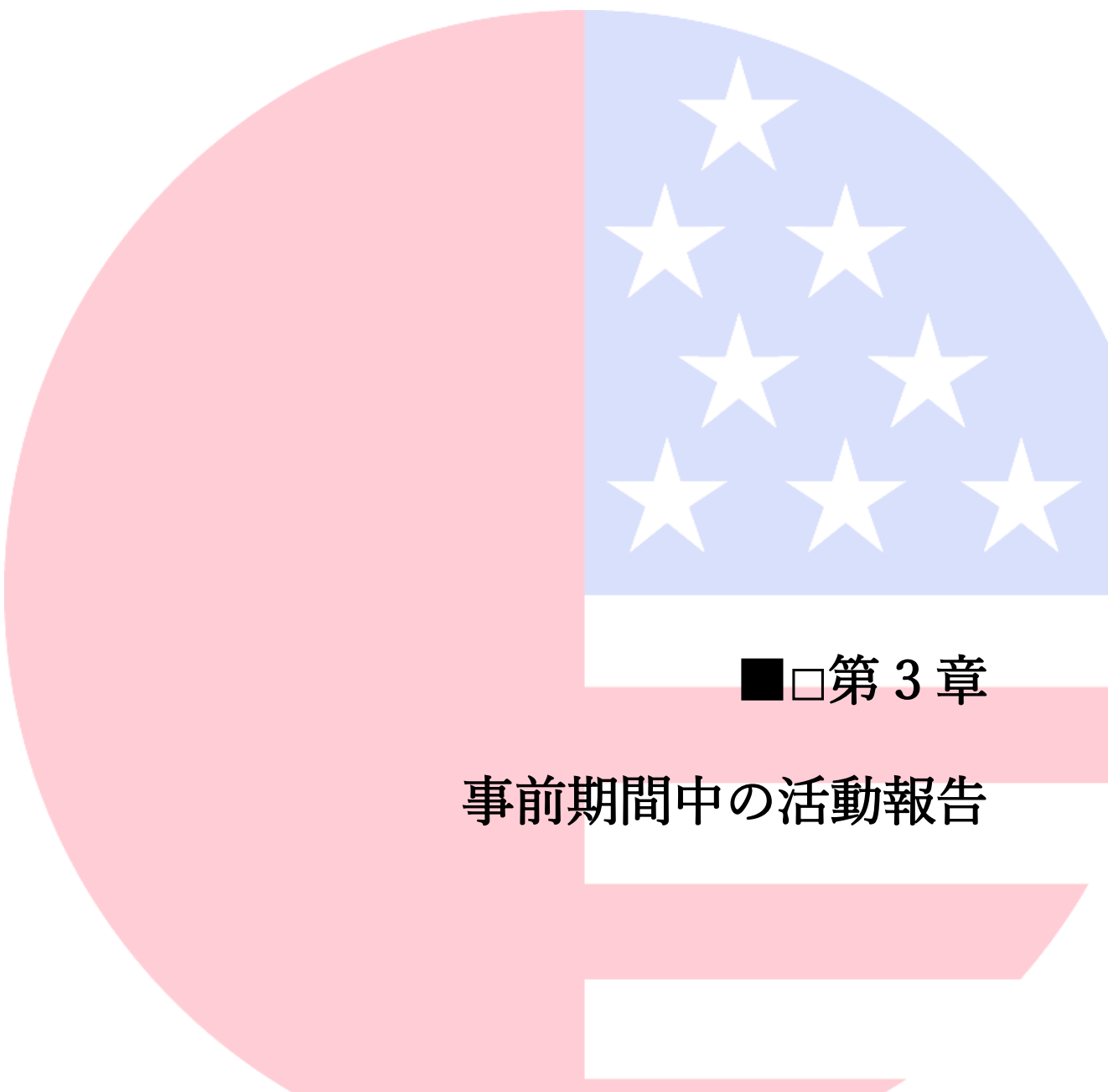
堀 晃希	国際教養大学	国際教養学部 グローバルスタディース	2年	アイ
荒牧 侑希	慶應義塾大学	総合政策学部 総合政策学科	4年	教育
宇波 壮一郎	東京大学	教養学部 文化一類	2年	教育
庄坪 孝敏	関西学院大学	総合政策学部 国際政策学科	2年	教育
鈴木 大雅	東京外国語大学	国際社会学部 北西ヨーロッパ地域学科	3年	教育

テク=テクノロジーによる社会変革の可能性 / 精神=人間の精神を考える～現代社会における心の健康～ / 家族=今日における仕事と家族のあり方 / アイ=アイデンティティ～グローバル社会における単一化と多様化～ / 宗教=宗教哲学～現代における信仰と思想～ / 教育=教育の意義と改革・環境=環境と人類～持続可能な共生社会とは

米国側参加者				
Name	University	Major・Minor	Class	RT
Adam Langenbacher	University of Colorado, Boulder	Major in Finance & Accounting Minor in History & Economics	2021	Education
Nathaniel Chute	Wake Forest University	Major in Economics Minor in Political Science & Japanese	2021	Education
Rio Funaki	University of Southern California	Major in Physical Sciences Minor in Education	2022	Education
Chihiro Aita	Macalester College	Undecided	2022	Environment
Marina Yoshimura	Yale College	Undecided	2020	Environment
Mason Williams	University of St. Thomas	Major in International Business Minor in Japanese	2021	Environment
Finnian Allen	Gonzaga University	Major in International Relations Minor in Computer Science	2022	Health
Teresa Wrobel	University of Alaska Anchorage	Major in Political Science Minor in Japanese	2021	Health
Aimee Rodriguez	Washington and Lee University	Undecided	2021	Identity

Shunji Fueki	Soka University of America	Liberal Arts (International Studies concentration)	2022	Identity
Jamie Miura	McGill University	Political Science, East Asian Studies	2021	Identity
Winnie Chan	University of Wisconsin-Madison	Chemical Engineering, East Asian Studies	2021	Identity
Elizabeth Martirosian	Green Mountain College of Vermont	Major in Environmental Law & Policy Minor in Pre-Law Certificate	2021	Technology
Norma Ordonez	DePauw University	Major in Computer Science Minor in Japanese	2021	Technology
Riki Deguchi	University of California-San Diego	Economics	2020	Technology
Hayate Murayama	Wesleyan University	Undecided	2022	Religion
Makiko Miyazaki	Wellesley College	Political Science	2021	Religion
Santiago Ravello	Portland State University	History	2019	Religion
Hiromichi Ueda	Carleton College	Undecided	2022	Work and Family
Kaho Maeda	Northeastern University	Major in Political Science, International Affairs Minor in Chinese	2021	Work and Family
Matthew Kimani	UC Berkeley	History and Arabic	2021	Work and Family
Kangyung Moon	UC Davis	Economics	2020	Work and Family

Technology: The Potential of Innovation: Building an Awareness of our Technological Roots / Health: Progression through Public Health, Policy, and Precision Medicine / Work and Family: Work and Family: Changing Roles in Society / Environment: Environment and Humanity: The Importance of Sustainability in Modern Society / Religion: Philosophy of Religion: the Examination of the Meaning of Religion in Human Life / Identity: Identity: Navigating Diversity and Understanding Homogeneity in a Global Society / Education: Education Re-envisioning the Purpose of Schooling and Education Reform

A large, stylized graphic of the American flag is positioned on the right side of the page. It features a blue canton with white stars and red and white horizontal stripes. The graphic is partially cut off by the right edge of the page.

■□第 3 章

事前期間中の活動報告

第3章 事前期間中の活動報告

第69回会議報告会(12月)

■概要・目的

第69回日米学生会議実行委員会が発足してから3ヶ月がたち、第69回日米学生会議報告会兼、第70回日米学生会議説明会を開催した。本報告会の趣旨は、日本で開催された第69回日米学生会議の報告を通し、会議の開催にご尽力、ご協力いただいた方々に感謝の意を示すと共に、日米学生会議の社会的意義を広く社会に発信することであった。また、第69回の会議概要を公に発表する場でもあった、明治大学にて開催された会には応募を検討している大学生、高校生、実行委員や参加者らなど100人以上もの方々にお越しいただき、盛況の元に終えることができた。

■スケジュール

【日時】2017年12月5日(土)

【場所】明治大学リバティタワーリバティホール



基調講演の様子

■プログラムの詳細

▼第69回報告

会議報告として、まず第69回会議の事前活動や、日本の京都、愛媛、三重、東京の4都市でのそれぞれの活動報告、また、分科会議論を代表して「21世紀における都市のあり方と個人の生き方」分科会参加者によるパネルディスカッションが行われた、本会議の一年間の歩みを報告するとともに、日米学生会議がどのような活動を行っているのかを発表した。



第70回概要発表の様子

▼第70回会議 概要発表

2018年8月に開催される第70回日米学生会議のテーマ、開催地、分科会、選考試験概要について初めて披露する場となった。第70回の実行委員らが議論の上で作り上げて来た会議構想を発表し、次年度の会議がどのようになるのかご来場のみなさまに発信する場となった。

選考活動 (2~3月)

■概要・目的

日米学生会議において、28名の参加者は会議の主体であり、もっとも重要な存在である。11月半ばから1月末の選考締め切りまで、第70回実行委員会を中心として全国各地の大学生に向けた広報活動を行い、応募者を募った。参加者の選考は1月から3月にかけて、2段階で実施された。1次選考では論述試験を、2次試験では1次選考合格者に対し、面接形式の選考をそれぞれ課した。2次選考に関して、今年度は京都および東京の2会場にて、以下の日程で開催した。また昨年に引き続き、海外に渡航している学生を対象にオンライン選考を導入した。

■スケジュール

▼一次選考

【募集】2018年1月9日~2月15日

【形式】書類審査

▼2次選考試験 in 京都

【日程】2018年3月6日(火)~7日(水)

【場所】同志社大学 烏丸キャンパス

▼2次選考試 in 東京・オンライン

【日程】2018年3月10日(土)~13日(火)

【場所】東海大学・代々木キャンパス

国立オリンピック記念青少年総合センター (オンライン)

春合宿 (5月)

■概要・目的

【日程】2018年5月3日(木・祝)~5日(土・祝)

【場所】国立オリンピック記念青少年総合センター

5月3日

- ・日米学生会議 概要説明
- ・アイスブレイク
- ・分科会議論
- ・ようこそ先輩・懇親会

5月4日

- ・wake up talk
- ・国際情勢についてのご講演
- ・分科会議論

5月4日

- ・RT 自由時間
- ・Joint RT Discussion
- ・春合宿リフレクション

■各プログラムの詳細

▼日米学生会議 概要説明 (5月3日)

主催団体である国際教育振興会より金野洋さまにお越しいただき、激励のご挨拶をいただいた。その後、実行委員紹介や8月までのスケジュールの説明、ビデオによる日米学生会議の歴史紹介などを行なった



金野洋 様によるご挨拶



アイスブレイクの様子

▼ようこそ先輩・懇親会 (5月3日)

日米学生会議過去参加者の方々（アラムナイ）にお越しいただき、会議が現在にキャリアや人生に置いてどのように活かされているか、何を学ばれたかなどのエピソードや、参加者に向けたアドバイスなど様々な貴重なお話を伺う機会をいただいた。懇親会での過去の参加者同士の再開も多く、思い出話に花を咲かせる場面も見られ、和やかな雰囲気の中、大変有意義な時間を過ごすこととなった。



ようこそ先輩の様子

▼Wake-up Talk (5月4日)

2日目の朝には Wake UP Talk と称して、日米学生会議の分科会テーマ以外の国

際問題や日本国内の社会問題について各々が興味のある分野のテーブルに集まり、議論を交わした。



全体写真

▼Joint RT Discussion (5月4日)

春合宿では、6時間ほど分科会議論の時間を取った。対面で議論できる春合宿で、一定程度方向性を決めて、先に進んで行ってほしい、という思いから、本年は分科会議論の最後に、お互いの分科会の様子を共有する時間を取った。

7つの分科会から1人ずつ集めたグループを作り、

- ・分科会としての目標
- ・Potential Discussion Topics
- ・フィールドトリップ先候補
- ・7月までのスケジュール

の4点について、発表と議論の時間を取り、お互いの分科会活動をより良いものにする議論を行った。

▼春合宿リフレクション (5月5日)

3日間の春合宿、最後のプログラムは、Reflection。全員が輪になって座り、1.5時間の静かな空間を作り、自分について振り返る、JASC 伝統の場である。

参加者の声

▼春合宿総括①

春合宿は私に「火をつけた」イベントであった。日米学生会議に参加することが決まり、半ば浮かれ気分だった私にとって、この春合宿は地に足をつけさせてくれる時間であったと言える。まず、記憶に焼き付いているのが、前代表理事の伊部様の「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉だ。実は私は補欠合格者で、春合宿の数日前に奇跡的に JASC 参加が決まった。これはまさしく「不思議の勝ち」である。私がこの場にいるのはとてもありがたきことで、せっかく掴んだチャンスを絶対に無駄にしたいくないという想いが芽生えた瞬間だった。

これだけではない。自分よりはるかに優秀な仲間たち、魅力的な先輩方、そして JASC を創り継承してきた先人たちの想いにめぐり合う中で、私は「何のために自分が JASC にいるのか」ということを何度も何度も考えさせられた。この問いへの答えはまだ全然わからない。でもきっと、この気持ち、これからの JASC のどこかで自分の背中を押してくれると私は信じている。

神戸大学国際文化学部 4年 佐野弘樹

▼春合宿総括②

春合宿の3日間はあっという間だった。月並みだが、一言で表すとしたら全てに圧倒された。集まった第70回の仲間の話す力、考える力、知識の豊富さ、仕事の速

度、多彩なバックグラウンドなど挙げればキリがない。正直悔しかったし今まで多少なりとも築いて来た自信がいかに狭い世界で構築されて来た物かを痛感した。それでも仲間の助けを借りながら全力で食らいついていった。特に3日目の Joint RT が衝撃的だった。トピックを一つポン、と落としてみると連鎖反動的に様々な視点からの意見や莫大な量の情報が流れ込んで来る。それを基に全員に新しいアイデアが生まれる有意義な時間だった。15分の時間をもらったが終わってみれば体感3分、情報量は2時間程に感じた。圧倒されたと同時に自分も食らいつく事が出来、3日目にしてようやく JASC70 の一員になれた気がした。そんな私は夏の本会議に向けて心踊らせながら、成長と共にすこし違って見える様になった青少年オリンピックセンターを後にした。

学習院大学 経済学部 経営学科 3年
細越 賢

▼春合宿総括③

春合宿の前、私は興奮と緊張を同時に感じていた。

参加者全員がお互いに初対面の状況で3日間のプログラムをこなすことは決して簡単ではなく、それに対する不安もあった。しかし、実際に当日会って話してみると皆の溢れんばかりの情熱と知識量に圧倒された。普段ではあまり話さないような話題を振ってもそれに必ず誰かが興味を示し、気づけば数時間に及んで話し込むこともあつ

た。気づけば初対面ということなどどうでもよくなっていた。皆のもっと話したい、もっと周りの意見を聞きたい、と言った好奇心が3日間のプログラムを濃くしてくれたと感じている。

一夏を共に過ごす参加者たちは皆優秀で、活発で、謙虚だった。そんな皆が目的を持って一箇所に集い、共に時間を過ごした3日間はパワーに溢れ、これから一緒に過ごす期間への期待をさらに膨らませた。同時に、彼らに食いついて行くために自身も頑張らねばと思った。春合宿が終わった今、私はこれまで以上の興奮と緊張を感じている。

国際教養大学国際教養学部
グローバルスタディズ課程2年
堀 晃希

防衛大学校研修 (6月)

■概要・目的

防衛大学校研修は、日米学生会議に欠くことのできない国防について学ぶことを目的に実施された。同世代の学生が日本の未来を担うという強い使命感をもって生活をしている学舎にて一泊二日の研修を行い、専門性の高い講義や学生との討議のほか、食事や宿泊を防衛大学校生と共に行い、交流する中で日本の防衛の現状について議論を重ねる機会となった。

■スケジュール

【日程】2018年6月4日(月)・5日(火)

6月4日

- ・概要説明
- ・一斉喫食
- ・特別講義①
- ・防大ツアー
- ・校友会見学
- ・学生討議

6月5日

- ・日朝点呼・学生舎見学
- ・特別講義②

■各プログラムの詳細

- ・概要説明

防衛大学校内での基本的なルールや、移動の際の動きについてなど各種動作について説明を受け、部隊行動の実践練習を行った。

- ・一斉喫食

全学生が一斉に食事を始める防衛大学校ならではの昼食に同席し、防大生とともに昼食を摂った。またその際、アメリカ合衆国陸軍士官学校からの学生2名と、防衛大学校生1名、日米学生会議参加者1名よりそれぞれスピーチがあり、両国の国歌を斉唱した。

- ・特別講義①

特別講義では、2018年変動のある朝鮮半島情勢について、国際関係論、朝鮮半島政治外交、核不拡散体制論を専門に研究されている、倉田秀也教授より講義を受けた。

- ・防大ツアー

防衛大学校内の様々な施設を見学させて頂き、防衛大学校のもつ長い歴史と、開校の目的、歴史について説明を受けた。

- ・校友会見学

防衛大学校の部活動である校友会を、3グループに分かれて見学した。

- ・学生討議

日米学生会議参加者と、有志の防大生が8グループに分かれ、文民統制や安全保障、AIと社会の今後などについて議論した。

6月5日

- ・日朝点呼・学生舎見学

早朝、ラッパの音に合わせて起床し学生舎前に隊列する学生を見学し、その後それぞれの大隊の寮内を案内して頂いた。

- ・特別講義②

近年新たな戦場として議論が盛んなサイバーについて、日本と主要国の動向について、野末1等陸佐をはじめ甘中2等海佐、渡邊2等空佐、須田2等海佐の4名の国防論担当教官に講義して頂いた。

佐渡島自主研修 (7月)

■概要・目的

流刑地として日本書紀にその名が登場するなど長い歴史を誇り、海に囲まれているが故に独自の文化を形成してきた佐渡島は、人口減少、高齢化などの課題先進地であり、自然環境だけでなく、社会現象の面からも「日本の縮図」といえる。また、

400年の歴史を誇る佐渡金山や、船大工による建築で有名な宿根木、日本で一度は絶滅にまで追い込まれたトキの生息地であるなど固有の魅力も備えており、米国開催の会議を見据え日本の魅力を学ぶ上で佐渡島は格好の場所であるということを踏まえ、地方創生と歴史文化を通して学ぶ日本の姿、という二つのテーマを掲げた。

現在日本では少子高齢化に輪をかけて若者の地方離れ、人口の都市への一極集中が進んでいる。東京など大都市では人口が過密化する一方、地方は労働力不足や限界集落、跡継ぎ問題であえいでいる。この波は佐渡島も例外ではない。しかし、佐渡内では既に、佐渡金山の世界遺産誘致への活動をはじめ、廃校を利用して佐渡でしかできない酒造りを試みている「学校蔵」、限界集落の活性化を図った「17人の限界集落虫崎で100人盆踊り」など、地方創生や町おこし、観光客誘致のための様々な取り組みが行政のみならず自治体や地元の企業を通じて行われている。このような取り組みについて学び、また自分たちに何ができるのか考えることで、日本社会が抱える問題にアプローチした。

また、佐渡島は流刑地として日本書紀にもその名が記されており、その歴史の長さが伺える。佐渡に流されてきたのは承久の乱で処罰された順徳上皇をはじめ、日蓮聖人、世阿弥など数多くの歴史上の人物たちであった。戦国期に金銀山が発見されると、徳川幕府は佐渡を幕府直轄地とした。

佐渡金山はその後1989年に操業を停止するまで400年もの歴史を持つ。この佐渡金山の金が日本、そして世界にどのような影響を与えたのかを考えることは、日本の歴史を教科書的にではなく、金というモノを通じてとらえ直すことで、日本史への新たな理解を促す。

この様な佐渡島独自の歴史的背景の中で紡ぎだされてきた能や鬼太鼓、人形浄瑠璃などは非常に興味深い伝統芸能である。しかし、伝統芸能は後継者不足といった人口減少の影響を大きく受ける芸能でもある。これらを守っていくために何が必要か、何を変えるべきなのか、グローバル化が進展する中での伝統芸能の在り方について考えたい。

さらに、離島である佐渡島はやはり漁業が島の産業の大きな柱である。しかし、安い外国からの魚の影響で日本は海洋国であるにもかかわらず水産物の国内消費量の約半分を輸入に頼っているという現状がある。これに輪をかけて、漁業従事者も人口減少の影響を直撃している。若い働き手のいない漁業従事者は外国からの移民に頼らざるを得ず、漁業における外国人労働者の割合は今後も増加すると予想される。2013年に和食が自然を尊ぶ日本の伝統的な食文化としてユネスコの無形文化遺産に登録されたが、和食に欠かせない日本の漁業は大きな転換点を迎えている。

自主研修を行うに際し、事前学習では佐渡島のみならず日本の地方が抱える課題や

魅力、実際に行われている取り組みについて、有識者の講演などを通じて広範に学んだ。その後の自主研修では、以上のテーマに沿って佐渡島で働く人、生活する人の「生の声」に耳を傾け、その実態を肌で感じることでより日本の地方についての理解を深め、地方を活性化させる取り組みについて考えた。

事前勉強会

■スケジュール

【日時】2018年6月3日(日)

【場所】日本航空イノベーションラボ

■プログラムの詳細

▼日本総合研究所主席研究員 藻谷浩介様 ご講演

著書『里山資本主義』で著名な藻谷様より「地方」をキーワードに、佐渡島から、日本の地方と都会、そして世界を見据えて若者が何をなすべきかお話を伺った。



JAL Innovation Labにてディスカッション

本研修

■スケジュール

【日時】2018年6月16日(土)~18日(日)

【場所】新潟県佐渡島

■各プログラムの詳細

6月16日（土）

佐渡島到着

▼佐渡金山見学

江戸時代から平成に至るまでの400年の歴史を、鉱山という視点から学ぶことができる貴重な機会。金銀は経済において最も大切な要素の一つである。金銀がどのように採掘されたのか、どこに流通したのか、どのように使われたのかを知ることで当時の様子が浮かび上がってくる。ガイドの方にお話を伺う。

▼松田祐樹様ご講演

佐渡芸能伝承機構の松田祐樹様に、鬼太鼓の現状と課題についてお話を伺う。

6月17日（日）

▼豊田光代様ご講演

朱鷺・自然再生学研究センターの豊田光代様に、トキが生息できる環境を作る上で重要な、地元の方々の合意形成についてお話を伺う。

▼学校蔵見学

廃校を酒蔵にして行っている、米からエネルギーまで佐渡から調達した「佐渡でしかない」酒造りを見学する。

尾畑酒造「真野鶴」五代目蔵元の尾畑酒留美子様に、立ち上げの苦労や酒造りへのこだわりについてお話を伺う。

▼宿根木フィールドトリップ

ガイドの方と船大工の建築で有名な宿根木を散策する。また、伝建地区制度の活用による持続可能な地域づくりへの取り組みな

どについて地元自治体の「宿根木を愛する会」の方にお話を伺う。

6月18日（月）

▼鼓童両津研修所訪問

両津研修所にて、国内外から太鼓を学びに佐渡に集まっている鼓童の研修生と交流する。また、鼓童文化財団専務理事の菅野敦司様にお話を伺う。

▼漁港見学

漁港を見学し、佐渡島の基幹産業の一つである漁業について、現状や課題についてお話を伺う。

両津港より新潟港へフェリーにて移動、解散。

■実行委員総括

佐渡島は、始め外国のような響きだった。遠い場所、そもそもどうやって行くのか。

自主研修担当となった際、日本ならではの文化を学ぼう、地味でも心に残る、日本の文化や精神をよりよく知る企画にしようと意気込んでいた。

そんな中、「日本の縮図」と呼ばれる佐渡が候補に上がった。

本土からも地理的に離れ、独自の文化しかない佐渡に行っても、決して日本はわかり得ない。むしろ、よりわからなくなってしまうのではないか、そんな懸念もあった。

今回のプログラムは人との触れ合い、体験を最重視し、実際に自分の足でその場を

歩き、その場で生きる人々に会うことに重きをおいた。例えば、宿根木ではいくつかの小グループに別れ、現地のガイドの方に驚くほどの技術と工夫が詰まった家々を案内していただいた。翌日の鼓童文化財団・研修生との交流は、目を輝かせて太鼓を学ぶ同年代に大いに刺激を受けようと思う。

研修を終えた参加者の感想も様々でした。皆の心の奥に残り、「問い」として残り続ける研修であったことを願うばかりだ。

第70回日米学生会議 自主研修担当実行委員

事後研修

■概要・目的

- ①佐渡島で学んだことを踏まえ、米国側の参加者に向けて、日本国内の課題、強さ、生かすべきところなどの現状を知ってもらう
- ②米国側と共有をした後、米国国内における様々な社会問題と照らし合わせ、日本との相違点を考え、文化、社会的背景の違いについて考察する。
- ③議論の成果を社会に向け発信することで日米学生会議を超えてより多くの人々に国の中での問題、対外関係の問題、そして国際問題という様々な切り口から、今後日本および米国がどうすべきなのか、改めて深く考えるきっかけを作る。

■スケジュール

7月中旬：プレゼンテーションメンバーの決定

7月下旬～8月中旬：プレゼンテーションに向け、佐渡島自主研修担当実行委員と、プレゼンメンバーがディスカッションを重ねる

8月：Washington and Lee Universityにて発表

■プレゼンテーションメンバー

怒谷彩香 / 嶋田幹太



佐渡島研修での学びを米国代表団へ発表

A large graphic on the left side of the page, partially cut off by the edge. It features a red circle on the left and a blue circle on the right containing white stars, resembling the top half of the American flag. Below the circles are horizontal stripes in red and white, also partially cut off.

■□第4章

本会議中の活動

第一サイト

ウィスコンシン州

マディソンサイト

■サイト概要

ウィスコンシンはアメリカ中西部の西北にある州で、湖に囲まれた街並みも美しい州都マディソンは学術都市として名高い。同市の2大雇用先はウィスコンシン州政府とウィスコンシン大学である。その高い教育水準からハイテク産業、特にバイオテクノロジーが発展し、現在は経済の中核を担うほどに産業が成長してきている。またマディソンは自由、進歩の気風が高い。過去にはカウンターカルチャーやベトナム戦争への反戦運動が盛んであった。州全体を見渡すと豊かな自然を生かした酪農や農業が非常に盛んである。ウィスコンシン州には世界に名だたる企業も集まっており、キックマンを始めとする日本企業の進出も非常に盛んだ。第一サイト、ウィスコンシンではバイオテクノロジー産業や農業州としての側面から産業と自然が共存共生する州のあり方に焦点を当てる。

■サイトコーディネーター

金澤つき美

佐々木彩乃

Nicole McNevin

Emlyn Mio Lee-Shalow

■サイトスケジュール

8月6日(月)

- ・アイスブレイキング

8月7日(火)

- ・開会式
- ・Lanterns for Peace
- ・分科会議論

8月8日(水)

- ・War and Peace 議論
- ・Chazen 美術館訪問
- ・分科会議論
- ・映画鑑賞

8月9日(木)

- ・Dairy Farm ツアー
- ・ウィスコンシン州フェア

8月10日(金)

- ・キックマン工場見学
- ・スキット
- ・分科会議論

8月11日(土)

- ・Farmers Market and Capitol Building Tour
- ・サイトフォーラム
- ・リフレクション

■宿泊先

University of Wisconsin, Madison

■各プログラムの詳細・感想

・オープニングセレモニー

▼概要

ウィスコンシン大学マディソンにて第70回日米学生会議オープニングセレモニーが開催された。Mya Fisher さま、Larry Ingraham さま、伊藤直樹さま、Bill White さまにお越しいただき、今後の本会議に向けてのお言葉をいただいた。

▼参加者の声

オープニングセレモニー、いよいよJASC が始まった。時差ボケよりも緊張と興奮が勝っていた。2度目の挑戦にして得たこの機会、1度目に選考に落ちた時の悔しさが思い出された。本当にアメリカにいるのだ。自分は今、あれほど憧れていたJASCの一員になれているのだという現実には圧倒されていた。

オープニングセレモニー、とにかく英語を聞き取ることに必死で、理解できない部分もあったが、講演者の方々のJASCにかける情熱はひしひしと伝わってきた。講演後、第26回目参加者のあるアラムナイの方と交わした会話が今でも強く脳裏に焼き付いている。「制服かっこいいね。」と話しかけて下さったのがきっかけだった。英語力や会議への不安を打ち明けると、「何も心配いらぬ。それに君の英語はちゃんと伝わっているよ。」と励ましてくださり、とてもホッとしたのを覚えている。最

後に、「What was your "life- changing experience" in JASC? 」と伺った。

「Making friends.」、その言葉が胸にぐっとささり心がざわついた。まだ2日目、これから人生を変えるほどの大切な友人ができるのだと、本当にそう思えた。だが、今の私は英語で話すことを恐れている。このままじゃいけない、彼と挨拶して別れた後、私はアメリカ側参加者の方へと足を向けた。

防衛大学校 3 学年 国際関係学科

吉田 恵理奈

・Lantern festival

▼概要

初日夜に、Tenny Park にて開催されたLantern for Peace に参加した。ここでは日本側の参加者4名が自らの平和への思いをプレゼンの形で発表した。日が沈んでからは参加者と地元の人たちが平和への思いを込めて作ったランタンに火をともし湖に流した。

▼参加者の声

本会議の第一サイト、Madison に到着した翌日の午後、現地の市民団体が主催する平和祈念イベント、Lanterns for Peace に参加した。春合宿の時に平和に関するパネルがあると聞いた時、原爆を経験した広島出身者として、あるいは今なお紛争地で働く軍属を親族に多く持つ者として、使命

感に近いものを感じてプレゼンターに立候補した。実際に当日は100人に近い聴衆の前でプレゼンテーションを行った。時差ボケの中、本会議初日から予想外にも徹夜することになったことは余談ではあるが、いい思い出だ。

だが、もちろん言いたいことを全て言えたわけではなかった。むしろほとんど言えなかったというのが正直なところだ。私が自分個人の意見を発言することとは違って、日米学生会議の参加者としての立場や責任があるが故に自分が本当に伝えたいことを腹にしまっておかなければいけなかったのは、実にもどかしかった。しかしそんな中でも、自分のプレゼンを聞いてわざわざ終わった後に直接話しかけに来てくれた現地の方がいたことや、参加者の平和に対する考えを深めるきっかけになったことなどを考えると、この経験は大変意義深いものだった。第71回日米学生会議でもこのように平和について考える機会が増えることを願っている。

国際教養大学国際教養学部 2年
タクール小迫 亜満

▼概要

2日目は朝から長崎にて被爆された方について書かれた本「Sachiko」の著者 Caren Stelson さんをお迎えして War and Peace Discussion を行った。Caren Stelson さんの本への思いや、Sachiko さんのお話

の後には日米両国の参加者から積極的な質問が出た。また4名の参加者が登壇したパネルディスカッションでは国境を超えて平和に貢献していく重要性を再確認した。



パネルディスカッションに参加した
参加者たち

▼参加者の声

日米関係を考える際、先の大戦の考察は欠かすことは出来ない。それ故日米学生会議の幕開けを告げるパネルディスカッションのテーマが「戦争と平和」で有ることは意義深いことだった。私は日本側代表のパネリストとして登壇した。

司会者である Pamela の質問は一つ一つが非常に重かった。平和とは何か。平和を目指すためにある程度の暴力は許されるか。明確な答えを出すことの出来ない問題である。しかしながら他の登壇者が国際関係分野を専攻する学生である中、普段「世界の秩序と平和」とは無関係な医学を専攻する学生として、より人々の生死や生活に密着した「平和」を会議参加者に提供すること

に意義があると考え、人々の健康という観点から平和を捉えた意見陳述を行った。ディスカッション後の質問で「如何に戦後の二国間関係を修復するか。」という問いに対し、私は民間外交の促進による相互理解の深化を提案した。これは米国での本会議を前にクラウドファンディングで基金を募って行った自主北京研修での経験に基づく。研修で討論した学生とは歴史認識が全く異なったが、一緒に北京市街を散策する中で友好関係が生まれた。日米間においても同様に民間外交が持つ力は大である。学生による民間外交として最古のトラックである JASC の意味と重要性を今後の日米関係を担う人材となる代表団に共有でき、将来の両国の関係強化に資する有意義なパネルとなった。

群馬大学医学部医学科 3年

手代木秀太

・ Chazen Museum 訪問

▼概要

Chazen Museum ではアジアを中心とする現代美術の展示が行われており、漢字を使ったアートや現代的な版画など興味深い作品が多く、参加者はそれらを楽しみながら鑑賞した。

▼参加者の声

芸術というものは、人を深い思考の底に、たゆたわせることがある。人が全身全霊を捧げて完成させた作品は不思議な空気と神聖さをまとい、どこか命のような力強さが漂う。

そんな芸術を集めた美術館は不思議な空間だ。時代や場所を越えて、人を和ませ、今ここにいるという感覚を忘れさせる。美術館での時間は人を豊かにさせる。

私達を案内してくれたのは、会社で心理カウンセラーとして働く、美術に造詣の深い女性だった。彼女と過ごした時の中で最も印象的だったのは、彼女がある一枚の大きな抽象画の前で立ち止まって私達に「何を感じ、何を思い浮かべるか。」と問いを投げかけたことだ。

絵を見つめながら、それぞれが自分の感情や意識と向き合い、それを言葉にして共有し対話する。答えはない、皆全く異なる、そんなことを当たり前を受け入れる。抽象画をもとにした対話はサラリと心地よく、静かに満たされ癒されるようだった。

芸術は、人のこころという見えないものを形にし、言葉を介さない世界で、それを人々に訴え、何か大事なものを心に残してゆく。芸術は人類の最も偉大な発明だという人もいるが、それは芸術が人のこころというものを共有する有効な手段だからなのかもしれない。しかし、言葉が介在しない芸術作品という形で表された人のこころを、敢えて対話という形で向き合うことで、発見したことも多く、新たな愉しみ方を教えてもらった気がする。

Chazen Museum の芸術は、今も私の中にしっかりと息づいている。

北海道大学歯学部 4年

豊福明日香

・Milk Source 訪問

▼概要

宿泊場所から約3時間バスに揺られて到着した MILKsource では、見渡す限り広がる牧場で牛が迎えてくれた。日本では見ることでできない大規模な牛舎に圧倒され、日米文化の違いを実感した。ツアー担当者の方から牛舎にいる牛たちの一生についてや、牛舎の仕組み、工夫についてのお話を伺った。普段当たり前で恩恵を受けている食卓の裏に、どのような事実が存在するかを見つめなおす必要性があるという点を、参加者はそれぞれに考えていた。

Wisconsin State Fair では日本とは全く違うお祭りの雰囲気を感じてもらおう、と企画されたもので参加者たちは思いっきりアメリカ側参加者と楽しんでた。

▼参加者の声

Dairy Farm と State Fair を訪ねた一日は、マディソンの地域性と産業について考える機会になった。

Dairy Farm に入るとすぐに家畜の強い匂いが感じ取れ、毎日のように摂取する乳製品が生産されている所でありながら、日常からは遠い所のように感じられた。乳牛はシェルターの中で育てられるため、酪農場でありながら牛の姿は外からは全く見られず、少し違和感を覚えた。ベルトコンベアに乗せられ機械で搾乳される牛の姿は、まるで工場で自動的になされる瓶詰めと変

わらない様に目に映った。シェルターで育つことは牛にとってより快適である、とスタッフの方はおっしゃった。機械化がその生産性を保つ上で大きな役割を担っていることがわかる反面、効率化を求めたビジネスを正当化するための言葉にも聞こえた。日常生活で手にするものの生産の裏側を垣間見て、消費者と生産者が、生産・流通と消費の両側から需要と供給のバランスやそれを取り巻く環境について考える機会を持つことの必要性を感じた。

State Fair は、その盛り上がりや出店、アトラクションを楽しむ場でありながら、地元の人が、自分の地域に対する誇りを再確認するための場でもあるように感じた。マディソンで盛んな乳製品や独特の食文化を模した出店が多くあり、地域と産業のつながりが強く感じられた。日本ではお祭りで地域の特産を食べるような場面は見たことがなく、とても新鮮な情景であった。地域というアイデンティティを築く上での State Fair が一つの重要な要素であるように思った。

立命館大学 経営学部国際経営学科
佐藤美緑

・キッコーマン工場見学

▼概要

始めに CEO の清水和生様にキッコーマンの歴史やアメリカにおけるキッコーマンの歩みについてのプレゼンテーションをしていただいた。その後工場にてアメリカに

おける醤油づくりの現場を見学した。様々な機械が活躍する現場では伝統と品質を大切にしながらも進化していく「醤油づくり」を学ぶ事が出来た。アメリカにある日系企業を訪ねる経験は世界を相手に戦う姿勢も同時に学んだ。

▼参加者の声

マディソンサイト、5日目。私たちはキッコーマン・フーズ社の工場を訪問した。

アメリカでは醤油と言えばキッコーマンと言われるほど、キッコーマンはアメリカでの醤油消費における絶大なシェアを誇る。私たちが訪問したマディソンの工場は、そのキッコーマンのアメリカでの流通において、中心的な役割を果たす場所であるようで、職員の方による講演とアメリカにおけるキッコーマンの歴史に関するビデオを鑑賞した後、工場内の見学を行った。

まず講演では「なぜキッコーマンのアメリカにおける拠点がここマディソンにあるのか」ということに焦点が当てられ、その理由として物流のための地理的要因、水や原材料の確保の容易さ、そして地域の労働力という3点が述べられていた。さらに講義の中で、この工場がマディソン地域社会の雇用を支えている一つの基盤であるとも述べられていた。そのため従業員はほとんど地域の住民が占めており、中には親子二代や三代でキッコーマンに勤務している人もいるとのことだった。

また工場見学において特に印象的であったことは、生産の過程の全てが完全に機械化されていたということだ。箱の積み上げや運搬といった従来は人力で行えそうな作業も全て機械が行っており、工場の規模が非常に大きいにも関わらず、従業員の姿はほとんど見られなかった。

このように日系企業が、日本とは異なる大量生産大量消費が特徴であるアメリカ社会において、適応するためにどのように事業を展開してきたか、また地域社会との経済連携だけでない密接な関係を知ることができ、非常に有意義な工場見学であった。

慶應義塾大学法学部法律学科2年

土谷里紗

・マディソンサイトフォーラム



▼参加者の声

Madison Site Forum は Agriculture と Peace の2つのセクターに分けて行われ、前半の Agriculture Panel では、州の農務省をはじめとした農業・酪農従事者4名をパネリストとしてお迎えした。議論内容は、

貿易問題や気候変動などのマクロな課題から、後継ぎ問題などのミクロな悩みまで多岐に渡っていた。特に印象的だったのは、中国政府による大豆の追加関税が、生産従事者だけでなく加工食品業者などにも間接的な経営上の悪影響をもたらしているという発言である。自由貿易促進や TPP 参入に前向きな彼らの視点は、保護主義に走るアメリカ政府の方針と異なり、非常に新鮮だった。



後半の Peace Panel には私を含め 4 名の参加者がパネリストとして登壇し、モデレーターとして国際的な禅道場を運営している Gordon Greene 氏をお迎えした。一般概論として“*No war, no conflict*”が平和の定義とされる中で、我々が議論したのは直接的に戦争と対比されるような「目に見える」平和ではなく、日々の平穏や心の安寧を対象とした「目に見えない」内なる平和 -inner peace- である。このような内容の特性から、各人の平和に対する個人的背景や意見を共有するという形で議論が進み、さざ波のような精神、乱心からの解放、精

神と身体の方が満足している状態、など、多様な平和の解釈がシェアされた。議論を通して平和に対する価値観を共有したことで、他への無知や盲目が一元的な視点を生み、違いを争いに変えてしまうことを学んだ。このような視座から、今回の Peace Panel は、JASC の目的のひとつである平和の実現において意義深いものであったと思う。

慶應義塾大学経済学部 PEARL 1 年
嶋田幹大

■サイト総括

第 70 回日米学生会議は、ウィスコンシン州マディソンにて幕を開けた。Cross Section of the Global and Local をテーマに、地域と世界の繋がりに注目するとともに、アメリカ中西部郊外での人々の暮らしや、自然と共生する生き方に触れた。また、広島・長崎への原爆投下について考え、講演や行事を通して平和について真摯に検討する機会となった。

第一サイトということもあり、参加者は緊張の面持ちであったが、滞在先である University of Wisconsin Madison 校は非常に緑豊かで広大なキャンパスで、徐々にアメリカ側と日本側が共に打ち解けあい、リラックスしていく様子が見て取れた。

初日はオープニングセレモニーに加え、Lanterns for Peace という原爆被害に対する追悼イベントに出席した。2 日目には War and Peace discussion・『火垂るの墓』鑑賞のプログラムがあり、2 日間を通

して参加者はこれまで受けてきた歴史教育や、日米間の歴史について改めて振り返り、未来に向けて平和をどのように実現するか議論を交わすこととなった。

8月9日には、Dairy farm を訪れ、マディソンの主要産業であるチーズ製造には欠かせない牛舎を見学した。アメリカにおける畜産業や、環境問題について厳しい現実を目の当たりにし、衝撃的な体験になった。その後、ウィスコンシンステートフェアでは、アメリカ固有の文化であるステートフェアで、地域の産業や産物に触れながら、各自楽しい時間を過ごすことができた。

8月10日は、キッコーマンを訪れ、伝統ある醤油作りの見学と、醤油がアメリカに根付くまでについて伺った。キッコーマンのウィスコンシン工場では、アメリカ中西部だけでなく、国内全域の数十%を占める醤油を製造・出荷しており、ローカルビジネスとグローバルビジネスの繋がりについて学ぶことができた。

最終日のサイトフォーラムを以て、マディソンサイトの全プログラムを終えたが、アメリカ中西部独自の文化や、郊外での人々の暮らしに触れることができ、素晴らしいサイトとなった。

マディソンサイトコーディネーター

中京大学総合政策学部総合政策学科4年

金澤つき美

第二サイト

バージニア州

レキシントンサイト

■サイト概要

バージニアは、独立戦争によってイギリスから独立した13州の一つである。植民地時代はポカホンタスの美談などでも知られ、現在では大学や軍用施設の基盤となっている。このたび訪れるレキシントンは、大自然に囲まれ、ロバート・E・リーやストーンウォール・ジャクソンといった南北戦争の英雄が静かに眠っており、一見すると時の流れから孤立しているようにも見える。しかしこの地域は、南部と北部が交錯する地理的特徴ゆえに、独特の歴史を紡いできた。直近では、白人至上主義者とその反対派が衝突して死傷者を出したことで注目を集めたシャーロッツビルに近く、現代アメリカにおける、分断の狭間に立たされているようである。レキシントンでは雄大な自然に抱かれながら、歴史の痕跡を手がかりに、多様性への信奉と人種差別や排他的なナショナリズムに揺れる人々の思いに寄り添い、アメリカ社会の現実と向き合う。

■サイトコーディネーター

藤本ミケイラ

豊坂竹寿

Kitanna Hiromasa

Ethan Mattos

■サイトスケジュール

8月12日(日)

- ・マディソンより移動

8月13日(月)

- ・Natural Bridge Tour

- ・分科会議論

- ・映画鑑賞

8月14日(火)

- ・シャーロッツビル訪問

- ・Riots and Conflict 議論

- ・フリータイム

8月15日(水)

- ・博物館見学

- ・Community Engagement パネル

- ・Special Collections and Tea セレモニー

8月16日(木)

- ・サイトフォーラム

- ・サイトレセプション

- ・リフレクション

■宿泊先

Washington and Lee University

- 各プログラムの詳細・感想

- ・Natural Bridge State Park 訪問

▼概要

Natural Bridge State Park を訪問した。鍾乳洞や岩からできた橋、ネイティブアメリカンの生活を紹介するエリアなど緑に囲まれながら様々な学びを得られた。



モナカン族の方からお話を伺う様子

▼参加者の声

特に印象に残っているモナカン族の保全施設訪問について述べたい。私にとってこの訪問は、文化継承の意義について考える良い機会であった。

モナカン族と近辺のネイティブアメリカン（以下、「N・A」）の統治方法は独特である。部族内にリーダーを置かず、部族間では合議制部族連邦を組み、中央集権というシステムはない。訪問前の予習段階から、私はその独自性に興味を抱いていた。

当日、N・Aの血を引く案内人からの説明を受けた中で、近年になってようやく州と政府から正式認定を受けたこと、それにより文化継承の補助金が得られるようになったこと、補助金は教育の中でも特に言語伝承に使用する予定であることなどを知った。南東部に位置するバージニア州のN・Aが認定されるのに時間がかかったのは、西部N・Aの認定の後に順位付けられたからだろうと推測した（西部開拓の歴史からN・Aは西部に集中している）。言語に関しては、

UNESCOが「言語は我々の文化と、そして集団の持つ記憶/価値の原動力である。」と述べられていることから、その保全は文化継承において重要といえるだろう。

文化とは、人間が、置かれた環境下を生き抜く中で身につけてきた術（教え）の結晶と捉えることもできるのではないかと思う。上記N・Aの統治方法は現代では考えられないようなシステムだが、だからこそ現代の私たちが学ぶことは多いのではないだろうか。そう捉えると、文化継承の意義は大きく大切なものでないかと改めて考えさせられる、そのような訪問だった。

山口大学医学部医学科2年

安日太郎

・シャーロットビル訪問

▼概要

約1年前に白人至上主義者による暴動が起きたシャーロットビル、その地を実際に訪れ、シャーロットビル副市長さんにお会いした。約2時間、日米の参加者から質問は尽きることがなく副市長さんも1つ1つに丁寧に回答してくださった。人種問題は日本で生活している限り問題の根本からの理解が難しいこともあり、参加者は何とか理解に近づこうとアメリカ側参加者とも積極的に意見交換を行っていた。



副市長が当時の様子を説明してくださった

▼参加者の声

副市長の弁明に、私は強い違和感を覚えていた。彼女は民主党員を代表して議会を運営していると述べた、一方で、彼女はコミュニティ全体にとって最善の選択を行ったと述べた。しかし民主党員が多数派を占める市議会の中で、「最善の選択」は多数決による意思決定と実質的には何も変わらないのではないのか？ 奴隷制のために戦った将軍という一般理解にとらわれ、教育者としてのリー将軍の功績を尊重する、州法やマイノリティの見解を過小評価したことを正当化しているように、私には思われた。

しかしその後、Santiago(アメリカ側参加者・歴史学専攻)との議論から、私の政治学的な視点だけではなく、彼の歴史的な視点を取り込み、新しい切り口で問題をとらえることができた。彼は、銅像撤去の論争が暴動に発展した原因を、リー将軍の銅像が象徴するものが曖昧で、各人が思い思いに解釈する余地があったことに見出し

た。そして、彼の銅像の前に、誰もが合意できる歴史的事実を両論併記で記述することが、暴動に対する予防措置になりえたのではないかと指摘した。この説明に説得力を感じた。

この経験から、ただ相手の意見を批判的に見るのではなく、自分と違う価値観・背景を持つ学生と議論することで、多面的な視点を取り入れる重要性を再認識した。それができるベストな機会の1つが、日米学生会議だと私は考えている。

松田実

・ Washington and Lee University 見学

▼概要

午前は Washington and Lee 大学内にある、第2次世界大戦後のマーシャルプランで知られる G.C.Marshall についての博物館を訪れた。午後はコミュニティやローカルビジネスについてのフォーラム、お茶会(日本風)、W&L University が所蔵する貴重な資料に関する講義を受けた。



学芸員の方から説明を受ける参加者

▼参加者の声

「地元には帰りたいが、稼げる仕事がない。」今の日本、特に地方が直面している若者の県外流出問題について、このパネル中考えていた。パネラーの皆さんは、スモールビジネスを地元で始めた理由として「生まれ育ったこの街が好き」「この街に恩返しをしたい」といった思いを挙げていた。では、日本の地方の若者は、地元へ愛がないから出ていくのだろうか。それは違う。「稼げる仕事がない」という部分に隠れた、パネラー（故郷に残る者）と日本の地方の若者（故郷を去る者）の、仕事自体に対する捉え方の違いに、この問題の根本的な原因があるのだと考えた。具体的に前者は、自ら仕事を『創る』ことで、幸せをつかみ、後者は、既存の仕事に『就く』ことで十分な報酬を得、その報酬で幸せをつかんでいるという違いだ。

このことは、日本の地方の若者に限った話ではない。現代日本社会で流行している「ワークライフバランス」という言葉の一人歩きがその表れである。バランス＝日常をワークとライフで分けて天秤に乗せ、出来る限りワークの時間がライフの時間を潰さないよう努める。まるで、仕事を幸せになる為の必要悪として捉えている様に見えるのだろうか。本来「ワークライフバランス」とはワークとライフが繋がりが合い、互いに高め合う相乗効果を指す言葉である。

制度やルールの問題ではない、人の感情にアプローチできない限り、前述した地方の問題は解決されない。働き方改革と謳われる今、私たちはもう一度、ライフとワークの関係を考え直すべきだ。

法政大学 国際文化学部 3年
南秀弥

・ Japanese tea ceremony（茶道体験）

▼概要

Washington and Lee university 内の茶室で現地の学生の披露の元、茶道体験をした。



茶道に関して説明を受ける参加者

▼参加者の声

「切磋琢磨」私たちがレキシントンサイトで滞在していた Washington&Lee 大学構内にある、洗心庵という名前の茶の間にあった、掛け軸に書かれてある言葉だ。なぜ切磋琢磨という言葉が選ばれたのだろうか。

日本を離れて 10 日目、アメリカ側参加者と毎日英語でディスカッションを重ね、アメリカのジャンクフードを食べ続けてい

た私は、いくら英語やアメリカが好きであっても日本が恋しくなっていた。そんな時、大学敷地内にこじんまりと佇んでいた、洗心庵を訪れた。白で統一された建物内にその場所があり、一見アメリカにいるとは思えないような”日本らしい穏やかな雰囲気”を感じた。茶道や日本文化を研究されている先生と先生のもとで学ぶ学生数名に案内され、私たちは畳でできた椅子に腰をかけた。すると、先生は掛け軸に関する説明を始めた。「切磋琢磨は、人と人とが励まし合いながら競い合って、共に成長していくこと」。日本人である私たちはこの言葉をよく使うが、改めてその意味を説明する先生の言葉一つ一つに日本人の素晴らしい性質を感じ、思わず聞き入ってしまった。”JASCを通して私たちは、異なる価値観や意見に日々戸惑いつつも、それを認め合いながら成長している”そんなことを考えながらお茶を頂いた。素朴ながらも、先生や学生たちの温かみを感じられるお茶は、仲間と切磋琢磨している中で疲れていた心や身体を癒してくれた。

洗心庵に訪れ、お茶に心や身体を癒してもらったところで、掛け軸に「切磋琢磨」という言葉が書かれている理由をわかった気がした。「仲間と切磋琢磨して疲れた時は、お茶を飲んで自分を癒してほしい。」先生のそんな思いが込められているのだろう。

慶應義塾大学 総合政策学部
総合政策学科4年 荒牧 侑希

・レキシントンサイト サイトフォーラム



サイトフォーラムパネルディスカッション

▼参加者の声

事前発表された Lexington サイトフォーラムのトピックを確認した時、運命めいたものを感じた。Mass violence と conflict prevention、これらは正に自身の関心に合致しており、大学院でも長らく研究してきたテーマだったからだ。そのため、即座にパネリストとして立候補する意志を固め、志望動機を書き上げた。

結果、無事パネリストとして選ばれ、自身の体験に基づく意見表明の場を得ることができた。壇上での意見交換は非常にスリリングで、JASC 全体を通して、最も強く印象に残っている思い出の一つだ。特にパネリストの一人である Professor Mark Drumbl の関心領域は私と重なっており、conflict に国際法の観点からアプローチするという同一の手法を採っていたことから、議論を深めるための新たな視点を幾つ

も提示して頂いた。他のパネリストからは主に内的 Conflict、心的 Violence にどう対処するかといった、違う観点からのアイデアを頂き、一部噛み合っていない部分を感じつつも、振り返ってみればこの多様性が全体の議論を更に面白くしたのだらうと思う。

他方、反省点もないわけではない。先ほど「意見表明の場を得た」と述べたが、惜しむらくは、少なくとも私の場合、「意見表明に留まってしまった」とも言える。自らの意見をベースに、他パネリストのアイデアを壇上で取り込んで融合させるような、よりインタラクティブな議論が展開できるよう、言語の面でも、知識の面でも、より自身を向上させていきたい。

東京大学 公共政策学教育部 国際公共政策コース 修士課程2年 吉沢翔平



サイト中に行われたタレントショーの様子

■サイト総括

レキシントンサイトは“Conflict and Consequence : Nature, Society, and the Past”をサイトテーマとして、社会における様々な対立点に焦点を当てた。

初日は“Conflict between Nature and Humanity”をテーマに、ナチュラルブリッジ州立公園を見学した。ナチュラルブリッジはネイティブアメリカンであるモナカン族の聖域であった。ブリッジをくぐってさらに道を進むと、復元されたモナカン族の小さな集落があり、当時のモナカンインディアンの暮らしについて学んだ。ヨーロッパからの入植者とネイティブアメリカンの対立は、文明を推し進める入植者と自然と共生するネイティブアメリカンという対立を表象するものでもあり、日本側参加者はアメリカ側参加者に対し、ネイティブアメリカンについてどう思うかなど積極的に意見交換を行った。

2日目は“Charlottesville riot”について学んだ。2017年8月12日に、シャーロットツビルで白人至上主義者とそれに抗議する人々との間で衝突が起こり、一人が死亡し十数人が重傷を負った。この事件にはトランプ大統領も含め多くの著名人、有識者もコメントを発表し、21世紀における人種主義の一大論争となった。ディスカッションでは、白人至上主義だけでなく、言論の自由や人種と経済格差など多くの論点について話し合い、理解を深めることができた。

3日目は滞在したワシントン&リー大学の中を散策すると共に、“Community Engagement Panel”を行った。特に大学散策では、大学の設立に財政面で大きく関与した初代合衆国大統領のジョージ・ワシントンをはじめ、同大学の学長にもなった南北戦争の英雄ロバート・E・リー、キャンパスが隣接するバージニア軍事大学を母校とする、マーシャルプランで有名なジョージ・C・マーシャルについての展示や貴重なコレクションを見学した。ワシントン&リーという一つの大学の歴史からアメリカの歴史を捉えなおす貴重な機会となった。

最終日はフォーラムとタレントショーである。フォーラムでは事前学習も含めサイトの成果を発表した。また、タレントショーでも参加者が歌やダンス、コメディなどで各自のタレントを披露した。タレントショーでは言語の壁を越えて、日本側アメリカ側に拘わらず大いに盛り上がった。

ワシントン&リー大学サイトコーディネーター

東京外国語大学3年

豊坂 竹寿

第三サイト

ワシントン D.C. サイト

■サイト概要

ワシントン DC は誰もが知るアメリカの首都で、ワシントン特別区として連邦政府の諸機関がありホワイトハウス、連邦議会、最高裁判所が置かれている。170 カ国以上の大使館や、多くの国際機関が集まり米国ばかりでなく世界政治の中心となっている。そこでの政策決定は金融から、外交に至るまで様々な分野に及び世界中が常に注目し続けているだけに自ずとグローバルリーダーたちが情報交換のために訪れる場と言えよう。また、歴史的記念碑や博物館、美術館も多くあり、年間 2000 万人以上の観光客が訪れるその魅力は広く、深い。

特に広大なスミソニアン博物館は米国の歴史を知る上で非常に興味深く、過去の日米関係を米国側から再考する機会にもなるだろう。そして、ポトマック河畔に足を運べば、尾崎行雄らの尽力によって贈られた、日米友好のシンボルとしての桜並木が連なっている。この地において、参加者は異なる文化、価値観、思想の共存を自身の目で確かめ交流を通じて相互理解を追求する。

■サイトコーディネーター

伊藤 江理華

李 呂威

Carolyn Hoover

Jacques Chaumont

■サイトスケジュール

8 月 17 日(金)

- ・世界銀行・IMF 訪問
 - ・アメリカンボウルレセプション
- 8 月 18 日(土)

- ・Women's Empowerment Panel
 - ・National Japanese American Memorial 見学
- 8 月 19 日(日)

- ・分科会フィールドトリップ
 - ・ナショナルモール地区見学
- 8 月 20 日(月)

- ・Six Party Talk Simulation
- ・サイトフォーラム

■宿泊先

The Washington Center

- 各プログラムの詳細・感想
- ・世界銀行・IMF 訪問

▼概要

IMF と世界銀行の方それぞれから各組織が何を指しどのような取り組みをしているのかについての説明を受けた。参加者からは扱いきれないほど多くの質問が出され非常に有意義な時間となった。日本側は直前合宿にて世界銀行駐日特別代表宮崎様のご講演を聴いていたこともあり、その内容と関連付けながら学ぶことができた。



世界銀行訪問



世界銀行での集合写真

▼参加者の声

第三サイトはアメリカの政治の中心地、ワシントン D.C. 最初のプログラムは国際通貨基金、世界銀行への訪問であった。早朝、レキシントンからバスを乗り継ぎ、ワシントン D.C に到着したのも束の間、着替えを済ませて電車で中心部へと向かった。スーツに身を包み、ワシントン D.C の暑さに汗を滲ませながら街中を早足で歩き、国際通貨基金の建物に到着した私は両機関のお話を伺えるということで、期待と興奮でいっぱいであった。

厳重なセキュリティチェックを終えたあと、国際通貨基金の理事会でも使用する会議室に案内された。24 人の理事のネームプレートのあるフカフカの椅子に座った人々は各々、興奮気味に写真を撮っていた。両機関のゲストの到着とともに講演が始まり、一同、真剣に耳を傾けた。

講演の中で私の印象に深く残ったことは IMF の Mr.Chang Yong Rhee が仰っていた、「アジア経済が世界経済において重要

な役割を果たしているにも関わらず、アジア地域における経済の知識人が少ないので、国際的な会議にそれらの人々を招待できず、アジアの考え方を取り入れることができないという問題がある」ということである。アジア経済における先進国の一つである日本に対して、そのような教養を備えたリーダーを生み出すことへの期待は大きく、それが使命であるとも感じた。JASC は将来そのような人材になれる人が多くいると感じた。私の描く未来像は自身が日本経済におけるリーダーになりたいと思っているので、ぜひその際は国際的な会議へのインビテーションを受けたい。

東京外国語大学 国際社会学部 3 年
鈴木 大雅

・アメリカボウルレセプション

▼概要

ワシントン DC の日米協会主催、アメリカボウルのレセプションに招待をいただいた。



アメリカボウルでの一枚

▼参加者の声

ワシントン DC 初日の夜は、ビルの屋上が会場のパーティで締めくくられた。ワシントン DC の中心部には高層ビルがほとんどなく、会場からは有名なワシントン記念塔などが一望できた。また、お寿司も振舞われるなど贅沢な時間であった。

さらに贅沢なのは、多くの人たちとの出会いがあったことである。例えば、America Bowl で優勝し、アメリカ旅行を勝ち取った高校生 3 人組。司会の方にスピーチを求められると、緊張の色を見せず、「この会場でマイノリティーなので話しかけてほしい」といった率直な言葉で周囲の笑いを誘っていた。彼らの堂々とした姿を見て、「大学生も負けていられない」という思いが強くなったことを鮮明に覚えている。

他にも、国際機関や自動車メーカー、商社で働かれている方、日米協会の方との出会いもあった。私が 2 年前にお世話になった日米協会の方と偶然再会でき、思い出話をしながら JASC で再びアメリカに来られたことの喜びを噛みしめることができた。また、JASC の大先輩の方が、自分と同じ大学出身でさらに同じ部活に所属していたということを知り、「頑張ってるね」と声を掛けられた際には身の引き締まる思いがした。

人と話すことに夢中になり、せっかく用意していただいたゲームの用紙に記入することをすっかり忘れ、景品が当たるチャン

スを逃してしまったが、全く後悔はない。私にとっては、話すことのほうが何倍も価値があったように思える、そんなひとときであった。

神戸大学 国際文化学部 4 年

佐野弘樹

・ Women's Empowerment Panel

▼概要

Brigid Schulte さんをお招きして Women's Empowerment Panel を行った。Overwhelmed: How to Work, Love, and Play When No One Has the Time の著者である Brigid Schulte さんと日本側の参加者 2 人（男女各 1 人）が登壇した。女性の社会進出が世界標準に比べても遅れている分野があるといわれる日本はいかに変わる必要があるのか、そのためにはどのような問題を解決する必要があるのか。すべての人に関わる問題であり、参加者も自分の経験をはさみながら積極的に議論に参加していた。



パネルディスカッションに臨む参加者たち

▼参加者の声

私はこの Women's Empowerment Panel にパネリストの一人として参加した。日米学生会議参加者からは私ともう一人の男の子がパネリストとして登壇し、作家のブリジット・シュルツさんをゲストとしてお迎えして、それぞれの経験も交えながらディスカッションを進めていった。私自身、人前でパネルディスカッションに登壇する機会はこれが初めてだったため、始めこそ緊張していたが、シュルツさんとモデレーターのもと、理論的な部分だけでなくより実践的、個人的な部分まで充実した議論をすることができた。特にフェミニストという言葉についての議論はとて興味深かった。シュルツさんはご自身をフェミニストとして定義せず、人権についての活動をしている人と定義されている。それは男女の機会の平等が一定以上保証された社会ではフェミニストは存在しえないものだが、現在の社会では生物学的性差による人権の制限があるため、その平等化を目指す活動をしているだけだからだ。また、フェミニストは将来的には消滅していくべきだと仰っていたことも印象的だった。一緒に議論をしたパネリストはもちろん、他の参加者にも多くの新しい知見をもたらし、最後の質疑応答では時間に収まりきれないほどの質問が上がった。21世紀における家族のあり方と働き方の分科会に所属していた私個人としても、家族と労働の密接な関係につい

てより深く考察する有意義な機会となった。

早稲田大学 国際教養学部4年 怒谷彩花

・ National Japanese American Memorial

▼概要

訪れたのは第二次世界大戦時に収容所に送還された日本人のためのメモリアルだった。今から何十年も前にアメリカに生きた日本人の苦しみや悲しみに思いをはせながら、歴史をいかに乗り越えて日米間の強固な関係をいかに今後も築いていくのかについても考えさせられた。



自身の体験を話す DC サイト
コーディネーターの Carolyn

▼参加者の声

私は、ジャパニーズアメリカンメモリアルを訪問し、人種差別と戦争について考えさせられた。当時、アメリカと敵対するイタリア系やドイツ系アメリカ人は、第二次世界大戦勃発時に財産やビジネスを取り上げられることはなく、収容所にも送られることはなかった。しかし、日系アメリカ人

だけが差別を受けた。私は、この事実を知って、憤りと矛盾を感じた。法律上同じアメリカ人であるのにもかかわらず、なぜ日系人だけが差別を受けたのかについて考えた。人種差別というのは、戦争時には法律、倫理、人権も無視され肌の色だけで判断されるのだと感じた。

さらに、石碑に日本由来の名前と米国由来の名前が刻まれており、それはまるで彼らがアメリカと日本の間に立って戦争に翻弄され苦しんでいた姿が写し出されているかのように感じた。彼らのアメリカ人としてのアイデンティティの葛藤について深く考えさせられた。

これを機に、私は第二次世界大戦を日本の立場だけではなく日系人の立場から考えることができ新たな価値観との邂逅を果たした。

関西学院大学 総合政策学部 国際政策学科
2年 庄坪 孝敏

・分科会フィールドトリップ

▼概要

本会議中は各分科会テーマに沿った議論を基本としており、その分科会ごとのフィールドトリップを行った。ワシントンDCは本当にたくさんの博物館や美術館が存在し、とても1日で関心のある場所を回りきることはできなかったが自由に計画を立てて過ごす一日は参加者にとって、また普段とは違った楽しみがあった一日になった。



フィールドトリップ後の集合写真

▼参加者の声

DCでRTごとに行き先を決め、一日自由に行動できるRT Field Tripで、私が所属するアイデンティティRTが行き先として選んだのは、国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館とアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館だった。この日の天候はDCに滞在した期間で最も穏やかだったが、数時間かけて人類の暗黒の歴史を目の当たりにした私の気持ちは本会議中でも最も暗かった。

この日、最も印象的に感じたのは国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館で見た展示だった。この博物館は地下階から地上階に上がるに連れて過去から現在までのアフリカ系アメリカ人の軌跡を辿れるようになっており、その最後に展示されていたのがオバマ前大統領のパネルだった。過去400年も迫害と差別の対象であった人種を背景に持つ彼がアメリカの大統領になることが、アフリカ系アメリカ人の歴史の中でもいかに大きな意味を持っていたかが分かった。しかし、その隣にはBlack Lives

Matter 運動の展示も置かれてあり、皮肉にもまだアメリカでの人種差別問題が現在進行形で存在することを痛感させられた。

人種や宗教などを理由に同じ人間から人権を奪われ、虐殺され、その歴史すらも長らく知られる機会がなかった人々がいかにして自身の威厳を保ち、結果として権利を獲得するに至ったのか。そして、実際にその人々の人権を奪い、権力を長期間に及んで行使し続けた人々は自身の行動をどう見ていたのか。これは、一日史実を眺めただけの私には到底答えが出せるものではなかったが、アイデンティティの違いが人々にここまでの残虐性を宿らせることもあると学んだ一日だった。

国際教養大学国際教養学部 2年 堀晃希

・ Six Party Talk

▼概要

終日4日目は朝から六か国協議の参加国アメリカ・中国・北朝鮮・韓国・ロシア・日本を参加者に割り当て1人1か国を担当する形で模擬六か国協議を行いました。国益を守り、最大化するために自らの手の内を明かさず、他者と協議し続ける難しさを感じる時間となりました。



それぞれの国の代表として話す参加者

▼参加者の声

このプログラムでは模擬六か国協議を行い、各人が担当国を持っていた。私のグループの日米韓露の担当者は、中国の狙いが北朝鮮の核廃棄にかかる負担額を少しでも減らすことだと予想し、中国の金銭面の負担を減らす代わりに、他の条件で譲歩してもらう作戦に出た。私は早く合意を締結したかったので、自分の担当国である韓国が払いうる最高額を提示した。北朝鮮は他国が費用を負担するほど多くのポイントを獲得し、中国も自国の負担が減るほどポイントを維持できるという条件だったため、両国が納得し、私達は合意することができた。

今回、私はあまり深く考えずに韓国が出しうる最高額を提示したのだが、終了後、そこまで多額の費用を負担しなくてもよかったと後悔した。シミュレーションでは、もっと熟考すればよかった、という笑い話で済むが、現実ではそうもいかない。交渉担当者は、結果に対する大きな責任を負っている。他国は何を考えているのか直接口

には出さない中で、持っている情報から相手の腹の内を探り、予想し、自国の主張とうまく折り合いをつけていく。限られた時間の中で、自国の利益を最大限に引き出すという外交官の責任の重さと同時に、国を背負って世界の人と渡り合うというやりがいも垣間見ることができた。

九州大学 法学部2年 岩本華苗

・サイトフォーラム

▼概要外交に関するパネルは国務省と日米学生会議のアラムナイの方をお招きして行った。また、当日の様子はNHKにて放送された。



サイトフォーラム

パネルディスカッションの様子

▼参加者の声

8月20日、旧・日本大使公邸にて第3サイト・ワシントンD.C.の締めくくりとしてサイトフォーラムを行った。100名近くもの大勢の方々そしてNHKのテレビカメラの前でソフトパワーをテーマにしたパネルディスカッションをさせて頂いた。

事前にトピックについて話し合いをした時から、アメリカ側と日本側の認識には違いがあった。日本側は文化的な側面を想像していたのに対し、アメリカ側は軍事以外の全ての影響力をソフトパワーと定義していた事に驚いた。

パネルが始まって最初の2つの質問は用意していた通りの回答をしたが、用意された文章では生きた自分の言葉で伝える事が出来なかった。

パネリストの一人の高井さん（JASC アラムナイ・現住友商事）のご意見を聞いている内に、ソフトパワーの定義は草の根レベルの文化交流も含み、JASCも一つのソフトパワーであるという考えに至った。今、JASC70に参加し、アメリカに来て、アメリカの大学に通う学生達と触れ合っている私達が実際に日米関係に貢献出来る事は何か、というのを考え始めた。そしてそれは、JASCを通じて日米の学生が相互理解をし、その人材が世界で羽ばたき国際理解を促進するということであるという考えに至った。また、その事が会議のプレゼンスを高める事にもなるという発想に至った。

この思考から、用意していた全ての回答を捨て、自分が今表現出来るありのままの言葉で話す事が出来た。仲間にも絶賛してもらい、「生き生きとしていたね!」と言われたのは本当に嬉しかった。この自分の思考を忘れず、世界にも、JASCにも貢献する事の出来る国際的人材になるためにも精進していきたい。

学習院大学経済学部3年 細越 賢

■サイト総括

日米学生会議では毎回必ず開催されるワシントン D.C. サイト。

多様な人々が集まり、議論し、そして米国を、世界を動かす決定が行われる場所である。「外交」に焦点を当てた分科会がない今年度、ワシントン D.C. は国際関係や外交問題について考える絶好の機会だった。整然と計画的に作られた政治都市、様々な記念建造物に、ホワイトハウス、スミソニアン博物館など米国の歴史、文化、伝統、何もかもが詰まった地である。

世界銀行・IMF 訪問、ワシントン D.C. 日米協会歓迎レセプション、日本大使館でのサイト最終フォーラム、ナショナルモールツアー。次々にビッグタイトルが並ぶ華やかなプログラムとは裏腹に、参加者に問いかけたのは、Connections and Partnership、すなわち「人と人の繋がり」の価値についてだった。

ピンポン外交、ソフトパワー、草の根レベル、そう言った言葉が昨今、飛び交う。外交の根本であると言われる人と人との繋がりは注目を浴びるが、市民レベルの繋がりに対する政治の影響は計り知れない。それを理解した上で、政治の中心地のこの場で、市民レベルの繋がり的重要性を考えるとというテーマは酷であったかもしれない。それでも JASC の意義について常々言及される折、

その根本は人との対話、議論、本音のぶつけ合いであり、そういう形のつながりにひたむきに挑み続けたい、そして今年の参加者にも挑んで欲しいという思いがあった。女性のエンパワーメントのパネルディスカッション、高校生や世界で活躍する女性リーダーとの交流など雑多ながらも人間の力の強さを実感できたのではないと思う。また、プログラムを作らず丸一日自由時間を設けることで、それぞれが互いに分科会内で何をするかを相談し、主体的に考え、調べ、作ることができる時間も設けた。

比較的時間に余裕のあった先の 2 サイトに比べると、あまりにもせわしく、地下鉄に乗るために何度、参加者と一緒に息切れするほど走ったかわからない。

めまぐるしいスケジュールだったと思うが、アメリカの政治の中心地で、普遍かつ強力な人の力を感じてもらえたのではないか。

最後になるが、学生の力だけでは到底成し得なかった様々なプログラムを開催するためにご尽力くださった世界銀行、IMF、日本大使館、日米協会、ISC、および日米学生会議アラムナイの皆様にご心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

ワシントン D.C. サイトコーディネーター
東北大学 医学部医学科 3 年
伊藤 江理華

第四サイト

オレゴン州

ポートランドサイト

■サイト概要

日米学生会議の開催地としてゆかりの深いオレゴン州、ポートランドは、雄大な山々と穏やかな気候に恵まれており、スポーツ・アウトドア・テクノロジー産業の企業も集中している故に持続可能性と経済成長を両立する。環境先進都市といわれるように、車社会の中で公共交通機関が発達している側面もある。

またヒッピー文化が色濃く残るポートランドは、LGBTQ に対する理解が深い街としても知られる。日本との関係に目を向けると、太平洋戦争時、ポートランドの日系人は強制収容所に送られ、過酷な生活を強いられた歴史があるが、戦後 72 年を経た今、その歴史的事実を知る。

現在では、過去の軋轢は見られず 100 社以上の日系企業が進出するまでになり、日本人に適した生活環境を形成している。このような過去を乗り越えてきた歴史から、参加者はポートランドでの都市の変遷と共に、日米学生会議を通じた日米の過去、現在、未来を再考する絶好の機会を得るだろう。

■サイトコーディネーター

長谷川信寿

押切彩

Emika Otsuka

Christina Zhou

■サイトスケジュール

8月21日(火)

- ・ワシントン DC より移動

8月22日(水)

- ・米日関係議論
- ・分科会議論
- ・フリータイム

8月23日(木)

Health パネル

- ・LGBTQ パネル
- ・分科会議論

8月24日(金)

- ・Wacom 訪問 テクノロジーと企業パネル

8月25日(土)

- ・ファイナルフォーラム
- ・アラムナイレセプション

8月26日(日)

- ・EC 選挙
- ・ファイナルリフレクション

■ホスト大学

Portland State University

■各プログラムの詳細・感想

- ・米日関係議論、分科会議論

▼概要

最終サイトで、これまでのプログラムで学んできたこと、見て感じたことを踏まえ、改めて今後米日関係はどうなるのか、どうすべきかを議論した。

▼参加者の声

この講演の数日前、私はワシントン DC にあるホロコースト記念博物館を訪れた。ユダヤ人であるという理由だけで、収容所に送られ、虐殺が繰り返された歴史を知ることができた。本講演を聞いて、1900年代にアメリカで起きた日本人移民排斥運動も、このホロコーストと同様な事例であると感じた。日系人であるという理由だけで、アメリカでの人権が認められず、収容所に送られることは、今の時代には考えられないことである。現在、日本人移民がアメリカで安心して暮らすことができるのも、排斥運動に立ち向かい社会を変えてきた先祖のおかげであると感じ、尊敬の念を抱いた。

講演のあとには、私達の身近な周りで問題になっていることについて話し合った。そこで挙げたのは、在日韓国人に対するヘイトスピーチに関してである。現代の日本でも、ある特定の人達に対する差別は未だに残っていたことに気付かされた。日本人移民が今と同様の人権をアメリカで手にできたのは、今から50年ほど前のことである。すなわち、数十年の間で人の考え方や世の中はめまぐるしく変化していくということだ。一人ひとりの勇気をもった行動によって、差別のない社会を実現することはできると感じ、私達にもなにかできることはないか考えさせられた。

立命館大学 理工学部ロボティクス学科4年 塩見涼太

・ Why JASC 議論

▼概要

日米学生会議のあり方、存在意義、分科会についてなどについての議論を行った。



議論したことを発表する参加者

▼参加者の声

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。」という理念のもと創設された日米学生会議だが、84年経った今、日本とアメリカを取り巻く世界情勢は大きく変わった。そんな中、日米学生会議が存在する意義は何であろうか。このような疑問をもとに "Why JASC Discussion" では、日本側、アメリカ側参加者がプログラムを振り返り、第70回日米学生会議から得たものと第71回日米学生会議に期待することについて率直な意見を交わした。

プログラムを通して、interpersonal gains や interpersonal relations を得ることができたという声が非常に多く聞こえた。ワシントン D.C のサイトフォーラムでア

ラムナイの高井裕之さんがおっしゃっていたように、私自身、日米学生会議は Japan-America pipelines of human capital を構築する最高の場であると感じた。一方で、分科会の議論に関しては、日米間の問題に関する議題も取り上げられるべきであった意見や、よりアカデミックな議論を期待する声も上がっていた。

今回のディスカッションを通じて、他の参加者の日米学生会議に対する熱い思いを知ることができた。そして、この情熱こそが日米学生会議が84年以上存在する所以なのではないかと感じた。

日米学生会議は第71回をもって創設85年を迎える。私は実行委員として参加することになるのだが、参加者とはまた違った視点から "Why JASC" を問い続けたいと思う。

国際基督教大学教養学部 2年 村上真優

・ Sustainability Tour

▼概要

Portland State University の構内におけるサステイナブルな運営のための取り組みについて大学からのガイドの方と共に見学を行った。



PSU におけるサステイナビリティについて

説明を受ける参加者たち

▼参加者の声

ポートランド州立大学は緑溢れる広大なキャンパスで、丘のような地形と自然の豊かさから、公園のような雰囲気のあるあたたかい場所だった。現に休日には地域住民によるマーケットが開かれていて、まさに人々の憩いの中心だ。大学はサステイナビリティの中心地でもあるようだ。

4種類のゴミ箱での徹底した分別。無機質な屋根の代わりに庭園で人の居場所となり、同時に環境を守るグリーン屋上。キャンパス内の大水循環装置。いたるところにあるコンパクトながら大容量の駐輪場。エスカレーターがなくても不便さを感じないどころか歩きたくなる美しい施設。地産地消のカフェテリア。よく考えてみれば誰にでも思いつく、やろうと思えばどの地域でも実践できる身近なことばかりだ。

大学外で過ごした時間が少なかったの、これだけでポートランドを語れるとは思っていないが、この街の最大の特徴を生んでいるのは30年以上前から人々の中に当たり前息づくサステイナビリティや環境との共存志向だと思う。ポートランドサイトの他のプログラムでも感じたが、地域への強い帰属意識もそれを作る要素になっているのかもしれない。限られた資源を大切に使うというより、今ある環境をどう美しく保ち、利便性と両立させるか。ポートランド州立大学はその自然と、システムの自然さで美しさが保たれている。居心地の良い素敵な場所だった。

慶應義塾大学 法学部政治学科2年
小杉優

・Mental Health Panel

▼概要

Mental Health の分科会があるように、精神保健の分野はますます逼迫する問題となるであろう。それらを踏まえ、日米学生会議全体として心の健康を考えようというテーマの元、ポートランド在住の専門家を呼びパネルディスカッションを行った。



Mental Health ディスカッションの様子

▼参加者の声

パネルディスカッションは講演者のあたたかい人柄もあって、とても和やかな雰囲気であった。講演者の一人が連れていたふわふわの毛のセラピードッグの存在も大きかったのかもしれない。扱う話題は薬物中毒や精神疾患なのに少しも悲痛さを感じさせない。講演者はそれぞれ自分自身の活動や過去の経験などを踏まえて、精神疾患に対する考察を語ってくれ、とても刺激的だった。

特に印象的だった話がある。ある人が病気になったとして、適切な治療を受けられるかどうかの決め手は年齢や性別、職業で

もなく、その人が住んでいる地域の経済的豊かさであるという話。集中治療室に何度も運び込まれては治療を受けて回復し、また悪化して運び込まれる、を繰り返してしまふ患者さんの話。本当に大切なのはなぜその人が何度も運び込まれるのかを考えることなのに、その点は見過ごされている。これらの話から浮かび上がることは、病院でできる“治療”には限界がある、ということである。最先端の治療法や人工知能による診断など、わかりやすく形があって“すごい”ものにばかり私たちは気をとられがちだ。しかし、本当に命を救う決め手になるのは、人とのつながりや社会の格差の是正など、もっと目に見えにくく地道なものなのかもしれない。

名古屋大学 医学部医学科4年 木下 朋

・LGBTQ Panel

▼概要

Mental Health の問題同様、アイデンティティ、LGBTQ も近年物議を醸している問題だ。同じく、専門家の方や実際にLGBTQ の運動に携わっている地元の活動家をお招きし、パネルディスカッションを行った。

▼参加者の声

10年前に、「自分の性的少数者としての経験を語ることで、私が他人の心を動かすことができる」と言われていても、私は多分笑ってしまったであろう。しかし、現在の私は、

私がパネリストになった LGBTQ+パネルを通して、性的少数者としての個人経験を語る大事さを二つ発見できている。

まず、他の性的少数者の代表として、彼らが抱えている問題を代弁できるということである。私のようなカミングアウトした性的少数者にとって自分のセクシュアリティについて語ることは普通であるが、そうでない性的少数者にとってはそれは相当難しいことである。つまり、私から見ると、自分のセクシュアリティを受け入れられることは特権である。そのため、その特権を使って、その特権を持っていない人たちを代表し、性的少数者に関する問題を社会に提起する責任がある。

私にとって、性的少数者を受け入れる社会を実現するための第一歩は、同性婚を認める法律を作るといった、大きな社会的変化ではなく、性的少数者について知らない人と性的少数者について話し合うという小さなことから始めるべきだと思う。社会が突発的に大きく変化すると、それによって多くの軋轢が生まれるが、草の根のレベルから性的少数者の応援者、つまり「ally」を増やすことで、性的少数者を完全に受け入れる社会を実現できるのではないだろうか。

電気通信大学情報理工学域 3年
メディア情報学プログラム

Adrian Wildandyawan

・ Wacom Center

▼概要

Wacom Center を訪問させていただいた。



起業についてのパネルディスカッション

▼参加者の声

ワコムという会社は、人類のクリエイティビティを刺激しイノベーションを起こすべく液晶タブレットやスタイラスペンなどの製品の生産に加え、映画製作への技術提供など幅広い分野においてテクノロジーを活用した事業展開を行なっている会社である。

ポートランドにある”Wacom Experience Center”は世界で唯一のワコムの公的な製作スペースであり、一般の人々もその技術を見て触れる事のできる場所である。僕たちはそこで、製品を眺めて体験するだけでなく技術開発に関わる方々から直接お話を聞く事ができた。ワコムの具体的な事業内容・企業理念やテクノロジーの紹介、今後の課題など、現在進行形で革新が進むテクノロジー分野の一端を担うワコムについて深く知る事ができたのは、現代社会への見識を深める上で良い学びであった。

特に印象的だったのは、映画『KUBO/クボ 二本の弦の秘密』の製作に関する話であった。アニメ製作においては主にCGが使われるが、このアニメではメインキャラクター等は精緻に再現された実物の操り人形であり、実際に人形を動かす事によってキャラクターの細かな動きが描かれている。これはCGとリアリティの織り混ぜられた新たなアニメ映画の形であるが、一方でCGのみで作られたアニメ映画と比較すると莫大な量の時間と手間を要する。しかし、ワコムスタッフはその時間と労力を全く惜しまない。まだ誰も成し遂げた事のない事をする事が彼らのモットーであり、やり甲斐でもある。僕はワコムスタッフの方々の貪欲な開発精神に心を動かされ、将来テクノロジーによって僕たちの生活がさらに豊かになっていく可能性を感じた。
東京大学法学部2年 宇波壮一郎

・テクノロジーパネル

▼概要

起業、ベンチャーという言葉が紙面を飾るようになり久しいが、実際にポートランドにて起業されている方々をお招きし、パネルディスカッションを行った。

▼参加者の声

「テクノロジー&起業」。どちらも平凡な文系大学生である私には縁のないものだと思ってきた。しかし、このパネルディスカッションは本会議中にあった数あるパネ

ルのなかで最も私の記憶に残ったものの一つとなった。

ガラス張りの窓と、大きなプロジェクターがある、「ラボ」という言葉が良く似合う空間で、和やかな雰囲気の中、パネルディスカッションは始まった。ビジネスや起業、テクノロジーに精通するパネリストたちが展開した話は、テクノロジーの可能性や限界、それをどのようにビジネスの世界に応用していくかなど、実に多岐に渡った。

その中でも、ポートランドと関わる話が多かったのが印象的だった。本会議の最終サイトとしてポートランドという地を訪れるまで、私はこの地についてほとんど知らなかった。パネリストたちの話から、ポートランドには新しいものを受け入れる気風が根付いていて、起業する人も多いことを知った。これはポートランドが様々な可能性を秘めた街なのだということを意味しているのではないだろうか。

パネル終了後にパネリストのRickと話した際に、彼はこんなことを言っていた。

「知識やスキルは確かに重要ではあるが、起業家に最も欠かせないのは夢であり、それに向ける情熱だ。」様々な起業家を育ててきた街、ポートランドに根付く自由の精神は、夢と情熱を持って挑戦し続ける起業家たち自身から生まれてきたのかもしれない。

東京外国語大学国際社会学部4年
常恵喬

・MOFA（外務省） Reception

▼概要

MOFA のみなさま主催の元、ポートランドの日本庭園内にて歓迎レセプションを開いていただいた。参加者はそれぞれ地元の名士の方々や在邦人でリーダーとして活躍されているの方々からお話を伺いながら、日本料理に舌鼓を打った。



挨拶するポートランドサイト担当実行委員

▼参加者の声

日本庭園ツアーでは、ポートランドと札幌の姉妹都市締結をきっかけに作られた日本庭園を訪れた。そもそも私はポートランドと札幌が姉妹都市であるという事実も、ポートランドに日本庭園があることも知らなかったため驚いた。日本庭園は広々としていながらも、間の使い方や枯山水の表現がとても優雅で、シンプルな庭園の姿から日本の良さを再認識した。また、ツアーのガイドさんの丁寧で熱のこもった解説や、ツアーと一緒に回った一般の方々の積極的な質問から日本は関心を持たれ、愛されて

いるのだと感じることができ、日本人として嬉しかった。アメリカに住んでいる人にとって、日本は遠く、日常で接触することのない異国の地であるかもしれないが、このように気軽にリアルな日本を経験する場所があることで、少しでも多くの人に関心を持つきっかけになるのではないかと感じた。

MOFA レセプションでは、ポートランドに駐在している社会人の方とお話をすることができた。日本企業で働く方や現地の日本人支援を行っている方など様々な分野で活躍する方達から、アメリカという国や、ポートランドという多様性のある都市に住むことや、文化の違いを乗り越えて働くことの難しさや楽しさを実際に教えて頂くことができた。将来海外と何かしらの接点を持って働きたいと考えている私にとって、収穫の多い充実した時間であった。

東京外国語大学 国際社会学部
中央アジア学科3年 山本采奈

・ファイナルフォーラム

▼概要

ファイナルフォーラムは日米学生会議3週間のプログラム中の分科会議論総括として、毎年各分科会がそれぞれの議論内容を発表し、社会発信をする場である。今年度はPortland State Universityにて、アラムナイのみなさま、大学のみなさまおよび地元の参加者の方に向け、それぞれが本会議の成果を発表した。



議論の成果を発表する参加者ら

▼参加者の声

ファイナルフォーラム、この日のために各分科会は膨大な時間をかけ準備を進めてきた。JASCでは毎年さまざまなプログラムが生まれ、参加者が経験するものは異なる。しかしこの日の緊張には共通するものがあることだろう。第70回の参加者たちにもその日がやってきた。開会挨拶、アラムナイの言葉、本会議のサマリーを聞きながら私はJASC70で過ごした時間を振り返った。春合宿で初めて日本側参加者全員と出会い、毎週のウィークリーミーティング、自主研修、勉強会、そして米国での本会議3週間。参加者一人一人そこに至るまでの思いは違うが、このファイナルフォーラムでその集大成を全員で築きたいという気持ちは同じであったように思う。私の分科会の発表順番は最後であった。先に行く文化会の発表がそれまでに起こったストーリーを想像させ、問題を抱えてきたのは私たちだけではないと勇気づけられた。私たちの発表の最中には不思議と緊張もなく、淡々と役割を果たすことができた。あ

とになってみて初めて私たちの達成したものの大きさを実感した。それと同時にこれをもってJASC70が終わりを迎え、新しいチャプターへとシフトすることに対する複雑な気持ちも芽生えた。名残惜しくも、時が止まることはない。この日を区切りにJASCもまた歩みを止めることなく、さらなる発展に向けまい進することを切に願う。

明治大学総合数理学部ネットワークデザイン学科3年 並木 祐太

■サイト総括

米国発開催の第2回日米学生会議は、ポートランドのリードカレッジで開催された。その後、10年前の第60回会議においても開催地に選ばれたポートランド。多様性を受け入れる土地柄と穏やかな気候が相まって、この度第70回会議の最終目的地という節目にも相応しい場所であった。

ポートランドサイトでは以下3つのテーマを軸に、プログラムのディスカッション内容やゲストスピーカーを選定した。1. Uniqueness and Specialness of Portland: What Makes Portland Special and Unique?、2. Modernity and Tradition: How Can We Maintain Traditions While Bringing New Changes?、3. Past and Future of US- Japan Relations である。

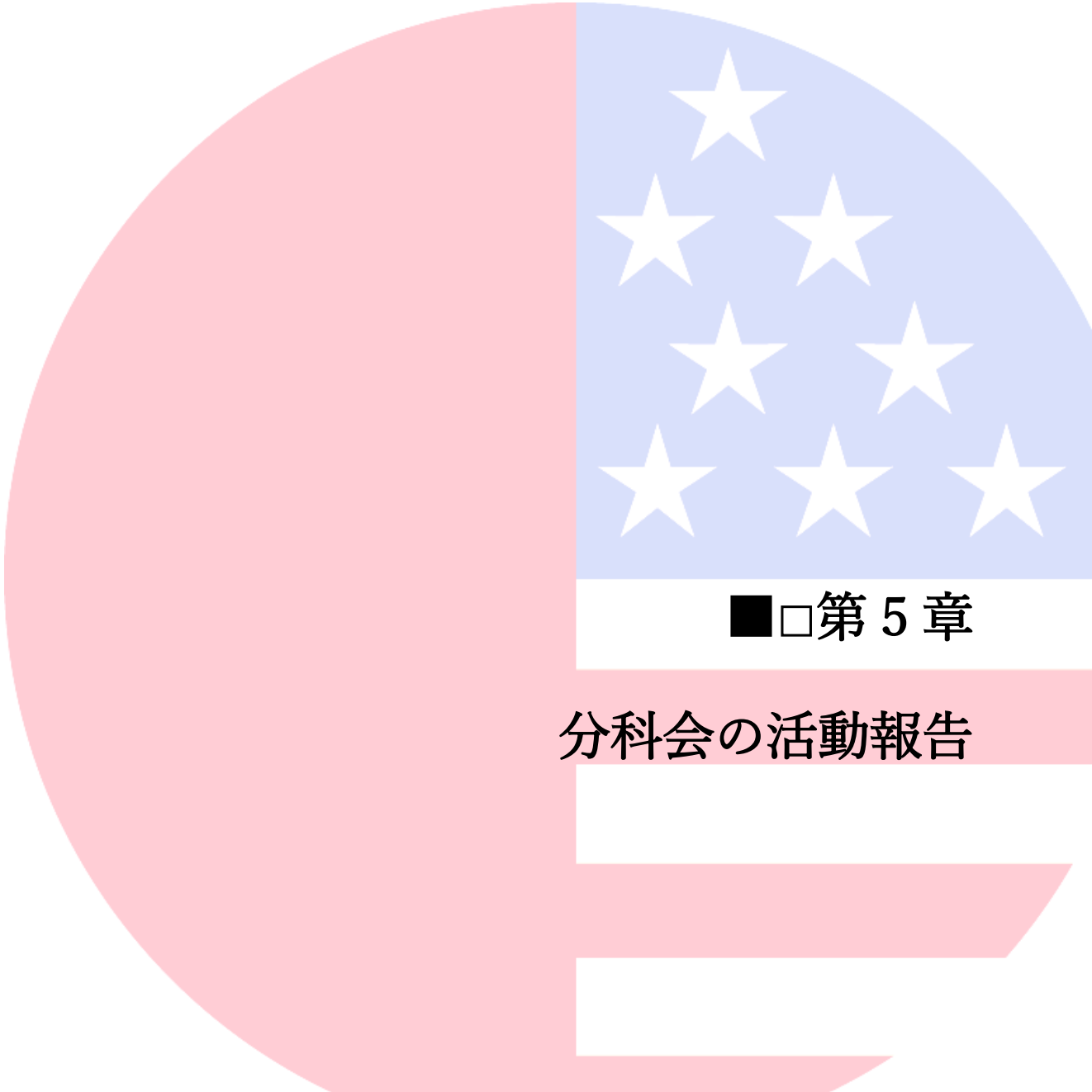
約1週間の滞在内容として、1日目は Japanese-American をテーマにした講演や

ナイキジャパン元社長の Bruce Brenn 氏による講演を拝聴した後、午後は大学ツアー形式でポートランド州立大学内の環境持続可能性について知見を深めた。2日目はパネルディスカッションをプログラムの主軸とし、精神面や公衆衛生に焦点を当てた健康及び LGBTQ+ の 2 つをテーマとした。3日目は株式会社ワコムにてトークセッション後、外務省主催のレセプションが開催された。外務省レセプションはポートランド日本庭園で行われ、ポートランドの街並みを一望できる中、拍手喝采のもと寺岡総領事のスピーチより開会した。多くのアラムナイにもお越し頂き現在と過去の日米学生会議において変わるもの変わらないものを共有し、気づきの多い時間を過ごした。4日目に本会議の集大成であるファイナルフォーラムを開催、三週間に渡って各分科会で昼夜通して議論した内容をすべてのグループが発表し互いの考えを共有した。最後の2日間は次期実行委員選挙とファイナルリフレクションで第70回会議を締めた。

最終リフレクションでは自分の想いの丈を歌に乗せて表現するもの、自身の成長や変化の様子を述べるものもいた。

全米1住みたい街として有名なポートランド。なぜ人々はポートランドに魅かれるのか。元来自然豊かなこの街がどのように環境先進都市としてテクノロジーと融合してきたのか。米国側実行委員主導のもと選定した様々なプログラムを通して、参加者たちの肌でその街自体に生きる文化という魅力を掴み取ってもらうことを目的とした。一方ポートランドには日系人が強制移住された過去がある。参加者には、表層面のみならず時代背景への理解にも目を向ける機会となれば本望である。

ポートランドサイトコーディネーター
学習院大学経済学部経営学科3年
長谷川 信寿



■□第 5 章

分科会の活動報告

第5章 分科会の活動報告

“The Potential of Innovation: Building an Awareness of our Technological Roots” Roundtable

「テクノロジーによる社会変革の可能性」分科会

■はじめに

衣、食、住…私達の暮らしは常に「最新」の科学技術の恩恵を受けてきた。その快適さから速さ、安さ、利便性を絶対的な価値として求め、現代に生きる私たちは物事自体や過程の意味を振り返ることを億劫に感じているのではないだろうか。しかし快適さを提供するテクノロジーは同時に私たちに様々なことを問いかける。人工知能や自動ロボット技術の発達による雇用の縮小やビッグデータによるプライバシーの侵害、今後も予期せぬ問題が次々に起こるだろう。今後いかにして社会変革を率いていくかという選択は、テクノロジーの発展を牽引する日米両国に対して一層切迫した問いになってくるのではないだろうか。いかに社会変革をデザインすべきか？「正しい」テクノロジーの発展はあるか？私達は発展を目的に発展を繰り返してはいないか？このような問を念頭に置き当分科会は私達が現代、そして過去を改めて振り返ることによって予測することができる今後の潜在的な社会発展軌道について議論することを目的とする。

■分科会メンバーの声

▼並木 祐太

私が分科会を志望した理由は自身と同じコンピューターサイエンス専攻の学生と知識教養を高めることであつたが、この期待はある意味で大きく裏切られることなつた。第70回日米学生会議に集まつたメンバーは専攻も教育バックグラウンドも多様性に富み、議論の分野範囲は想像を遥かに超えた。この分科会活動を通して、テクノロジーが社会のあらゆる場面に関わりを持っていることに気づき、これまでとは違つた観点から物事を考えられるようになった。また、アメリカ側参加者と意見自体が食い違ふことは少なかつたものの、プレゼンテーションを準備するにあたり、アイディアのまとめ方について日本側とアメリカ側参加者の間で大きく意見が分かれた。新しい価値観を受け入れることは簡単ではない。しかしながら、他人の考えを理解しようとメンバー全員で努力して、何とか乗り越えた3週間は、非常に価値のあるものであつたと考える。おそらく私は人と関わるのは得意ではない。夏の

本会議を無事に終えることができたのは分科会のメンバーが互いを思いやり、歩み寄ってくれたからだと考える。そして、私もその一員としてこの分科会に貢献できていたのなら幸いである。

明治大学総合数理学部ネットワークデザイン学科3年 並木 祐太

▼吉沢翔平

分科会について改めて振り返ると、何より他メンバーと一緒に談笑した時間が、各都市の街並みやカフェの光景と共に思い浮かぶ。それらの光景を凝縮させ、一言絞りだすとすれば、「人に恵まれた」という表現に尽きるだろう。議論の收拾がつかない時や、互いの意見が折り合わない時にも、チーム全体としてある種のマイペースさを失わず、真剣な議論の中にどこかリラックスした空気が流れていたのは、一人ひとりの個性が上手く調和していたからではないか。

私たちの議論は「技術」と「社会」を基軸に進行した。日米関係において依然政治・経済がメインストリームであることは衆目の一致するところだが、他方現代社会は技術変革の影響を抜きにして語れない。今回のメンバーにいわゆる理系の学生は非常に少なく、前提知識の共有に時間を割くこともあったが、私は、必ずしも JASC で高度に専門的な議論を取り扱わなくても良いのではないかと考えている。私たちの議論の目的は、新技術の開発でも、革新的 IT サービスの提供でもなく、技術がどのように社会を変え、どのように変えられるのか、その連関を明らかにすることだと思うからだ。その意味では、議論の末、「技術が生みだす倫理的変容」を最終発表テーマに選んだ私たちのチームは、求められた役割を多少なりとも果たしたと考えて良い。今後の JASC にも、技術畑の学生を惹きつけ、多様性と幅広い視野を確保するために、テクノロジー分科会が残り続けて欲しいと切に願っている。

東京大学 公共政策学教育部 国際公共政策コース 修士2年 吉沢翔平

▼小杉優

69 回の報告会でコーディネーターの彩乃が熱く JASC の魅力を語る姿を見て、「この人の分科会に入りたい、一生の仲間になりたい。だから JASC に応募したい。」と直感で思った。念願叶ってこの分科会に入ることができた。

テクノロジーはこの銀河系の全てがその議論の対象になる。実際に持ち込まれた議題も、サイバーセキュリティ、医療、環境、兵器、人工知能など多様だった。本会議が始まり、広すぎる議論対象と限られた時間との葛藤を誰も口にしないまま最初の一週間が過ぎた。ひとりのアメリカ側参加者と彩乃と、日米両サイドの不安と溝の解消を図るべく、議論の方向性

を整理した。そして分科会のテーマは広く議題をカバーできるとともに、テクノロジーにより人の生活が豊かになること、すなわち社会変革を考える1つの観点になりうる、技術的進歩と倫理的な是非によるスピードダウンの対立構造になった。

分科会メンバーは一見全く似ていないが、互いを尊重しすぎるくらい批判しない人ばかりで、声に出せない誰かの不安を吸収して解決しようとする。よく考えると互いにどこか似ていた。無言の不満がいっぱいにならないうちに一度立ち止まり、リスタートできたからこそ、その後の議論が充実したものになっただけではなく、かけがえのない仲間として分科会が大きく飛躍した。そして特にコーディネーターの彩乃は、事あるごとに相談できる大切な仲間になった。こうして私は1年前の直感が正しかったことを証明するとともに、8人の大切な仲間を得ることができた。

慶應義塾大学 法学部政治学科2年 小杉優

▼松田実

私が分科会に持ち込んだテーマは、科学技術が国家安全保障に与える影響、とりわけ AI の兵器化に関するものだった。

本会議で痛感したのは、前提知識が共通理解となっていない場合、議論が非常に困難になる点だった。国防総省や Google といった巨大組織がステークホルダーなのだから、これはアメリカ側参加者の方がよく耳にする話題だろうという私の楽観主義は簡単に崩壊した。

しかしこの状況からは、失うものより得るものの方が大きかった。第一に、兵器化された AI とは何か、適用される国際法は何かといった基本情報から共通理解の階段を積み上げることで、私自身の問題意識を明確にすることが出来た。

第二に、共通理解を踏まえた上での、専攻分野の違う学生からの抜本的な問いや素朴な感想には、私が無意識に思考の枠から除去していた見解(例えば、「人間が手を汚す必要がなくなるなら、市民は戦争という選択肢を選びやすくなるのでは?」といった問い)が幾つもあり、一見自明に見える質問でも突き詰めて考えることの大切さを周囲から教わることになった。第三に、私の主張がニッチで難しいと同様に、他の参加者との議論も専門的で、多くのことを考えさせられるものだった。特に SNS が理想とする世界の是非に関する議論は哲学的で、議論すればするほど論点をより厳密に出来た。

相手の理解を1から100に到達させる困難と楽しさを学ぶ有意義な3週間だったと、今でも感じる。

東京外国語大学 国際社会学部 国際社会学科3年 松田実

▼コーディネーター後記

「法学部の君がテクノロジーの分科会のコーディネーターを務められるのか？」
1年を通して何度この質問をされたかわからない。しかし、この言葉が現代における問題の1つを表しているのではないか。

私はテクノロジーについて様々な視点を持ちながら議論する為に分科会を作った。現代社会は間違いなくテクノロジーが先導している。新しいテクノロジーが社会に変化を起し、社会の仕組みが変わり、人の生活様式が変わり、世界が変わり、時代も変わっていく。

しかしテクノロジーは私たちに利便性を提供してくれるが、仕組みは難解で忙しい現代人は理解する努力は減多にしない。特に私のような文系は「そういう理系のことは無理」と考えようとしめない傾向がある。私はこの部分に危機感があり分科会を作った。理系、文系と物事を分けずにお互いが歩み寄り、知恵を出し合い、社会を創っていくのが本当の在り方なのではないか。さらに、日米は世界でトップクラスのテクノロジー産業を有する。つまり、世界を変えうるテクノロジーについて日米学生会議にて議論することは非常に意味があることであった。

分科会メンバーは分科会の議論にあらゆる方面からの知識や経験を提供してくれた。コンピューターサイエンスから政治を学ぶ者まで多様な人材が集まる中で、テクノロジーに「教育」「医療」「戦争」「サイバーセキュリティ」などの題材を結びつけながら議論を進めた。

テクノロジーは幅広く、参加者の理解の差も顕著だ。そんな中、その分野に詳しい者が分かりやすく説明し、質問が出て理解がさらに深まっていく。そしてその過程を経て未来を考える議論が始まっていく。助け合いなしには成り立たない議論だった故に初めは互いに遠慮があり上手くいかない節も沢山あった。しかし分科会の仲が深まるにつれて「わからないから教えて」「これ説明しようか？」と皆が積極的に関わりあうことで議論が進展していった。

この分科会が意味することは参加者によって違うと思う。だがこの分科会を通し、彼らに出会い、3週間顔を突き合わせて議論をした記憶が私から消えることはない。また参加者にとってもそうであってほしいと願わずにはいられない。

第70回日米学生会議副実行委員長
九州大学法学部3年 佐々木 彩乃

“Mental Health:Progression though Public Health, Policy, and Precision Medicine” Roundtable

「人間の「精神」を考える～現代社会における心の健康」分科会

■分科会概要：

古来より、人間は「考える」生き物として己の思考や思想と向き合い続けてきた。時代はグローバル化し、AIの進化は凄まじい。日々の生活もデジタル化する中、人間の思考と「心」はアナログで、感情という時に厄介なものとの格闘が続く。故に、過労、ハラスメント、薬物等、社会問題から経済問題まで多岐に渡る精神のバランスを崩す危険因子がある。元来、精神疾患はそれだけでタブー視され、社会全体で目を背けてきた。一方、東日本大震災などの災害において精神保健は脚光を浴びる。漠然と「心のケア」と呼ばれるこの分野は可視化できず、具体的な定義が難しい。精神の「健康」とは何か。生活の質はメンタルヘルスとどう関係があるのか。声なき声をどう掬い上げるか。当分科会ではこうした問いを考えるにあたり、公衆衛生学や行政学、心理学などに加え、個や集団という視点のアプローチも求める。科学技術の力だけでは解明できない分野として、ますます逼迫する問題となるであろうメンタルヘルスに焦点を当て、個人は、社会は、世界はどうすべきかを模索する。

▼事前活動：メンバーが地方に全員散らばっていたこともあり、フィールドトリップなどの実施は難しかったが、毎週必ずミーティングを行い、今自分たちがどの段階にいるのか、何をすべきかを時には立ち止まり、振り返りながら丁寧に議論を進めた。メンバーが医療専門の専攻であることを考え、広い視点から議論ができるように工夫ができたように思う。

▼分科会メンバーが定めた目標

メンタルヘルスに関する Stigma を取り除くのが最優先事項であり、そのための方策を考え、アクションプランを提示する。

▼全体の概要・流れ：

「心」や「精神」、「健康」は定義づけが難しく、考える人の数だけ異なる考えがあるだろう。しかし、ベースラインとしての合意が必要と考え、まずは「健康とは何か」「精神の健康とは何か」という問いを考えた。時間をかけすぎてしまった印象もあるが、議論が迷走した際、原点として戻ってこられる場所があったのは有効だったと思う。本会議開始後はアメドリとともに自殺問題や stigma の問題などを包括的に議論していた。

■参加者の声

▼木下朋

私たちのテーマは、精神疾患とそれにまつわる偏見への対策、という非常に重いものだったが、普段語ることが難しい話題である分、それについて議論できたことは非常に貴重な体験だった。6人のメンバーは過去に自分や身近な人が精神に問題を抱えていた経験から、メンタルヘルスに関心を持ってこの分科会に集まった。難しい問題を扱っているにもかかわらず、常に笑いの絶えない楽しい分科会にできたのは、繊細さと知性、そしてユーモアを併せ持つ、素晴らしいメンバーに恵まれたからだと思う。

また、引きこもり問題で日米の比較をしたり、会社や学校が精神疾患を発症した従業員や学生にどう対処すべきかなどを議論したりしたのも興味深かった。最終的に私たちは、色々な次元のコミュニティにおいて精神疾患についての正しい知識や対策を広める、という提言に落ち着いた。分科会の時間が本会議中3週間で合計20時間しかなかったことを考えると、十分な結果だと思う。でももし、分科会の時間が200時間くらいあったなら、実際にコミュニティレベルでどのような取り組みがなされているかの日米比較といくつかのケーススタディをしてその有効度を測っても面白かったかもしれない。

分科会のメンバーとは一番長く一緒に過ごしたので、分科会の議題だけではなく、様々なことについて話し、彼らの質問の仕方や問題解決の仕方などから、本当に多くのことを学ばせてもらった。どうもありがとう。

名古屋大学医学部医学科4年 木下 朋

▼豊福明日香

渡航前、私は自分の感情は自分でコントロール出来るし、何があっても冷静に対応できる、そう踏んでいた。だからこそ、JASC という空間でまさか自分が普段とかけ離れるほど脆くなり、感情的になるなんて想定外だった。こんな自分の奥底に眠っていた一面が引き出されたのは、偏に精神 RT のメンバーのお陰であり、3週間もみっちりと同じ空間で相手と向きあおうとし、同時に嫌になるほど自分の弱さや甘えに直面するという得難い経験をしたからだ。

精神 RT では、人間の心の健康の定義を議論した上で、鬱病、引きこもり、自殺などの精神が大きく関与する問題にフォーカスを当て、精神疾患への偏見が根強い現代社会の中でいかに心の健康を担保するのかということ考えた。

私達がたかだか3週間話し合ったからといって、これらの問題がすぐに解決するわけでは

ない。それでも、この議論で考えたことを私達が、周囲の人に丁寧に伝えていくことで、少しずつでも誰かの意識が変わり、それが波及し、安心して生きることができる人が増えればいいと思う。

最後になるが、精神 RT のメンバーとして JASC70 に参加できて本当に良かった。コーディネーターが人間としてとても魅力的であるのは勿論、メンタルヘルスの分科会に共感して集結したデリの皆の興味関心や知識の広さと深さ、物事の捉え方・考え方、相手を気遣うデリケートな陽気さには、いつも感銘を受けていた。私も皆のように人間として大きくなりたいたいし、もっと高みを目指して頑張りたい。

北海道大学歯学部4年 豊福明日香

▼手代木秀太

私は普段医学生として研鑽を積むと共に、公衆衛生学研究室でも研究をさせて頂いている。したがって当分科会テーマ「社会における心の健康」を議論することは比較的容易だと考えていた。しかし、本会議を通じ精神保健の問題は複雑で解決は一筋縄ではいかないことを改めて認識させられ、思い上がりは打ち砕かれた。

本会議を迎える前も日本と米国では精神保健を取り巻く環境は異なることは知識として持っていた。しかしながら、両国の職場や教育現場における習慣、文化の違いはあまりにも大きかった。米 IT 企業におけるリベラルなイメージからかけ離れた、利潤追求を目的とする苛烈な競争社会の実情が、情報科学専攻の米国学生から共有された。その様な風土を持つ企業に対し、如何に精神に問題を抱える従業員を実践的に保護させるか検討することは極めて困難だった。

また、精神保健の問題をより複雑にしているのは国の違いだけではなく、個人レベルの差異も大きいことが本会議で再認識された。公衆衛生的な観点からはコミュニティによる精神保健への働きかけが考えられるが、集団に所属することが苦痛と感じる人々も存在する。その様な価値観を持つ人々への精神保健のあり方は従来型の所属がある人々への対策のみで改善されるのか、議論の余地があると感じた。

世界的な課題である精神保健の問題に、国籍や背景の異なる学生と議論出来たのは、貴重な機会であり、医師として患者さんの抱える社会的背景への理解を深化させることに役立つと考える。

群馬大学医学部医学科3年 手代木秀太

▼安日太郎

一度社会人を経て大学に編入した私には、会社勤務時にうつ病に罹りかけた経験と友人を自殺で亡くした経験がある。メンタルヘルスを分科会に選んだのも、これらの経験を体系的に振り返り、議論する仲間と共に理解を深めることが出来ればと考えたためだ。

本会議を通しての学びは多くあった。中でも Final forum の成果発表時に同期から投げかけられた質問が印象に残っている。「家庭内虐待など、支援の手が行き届かない“隠れた患者”にどうアプローチしていけるか」という彼の問いかけは、精神疾患において極めて重要な課題を端的に突いていたと思う。そしてその問いかけは、将来医師として患者の治療にあたる私自身が持ち帰るべき課題として認識している。

分科会終盤に起きた他メンバーとの衝突も学びであった。Final forum 準備段階において、私のミスコミュニケーションがきっかけで分科会が空中分解寸前の状態にまでなった。この経験は私の人生において最も苦い経験の一つと言えるものであり、消化していくにはまだ時間が必要と思う。しかし、自身の性格や能力における改善点を知ることが出来た点において最も学ぶべきことの多かった経験であったとも言える。

本会議を通して得られた成果はどれくらいかと聞かれると、6割と答えるだろう。しかし、それは私自身にリーダーシップ力などの能力が足りていなかったためと捉えている。本音を記すとすれば、本当に悔しい経験をした夏だった。ここで得た経験を今後の人生においてどう活かすかで私が本会議に参加した真価が問われると思う。悔しさを胸に、新たな一步を踏み出していきたい。

山口大学医学部医学科2年 安日太郎

▼コーディネーター後記

多様性を前面に押し出す日米学生会議では前代未聞ではないだろうか。

テーマを鑑みて必然と言えるかもしれないが私を含め日本側は4人が医学部生、1人が歯学部生という驚くほどの専門集団が当分科会だった。本音を言えば、選考が終わり、このメンバーを見たとき、多様な視点から議論したいと思っていた私には想定外で不安しか感じなかった。それでも正面から向き合おうと務め、納得いくまで議論できる場を提供したい、という思いからファシリテーターとしてのみ関わり中身については意図して介入しなかった。自分で点数を付けるのならば、出来は70点ぐらいだろう。自己評価が甘いだろうか。

知識面でのすれ違い、議論の方法の違い、そして人間関係での葛藤。「心」、「精神」、「健康」、それらの言葉がいかに多様な事象を包括しうるか。定義づけは難しく、机上の空論から脱却

しようと必死だった。目に見える動きがあり「疾患」と名付けられる時もあれば当然そうでないときもある。教育や啓蒙活動などの安易な解決策の提示に終わらせることもできた。しかし、簡単に答えが出ないからこそ、各自が持ちうるあらゆる知識、経験と想像力を最大限すり合わせ、丁寧ながらも着実に前に進みながら思考を深めることができたのではないか。互いに学業や部活動などで忙しく、なかなか全員が腰を落ち着けてじっくり議論する、というのは難しかった。が、折々にふれ興味がある分野の論文や記事をシェアし、意見を共有する姿勢はとて頼もしく、コーディネーターとして嬉しく思った。

社会発信を大きな目標とし、できれば論文を書ければ、という話もしていた。しかし、時間には限りがある。コーディネーターとして Big picture を見ていたつもりだが、目標としていたアクションまでは今ひとつ辿り着けなかったことに悔いが残る。

何かを生み出したわけではないかもしれない。この分科会がメンバーにとってどんな意味を持つかも未知数だ。人間関係の大きな縛れもあった。口には出せないけど嫌だったことも、どうしたらいいかわからずに自分の無力さに絶望して部屋でこっそり泣いたこともある。ファイナルフォーラムの前は丈夫なはずの私の胃に穴が空きそうだった。それでも実行委員としての仕事に追われ、疲れた顔を見せた時にはメンバーが必ず声を掛けてくれた。この分科会の存在、彼らの存在が私をどれだけ救ってくれたか計り知れない。彼らのために、と思って準備したことや考えたことが、実は当の私を一番成長させてくれたのでは、と懐かしく思い返す日々だ。

4ヶ月間、内外の葛藤と衝突しながらも、答えのない問いに臆することなく向き合ったメンバーを心から誇りに思う。互いに多忙だと思うが、同じ学問の領域で再び出会うこともあるだろう。何かの折に、必死で向き合ったこの繊細で気まぐれな議論を思い出して笑いあえたら、コーディネーターとしてこれほど嬉しいことはない。メンバーが再び揃う日を楽しみにしながら、筆をおくこととする。

「人間の精神を考える～社会における心の健康」分科会コーディネーター
東北大学医学部医学科3年 伊藤江理華

“Work and Family: Changing Roles in Society” Roundtable

今日における働き方と家族のあり方

■分科会概要

慣習に囚われない家族形態の出現は働き方に選択肢を増やし、我々の選択はこれまでの「家族」の概念を揺さぶる。妻が家庭を守りながら子供と共に夫の帰宅を待つ既存の形式ばかりではなくなり、個人の重視する要素によって家族の在り方や働き方は多岐に渡る。言論の自由や個人の権利が叫ばれる現代では、一人の発した声が、人種や性別、セクシャリティに対する社会の目によって抑圧されてきた人々の不満を共鳴させて大きな波となり、私たちに柔軟な生き方を提供してきた。一方で、先進的な考え方は時に既存の価値観と衝突しかねない。社会は仕事における女性の活躍を可能にしたが、それ故に男女の役割における平等性を過度に重視し、家庭内や社会における摩擦を引き起こす。人間の生活の基盤となる家族と労働は、今や再考の時ではないだろうか。私たちが近い将来、仕事と家庭の中心に立っていくうえで、どのような選択の可能性を社会に望むのか。人生の選択に直結するこれらの問いに向き合うことで、家族と労働における私たちの真の理想を探る。

■参加者の声

▼怒谷彩花

本会議前、コーディネーターが「アメリカ側参加者が入るとがらっと雰囲気が変わるからね」とよく口にしていた。予想だにせぬほど変わった。それも一度ではなく何度も。今振り返ってみると実に激しい三週間だった。家族のあり方と働き方というテーマにおいて個々の意見というのはその人の経験に基づいて形成される傾向がある。それゆえ差異を認識してより本質的に議論していくために各々の背景まで遡る必要がある。誰かの意見が間違っているのではなく経験が違うからこそ、またその経験が違うからこそ、同じ経験からも違った意見が生まれる。本会議前から小さな衝突を重ねていく中でその重要性を全員が共有し、掘り下げていく時間を重視していた。しかし本会議が始まってみると、そもそも単純に人数は倍、背景の数も数倍になるものの、時間は3週間しかない。またファイナルフォーラムに向けて結論を出さねばならない、アカデミックな場で一個人の経験の話だけで終わってしまっただけではいけない、という焦燥感に各人が追われているのも関わらず、議論が進まないという葛藤もあった。RT 全体がバラバラになりかけ家族崩壊なんて冗談も言っていた。しかし最終的に全員でファイナルフォーラムのプレゼンをすることができ、最終日出発直前、衝突し

ていたメンバーが和解できたことがなによりだった。ここで、鍵となったのはRTというグループの中で1対1の関係をどう築いていくかだ。どんなに小さなグループでも集団になれば、個人は集団の中のアクターとして振る舞う。特に集団が機能しなくなった時や自分が集団の方向性を導きたい時などに現れる。個人の利害関係などをより知るために集団の中の個と、1人の他人と向き合うときの自己を臨機応変に使っていきることが必要だ。またどんなに親密で特別であっても、家族も独立した個で構成されている以上集団である。家族の問題でも、この自己と集団の中の自己が鍵になるということを学んだRTだった。

早稲田大学 国際教養学部 4年 怒谷彩花

▼岩本華苗

JASC に応募した当初の目標は「英語で議論ができるようになる」だった。しかし、アメリカでは英語で交わされる議論を理解することに精一杯で、とても自分の意見を述べることはできなかった。また、JASC には translation や clarification を要請するハンドサインがあるが、議論の邪魔になるのではと感じ、なかなか使うことができなかった。結果、最初のうちには黙っていることが多かったのだが、せっかく JASC に参加したからには、オブザーバーではなく、何らかの形で議論に参加したいと思い、内容が分からない部分はその場で質問し、ハンドサインを使うようになった。また、このようにしてミーティング内で少しずつ発言するようになってからは、それほど多くはないものの、自分の意見を伝えることもできるようになった。

だが、自分の英語力不足で議論に深く踏み込めなかったこと、分科会内に意見の対立が起こったときに、対立解消のための力添えができなかったことがとても心残りだ。日頃から英語で自分の考えていることを話していないと、スピード感のある議論には対応できないと感じたため、日本でも積極的に英語を使おうと考え、後期から留学生のチューターを始めた。自分に足りないものを自覚し、どうすればそれを補うことができるのかを考えるきっかけを与えてくれた分科会活動だった。

九州大学 法学部 2年 岩本華苗

▼細越 賢

本会議中、自分の分科会ではあまりにもたくさんの事が起きた。その多くは、一言で言えば価値観の衝突だ。特に家族というトピックは、どうしても個人の経験から価値観が形成され、その価値観を基に話す事が多くなる。自分の中での譲れない価値観と他人の意見を擦り合わせていく事の難しさを実感した。人間と人間の論理での本気のぶつかり合いを体験すること

ができた。その体験によって、衝突しながらもリスペクトを忘れない議論の形を学んだ。他人の意見は各個人の価値観から形成されたものであり、自分とは異なる事もあるが、否定する事はあってはならない。その意見を受け入れる事が出来なかったとしても存在を認め、理解をし、議論を深めなければならない。

その様な衝突が多かった分科会だったが、個人的にも反省すべき点は山程ある。議論に参加する事を放棄してしまった事、他の人の意見に歩み寄ろうとしなかった事、分からない点をそのままにしてしまった事、議論の発展を諦めてしまった事などだ。問題が起きた時には他の分科会メンバーが向き合う事で最終的に丸く収まった。自分の怒りや苦しみを抱えながら冷静に会話し、異なる意見を持つ二人を最終プレゼンテーションをする所まですり合せたその姿勢はとても尊敬出来るものだった。自分が来年の実行委員になった今、個人の反省を来年の分科会に反映させ、作っていききたい。

学習院大学経済学部 3年 細越 賢

▼南 秀弥

私が分科会ワーク（以下 RT）を通して学んだことは、コミュニケーションの難しさだ。難しさには様々な要素があるのだが、私の RT では特に、個人の価値観を共有し理解し合うことが難しかった。具体的には、意見を感情や経験といった個人ベースで述べるか、それとも統計データや資料などの外部情報ベースで述べるかで議論が紛糾した。RT テーマである家庭と働き方を考えるとき、自分の家の環境や経験をもとに意見がでるのは当たり前である。だが一方で、参加者の経験が世の中大多数の真実であると錯覚し、議論を進めてしまう可能性がある。故に、バイアスが掛かった議論を避けるため、事実ベースで話すべきだという意見も出た。どちらも正しく、間違っていないかった。それゆえ、両者の歩み寄りが上手くいかなかった。

以上の難しさをどう解消するか、振り返ってみると、話し手、聞き手の両者が、より議論を深めるために改善できた点があったと感じる。話し手は、自分が伝えたい情報を全て一度に伝えようとするのではなく、伝えたい事柄の優先度を考え、順序立てて伝える。また、聞き手の質問に答える時、その意見が抽象から具体へと段階を下るように説明されるよう話すべきだ。聞き手は、話し手が何をバックグラウンドに持ち、意見を述べているのか想定しながら聞く。その為には、RT ペーパー（本会議前に書く意見文）や普段の会話で相手がどんな事柄に関心があり、どのような価値観で物事を見ているのか理解する努力が必要だ。

幸いなことに、もう一年この会議に携わるチャンスを得ることが出来た。議論の前に、RT メンバーがどのようなバックグラウンドを持っているのかを知る機会や、互いの価値観を尊

重し合えるような環境を、もっと積極的に設けるなど、70回の経験を71回に活かしたい。
法政大学国際文化学部3年 南 秀弥

▼コーディネーター後記

自営業の父、過労死寸前だった過去、男女関係なく働くということ、地方に活気を与えるには、「家族と労働」は、最も身近であると同時に議論が難しいテーマだったと振り返る。社会に出る前の私たちが経験則で話し合う際に、前出のような自らの近い人々をロールモデルに思考を巡らす故、前提となる価値観の違いを体感したからだ。テクノロジーの発展が時代の流れるスピードを追い越していくような世界に生きる私たちだからこそ、近い将来において自分たちがどうありたいかを真剣に見つめた。

日本側だけで行った2か月の事前準備期間には、少子高齢化や雇用形態といった大枠を皮切りに、何が理想と現実の狭間に齟齬を起こすのかを議論した。自らの意見はどのような価値観に支えられているのかを紐解いていくことは、普段は無意識であり且つ育つ環境が異なるからこそ非常に興味深かった。専門家ではない学生の立場だからこそ話し合えるという等身大のスタンスを持ち続けることや、理想で話を終えたくないという熱意を持って議論を進められたことは、机上の空論で終えがちな学生の議論において常に現実を見据えて話し合うという部分で貢献したと感じる。

分科会のメンバーがどれほどの満足度で本会議を終えたかは正直わからない。同年代の友人たちと心行くまで価値観の衝突を達成させることに、私の未熟さでは助力しきれなかった部分は大きいと反省する。それでも、日頃抱える抽象的であるからこそ消化しきれない問題を議論のテーブルに上げてみる勇敢さだったり、素早い思考力でロジカルに応戦したり、常に客観性を崩さず皆の言わんとすることを汲み取ったり、静かに意見を聞きながら熟成させた自らの意見を絶妙なタイミングで口にしたりといった、個性豊か且つ人間味あふれるメンバーがいてくれたからこそ、この分科会は成り立ったと思う。時にぶつかり合い、時に励まし合い、全員で過ごすことを特に好まないように見えて気づいたら自然と集まっているようなこの分科会は、家族の定義を可視化させるようなものだったように思える。

末筆ながら、フィールドトリップで訪れたカナダ大使館二等書記官 Stephanie Letourneau 様、株式会社 manma 代表 新居日南恵様をはじめ、「今日における働き方と家族の在り方」分科会にお力添え頂いた皆様はこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。
明治大学経営学部経営学科4年 押切 彩

**“Environment and Humanity:
The Importance of Sustainability in Modern Society” Roundtable**

「環境と人類～持続可能な共生社会」分科会

■分科会概要

先進国における人間の生活は便利で豊かになり、尚も進化を続けている。一方で、世界中で環境問題が顕在化し、政治や経済のどの領域においても切り離せない課題となった。しかし、環境保護を最優先に考え、豊かな生活を全て捨てるというのは現実的ではない。国際社会においても各国の足並みは揃わず、その一例として2017年に世界最大の二酸化炭素排出国であるアメリカがパリ協定からの離脱を表明した。アメリカでは、温暖化の原因が人間の活動であると認めない立場が根強く残っていることもその一因である。当分科会では、経済活動や政治、先進国と新興国といった多角的な視点から、地球温暖化、原子力問題の解決、再生可能エネルギー利用、生物多様性保全等、共通認識と捉えられがちな問題を再考する。科学的根拠を探求し、様々な環境に対する考え方について議論することで、ひとりの地球人として何ができるのか、持続可能な発展を続ける未来は存在するのか、その可能性を探っていく。

■参加者の声

▼佐藤美緑

環境についての議論。何から始めればいいのか、というのが初めてのミーティングで、まず私の頭に浮かんだことである。専門知識を持つメンバーがいない中でスタートし、理想と現実の違いに悩み、厳しい場面にぶつかりながらも、本会議を含めた4ヶ月間、共に励むことができた。

初めは、ミーティングが情報の共有や意見の交換で終わってしまい、議論にはなっていないように思う。共有している情報の少なさからか、発言に対する反応が薄くなってしまっていた。この危機感を本会議前に一部のメンバーとは共有する機会があったが、本会議に入って日本側は更に発言が少なく、ほぼアメリカ側だけでRTタイムが進んでいく状況に陥った。私や他の日本側のメンバーでもこれに対して、こまめに皆の理解が追いついているか、議論が流れていないかを確認したりと行動に移したつもりだったが、他のメンバーに対して

うまく機能しなかったり、いろいろと課題が出てくる中で、なぜそうなるのか、何ができるのか分からない部分もあった。それでも、みなで絞ったトピックに沿った議論と平行して、“議論をする”ための話し合いに時間をかけ、ただ妥協し折り合いをつけるのではなく、状況を確認しつつそれぞれ違いがある中でどう動くべきかを、グループでも個人でも意識的に話し、メンバー間でのコミュニケーションが最後まであったことはよかったと思う。

振り返ると、最終の発表まで、不安や悩みはそれぞれ尽きなかったのではないかと思うが、それでも時間を経て、自分が分科会に貢献できることは何かを考えながら、活動に臨むことができていたように感じる。一番多くの時間を過ごした RT メンバーとコーディネーターとの出会いに感謝したい。そして“出会い”こそが、JASC の大きな魅力であったと考える。

立命館大学 経営学部国際経営学科 佐藤美緑

▼塩見涼太

JASC が始まる前までは、私はそこまで環境について意識をしたことはなかった。環境 RT に選ばれたことにより、本会議前では議論に少しでも参加できるよう文献を読み、環境に関する知識を高めていった。日本側での議論では、そこまで深く議論が進むことはなく、表面的な情報共有に終わってしまったように思われる。しかしながら、アメリカ側が加わると、議論が急速に進んでいった。アメリカ側の勢いに押され、自分の意見を共有できなかったこともあった。

このような分科会活動の中で、環境の知識だけでなく、議論に対する心構えのようなものも学び取ることができた。英語の議論では、受け身の状態にならず、普段以上に集中し、何か発言しようという心意気であることが必要だと感じた。分科会の中でも議論についてのあるり方などを話し合いながら、集中し、能動的に取り組むようにした。本会議後半になるにつれ、少しずつ議論に参加することができるようになってはきたものの、まだまだ自分の納得のいくレベルには達していない。この JASC での経験をバネに、自分自身のディスカッションにさらに磨きをかけていきたい。また、今回の分科会議論では、今まで気にかけることがあまりなかった環境問題に強い関心をもたらしてくれ、環境問題に対してできることから取り組んでいきたいと思えた。

立命館大学 理工学部ロボティクス学科4年 塩見涼太

▼村上真優

JASC70の参加者として過ごした4ヶ月を振り返ると、分科会の存在は非常に大きかった。私が所属した「環境分科会」は特殊な分科会であったように思う。なぜなら、日本側のメンバーに環境分科会を第一志望にした人が一人もいなかったからだ。この点は、アカデミックな議論をするにあたって大きな壁となり、日本側のオンラインミーティングは、正直あまり上手く進まなかった。知識不足から活発な議論ができず、メンバー全員が集まることができたのは春合宿を除いて直前合宿しかなく、コミュニケーション不足も目立った。

様々な不安を抱えたまま本会議を迎えたのだが、アメリカ側のメンバーが加わると分科会の雰囲気や流れが一気に変わった。RT Timeでは、各個人の興味分野や専門をもとにトピックを絞り込み、Final Forumでは納得のいくプレゼンを行うことができた。多様な学部からメンバーが集まり、広い視野から環境問題を捉える事ができたからこそできたディスカッションとプレゼン内容であった。

また、分科会メンバーとはどの参加者よりも長い時間を共に過ごし、分科会のトピックに限らず人生やキャリアのことなど様々なことについて話すことができた。そこから学んだことは数え切れない。

最後に、分科会を献身的にサポートしてくれたコーディネーターや日本側、アメリカ側の分科会メンバーに心から感謝を伝えたい。素敵な出会いをありがとう。

国際基督教大学教養学部 2年 村上真優

▼山本采奈

私たち環境RTは、全員が第一志望のRTでなかったこと、専門知識を持っている人がいないこと、環境という広いテーマにどこからとり組んだらいいのか分からないことなど不安要素が多かった。そのためか発言が少なく、日本側のみのミーティングでは、各々の調べた情報の共有のみで終わってしまうことが多くきちんと議論できたことがあまりなかった。

アメリカ側と一緒にになると、日本側の発言はより少なくなった。議論の経験が日常的にあり、とにかく発言をすることを重要視し、スピード感のある議論をするアメリカ側に対し自分たちがどのように振舞えば良いのか分からなくなってしまった。今振り返ると、アメリカ側も発言をしない日本側を不思議に思い、日米両方の参加者が戸惑っていたように思う。何度かRTタイムを重ね、アメリカ側が「日本側の意見を聞きたい。英語のスピードなど、自分たちに改善できることがあったら言ってほしい」と声をかけてくれた。この発言から、「どうしたらみんなが発言をし、議論を活発にできるのか」をみんなで考え出した。この話し合いが、日米両サイドがお互いを分かり合う機会となり、打ち解けあうことができた。その結

果、それぞれが安心して発言し合い、議論が活発化した。時間をかけて文化的な違いを把握し、効果的な議論のやり方を考える大切さを学ぶ貴重な経験となった。

東京外国語大学3年 山本采奈

▼コーディネーター後記

日米学生会議の長い歴史の中で、環境に関する分科会は特に目新しいものではない。数十年前の会議においても環境は主要テーマの1つに入っており、近年は数年に一回のペースで分科会が設置されてきた。それだけ長きに渡り解決されていない、することができないのが環境問題であるとも言える。そのような状況下で、私が感じていたのは、日本における環境問題の捉え方と、学生の関心度の低さだった。

日本では、環境を守らなくてはならないという前提のもと、地球温暖化や生物多様性、ごみ問題等、広範に渡って環境教育が行われている。しかし、それほど重要な問題でありながら、人々はどこか他人事で、いずれ人類そのものが存続の危機を迎える可能性のある緊迫した問題とは捉えていないのではないだろうか。

一方アメリカでは、大学で自然環境や環境に関する政策を専攻する学生が珍しくなく、若い世代の関心も高いという。その意識の差はどこから生まれてくるのか、そもそも私たちが当たり前と認識していた、環境を守ろうという薄っぺらいスローガンを取り払い、何の為に環境について考えるのかを検討したい。そういう視点をもって、この分科会は発足した。

本会議に向けた事前準備期間には、参加者それぞれが今一度環境とは一体何なのかを検討し、興味のある分野や問題を探しながらじっくりと議論を進めた。本会議が始まると、一気に議論は加速し、Sustainabilityをベースに、都市の特徴に合わせて環境と人類がより良い形で共存するスマートシティを目指すべき方向に定め、一つの終着点を迎えた。

なかなか普段自分事として捉えることの難しい環境について苦悩しながらも健闘を続け、一つの方向性を見出した分科会メンバーの考えにはハッとさせられることも多かった。分科会としてはここで終了するが、人間が向き合い続けなければならない環境という重要課題について、思慮するきっかけとなっていれば幸いである。

中京大学総合政策学部総合政策学科4年 金澤つき美

“Philosophy of Religion: the Examination of the Meaning of Religion in Human Life” Roundtable

「人間社会における宗教の意味」分科会

■分科会概要

『人間社会における宗教の意味』

Philosophy of Religion: the Examination of the Meaning of Religion in Human Life

人類は古来、自然現象や原因不明の病を、神の成す業として理解しようと試みてきた。人々は神の声に耳を澄まし、その超越的かつ神聖な存在は、預言者やシャーマンを通じて様々な苦難に意味を与えた。しかし、近代ヨーロッパにおける科学的真理の希求は、宗教的価値を相対的に低下させた。我々は目に見える事実や科学に依拠するあまり、過度に合理性を追求した非人間的な生活を強いられている。人間性を排除しようとする科学に対し、宗教は、我々が何者で、世界はどこへ向かうのかという問いに、優しく物語のように答えてくれる。今こそ、このような宗教的価値の重要性を再認識すべき時なのかもしれない。一方で、心を豊かにするはずの宗教がしばしば争いの要因ともなってきた。現代においては、イスラム国によるテロや、それに対する報復は血で血を洗う争いを生んでおり、ロヒンギャやクルドなど、宗教的差異によって生まれる難民も後を絶たない。当分科会では、失われつつある宗教的価値の意味を問いながら、現代の人間社会において宗教とは何か考察する。

■参加者の声

▼タクール小迫 亜満

今でも鮮明に覚えている。1月27日、実行委員のロイと一緒に温泉に行った帰りに手渡してもらったJASCのパンフレットを開いた。そして分科会一覧にあった「現代社会における宗教の意味」の文字を見て、これだ、と直感でそう感じた。ドンピシャだった。数日後、僕は迷わず一次選考に応募していた。

僕はインド人の父親の影響でヒンドゥー教徒となり、生まれてこの方牛肉を食べたことがない。ただ自我が大きくなるにつれ、無宗教が多い周囲との比較から、自分の信仰に対する懐疑心が大きくなるのを感じた。僕は意味の無い物があまり好きではない。だから無意味にみえた自分の信仰が、嫌になりそうだった。その一方、自らのアイデンティティとも言えるそれを否定するのを拒む自分もいて、その両者の間で僕は苦しんできた。

信仰の意味とは何か。神とは誰なのか。心の中で向き合い続けてきたその疑問を人と議論

できることにワクワクした。何より、他の人の考えに触れることでその答えが与えられる気がしていた。

結論から述べると、その期待は間違いだった。結局、その疑問は最終的には一人で向き合わなければならないもので、助けを期待したり、ましてや答えが与えられるなど以ての外だった。もしJASC70での後悔を挙げるならば真っ先にこれを期待してしまったことをあげる。ただそれはJASCでの議論が無意味だったわけではなく、自分が答えに至る通過点だということを示していると思う。この議論と経験を糧にすることで、自分はまた新しい答えを探しにいけると今は強く信じている。

そして何より、いつか他のメンバーを無神論者にする日を楽しみにしている。

国際教養大学国際教養学部 2年 タクール小迫 亜満

▼吉田恵理奈

私は仏教徒で、僧侶である。そんな私も今まで何度か仏の存在を疑うことはあったが、仏の存在が当たり前の世界で過ごすうちにそんな疑問は頭をかすめることもなくなった。しかし今回、改めて仏の存在について考えるきっかけを与えられた。

宗教分科会のメンバーは皆、異なった宗教をもち、そのため価値観も異なり、性格もかなりの個性派揃いだった。「人はなぜ生き、死ぬのだろうか。」「なぜ人は宗教を信じるのだろうか。」こんな話を同年代の人としたこともなく、新鮮でとても刺激的だった。また、本会議前は私の家のお寺に見学に来てくれた。

「なぜ神や仏を信じられるのか。」という問いに、「存在を感じるからだ。」と答えた。しかしそんな答えでは理解してもらえず、初めてなぜ自分は仏を信じられるのか真剣に考えた。すると、自分は死への恐怖を克服するために心の支えとなるものが必要だったのだと気付いた。

この分科会を通してはっきりわかったことは宗教を必要とする人としらない人が存在するということである。私にとって仏教は背骨のようなものである。つまり私の行動指針だ。

異なる価値観が混在するこの世界で、神仏の存在について議論をすることにあまり意味はないと思う。重要なことは、互いの宗教を尊重し合うこと、そして人として正しい選択をし、自分の人生を豊かにすることである。

防衛大学校 国際関係学科 3学年 吉田恵理奈

▼常恵喬

宗教分科会はとにかく皆の仲が良く、終始笑顔が絶えない分科会だった。国も文化も信仰するものも異なるメンバーたちとのディスカッションは、実に面白く、私の中で多くの学びがあった。

今年の日米学生会議のスローガンに「異なる価値観との邂逅」とあるように、分科会活動はまさにそれを体現していたと思う。その言葉が意味するところは「自分の価値観の再認識」でもあると私は考える。様々な意見を持つメンバーたちとの熱い議論を通して、私は自分の考えがいかに仏教的な思想に基づいているかを認識することができたのだ。

そんな私たちが主に議論したのは「宗教とは何か」という問いだった。非常に抽象的で壮大なテーマであるが故に、メンバー間での意見の相違や議論の挫折も多々あった。しかし、最終的には「宗教とは、Someone's Truth（誰かの真実）から生まれた My Truth（私の真実）である。」という答えで一致した。

私自身この答えがとても腑に落ちた。人がなぜ生き、なぜ死ぬのかという問いに対して、宗教は答えを与え、私たちの不安を取り除く役割を果たしている。宗教を信仰しなくとも、私たちは科学や哲学、または自分の考えといった何かを必ず信じていると思う。誰かが生み出した未知なるものへの真実(Someone's Truth)を、私たちは自分の真実(My Truth)に置き換え、日々この混沌とした社会を生きる糧としているのではないだろうか。

東京外国語大学 国際社会学部 4年 常恵喬

▼土谷里紗

宗教とは何なのか。この問いは今日に至るまで、数え切れないほどの人々が議論してきた話題だろう。ではなぜ日本とアメリカの学生である私たちが、これを議論することに意味があるのだろうか。この点において私は、日米学生会議の「本音での対話」ということに究極的な意味があったのではないかと考える。

分科会での議論が始まった当初、私には宗教という人の根本的なアイデンティティとなりうるものに対して疑問や批判的な感情を抱いたり、またそれを口に出したりすることはタブーなのではないかという思いがあった。さらに本会議では言語の壁もあり、本音が伝えられずに上辺を撫でたような意見しか言えない自分が腹立たしく、また歯がゆい思いを抱いていた。しかし、このままではJASCに来た意味がないと最終サイトでのある夜、分科会メンバーに対して初めて「あなたの宗教観が理解できない」という直接的な質問をぶつけてみた。

結局この問いから、宗教とは何であるのかという議論は一晩中続き、声を荒げて相手に対して疑問や批判的な意見を伝えたり、また相手からも反論を受けるという、まさに「本音で

の対話」が行われた。そしてこの一晚の出来事によって、私は初めて今まで分科会メンバーが述べていた彼らの宗教観というものを理解できたと同時に、宗教とは何かという問いに対して、私たちなりの答えを導き出すことができた。このように「本音での対話」というものは言葉で述べるのは容易であるが、実際に行われる機会は非常に稀だろう。しかし、それができる場が日米学生会議での3週間であったように思う。

異なる価値観に触れ、そしてそれについて互いに理解し合おうと歩み寄る空間で過ごした時間は、私にとって学びの深い、かけがえのないものであった。

慶應義塾大学 法学部法律学科2年 土谷里紗

▼コーディネーター後記

なぜ宗教分科会を作ったのか、なぜ今の時代に宗教について話し合う必要があるのだろうか。「現代における宗教の意味」という分科会名はそのような私の問を反映したものだ。科学やテクノロジーの時代に、しかしそれらでは解きえない人類の根源的な謎への答えが宗教にはあるのではないか。

このような問いに反応し、応募してくれた参加者の顔は本当に多様なものであった。防衛大生のお坊さん、中国人の両親を持つ日本育ち、カソリックのお嬢様、ヒンズー教徒のインド人ハーフという日本側参加者に対し、アメリカ側参加者もロシアオタク、パーフェクトお嬢様、ラテン系ヒストリアンと、これ以上濃厚なバックグラウンドのひとつに囲まれることは僕の人生でもう二度とないであろう。

分科会での議論を総括するにあたって、分科会で最も重要だったと私が感じた議論について触れておきたい。それは、ファイナルフォーラムを数日前に控えた最終サイトでのある夜のことである。宗教分科会の日本側参加者たちが集まって議論しているのが目にはいり、分科会の時間以外でも議論を進めていることに感心しながら自分も議論に入ると、そこで話しあわれていた内容に本当に驚いた。

「あなたの宗教観がわからない」。それがその夜の話し合いのトピックであった。分科会の議論を進め、ファイナルフォーラムまであと数日という段階になって、お互いの宗教観への理解が進んでいないことへの危機感から生まれた議論だった。

私は、この問いこそ宗教を議論する上で最も重要なことではないかと思う。宗教について解説を受け、それについて理解ができなくとも、多くの人は「自分たちとの違い」として素通りしてしまう。お互いの宗教観に対し、逃げることなく向き合った参加者たちに拍手を送りたい。

東京外国語大学 国際社会学部 3年 豊坂竹寿

“Identity: Navigating Diversity and Understanding Homogeneity in a Global Society” Roundtable

「アイデンティティ～グローバル社会における単一化と多様化」分科会

■分科会概要

アイデンティティ～グローバル社会における単一化と多様化～

今日の社会において、人々は再び自分が何者であるか問い始めている。人々はアイデンティティを通じて自分が何者であるかを確認することにより、生を確かなものとする。現代では、性別、国家といった様々なものが越境し、新たな価値観が築かれてきた。人種も国境を越え、多彩なバックグラウンドを持つ人々が一つの国家や地域に共存している。そして、このような人種のるつぼの中で、人々は様々な方法で共同体への帰属意識を形成している。

また、近年はLGBTQといった性的マイノリティに対し、寛容な社会を目指す運動が盛んになっており、2015年に全米で同性婚が認められて以来、その運動は全世界に波及している。一方で、急激に進展するグローバリズムへの反動として、世界各地でナショナルアイデンティティ、が高揚し、保守化する動きが加速している。このような混沌とした社会背景を踏まえ、当分科会では、自己の形成・本質を探りながら、アイデンティティを様々な観点から観察し、他者との真の相互理解は可能であるのかを追求する。

■参加者の声

▼Adrian Wildandyawan

私は本会議中、分科会内の議論を通して、2つの大事なことに気づいた。

一つ目に、自分のアイデンティティについて話し合う大事さである。自分のアイデンティティについて話し合うことで、「sense of validity」、つまり私自身の正当性を感じることが出来る。性的マイノリティである私にとって、性的マイノリティとしての個人経験を本音で語ることは容易ではなかったが、他の参加者の理解と応援によって、自分の経験に誇りと自信が持てるようになった。そして、私は自分のセクシュアル・アイデンティティを完全に受け入れることができ、最良の自分でいられるようになった。

二つ目に、他の人を信頼することの大事さである。自分のアイデンティティを否定してい

る環境に17年間もいた私は、他の人を信頼することが得意ではなかった。傷つけられたり裏切られたりすることが怖かったからである。しかし、今の私の自己成長は分科会の他の参加者及びコーディネーターあってのものだと思う。私たちの間に生まれた相互理解と信頼関係は私たちの自己成長の糧となっていた。

当分科会での経験を活かして、今後自分のアイデンティティについて語り続け、たくさんの人との信頼関係を築き続けていきたいと思う。

電気通信大学情報理工学域 3年 メディア情報学プログラム

Adrian Wildandyawan

▼佐野弘樹

「自分がこの分科会にいる価値はあるのか」という問いが本会議中、常に頭の中を巡っていた。どのような議論もわかりやすく整理する力を持つ仲間、質疑応答で毎回質問する仲間など、自分の何倍もの実力や情熱を持つメンバーに私は囲まれていた。魅力的な仲間と出会えたことへの感謝もあったが、分科会の中で最年長なのに全く貢献できていないという劣感があった。

アメリカ側参加者との議論が始まり、必死に食らいついていったが、納得のいく発言ができずもどかしさを感じていた。そんな本会議の終盤に「生きるために結局アイデンティティは必要なのか」という問いが議題に上がった。このとき私は、しっかり議論できるラストチャンスということもあってか、なぜか自分の意見を押し通してみたくなった。他のメンバーが理由を述べても「なぜそうなのか」と噛みつくばかりで、アイデンティティは不必要だという意見を固持した。熱のこもった発言に、笑いとため息も入り混じった議論の結果、必要か不必要かという次元ではない新しい視点を見つけ出すことができた。この議論の後、自分が「簡単に納得しなかったこと」に多少なりとも価値があったように思えた。今までは、劣等感から自分の意見は正しくないだろうと思っていたが、躊躇せずに自分の違和感を率直に伝えることで議論が深まることがあるということに気づいた。

本会議の振り返りをした時に、他のメンバーから自分のおかげでアイデンティティのトピックらしい議論ができた、という言葉をもらい、自分の劣等感がどこかに吹き飛んだ気がして嬉しかった。みんな本当にありがとう。

神戸大学 国際文化学部 4年 佐野弘樹

▼嶋田幹大

Identity 分科会での議論はあらかじめ出したいくつかの問いに対する答えをメンバー全員で考察する形で進み、本会議前半のトピックを National identity とした。その中で、「Assimilation（同化）と Integration（統合）の違い」についての議論とその後の実体験から、私は自己の identity に対する理解を深めた。我々は、Assimilation を異なる文化を社会の中で完全に同質化すること、Integration を異なる文化を同等に受け入れ社会に組み込むこととして区別し、Melting pot と Fruit Basket という表現を用いてそれら社会の状態を示した。

そして私は Washington D.C.のホワイトハウスの前で、この議論内容の実態を肌で感じることになる。大統領の被り物を身につけ主張を唱える人、聖書の内容を叫び行進する人、人種を話のネタにパフォーマンスに興じる人。様々な背景と思想と立場が同質化されることなく、同じ場所で一堂に会する光景を目の当たりにしたのだ。アメリカの社会は「るつぼ」ではなく「果物籠」なのだと、この体験を通してそう感じた。

しかし、私自身すぐにこのような気づきを得た訳ではない。あの光景は受け入れ難い大きなカルチャーショックであり、当時はその場のベンチに座り込んでしまった。アメリカの社会が持つ「違いとそれを許容する自由」は、日本の社会で育ち同質性の中で自己形成をしてきた私の体が素直に受け入れられるものではなかったのだと、後ほど内省していく中で気づいた。私にとってこの議論と実体験は日本人としての National identity を強く自覚させるものであり、まさに異なる価値観との邂逅によって得られた大きな成果となった。

慶應義塾大学経済学部 PEARL 1年 嶋田幹大

▼堀晃希

アイデンティティ RT に所属した8人は、「アイデンティティ」というくくりのみを共通項としていて、実際にそれぞれが関心を持つ具体的な分野自体には大きな開きが存在していた。日米に強く関連がある人種、民族意識、性的指向などのアイデンティティに関するトピックを話し合ったが、皆の興味分野を含めつつ議論をまとめるということは思った以上に難しかった。

今日世界で発生している衝突の多くは、お互いのアイデンティティを押し付け合い、受け入れないから起きているのだと思う。本会議でそれを、身を持って感じたのは、昨年白人至上主義者たちによる暴動が起きたシャーロットビルを訪れ、アメリカも必ずしも多様性に寛容ではないと知った際だった。このように互いの価値観の違いによって生じた事件を目の当たりにし、その後どのように協調にまで導くのかを議論したときの内容は非常に具体的で濃

密であった。

本会議後半に他の分科会がファイナルフォーラムに向けた準備を進める中、アイデンティティ RT はギリギリまでフォーラムのことは意識せず、ディスカッションに専念した。発表が近づくに連れて焦燥感が募る中、最後までお互いの価値観をぶつけ合ったことこそが RT 内の繋がりを強め、質の高い議論へと導いてくれた。

「アイデンティティ」とはテーマとしてはあまりにも抽象的で、もしかしたら JASC の様に白熱した議論を行う場の議題としては不適なのかもしれない。しかし、この問いを実際にそれぞれの価値観、背景、興味が異なる同志と議論を通して考えることで深められたことは自身にとって有意義な時間だったと感じる。

国際教養大学国際教養学部2年 堀晃希

■実行委員総括

参加者として日米学生会議に携わった際、国籍がニュージーランドである私に、「日本人で無いのに日本側代表としてどう会議に contribute できるの？」と尋ねられた事があった。人生の大半を日本で育ち、日本の教育を受け、日本の習慣や文化が無意識に私のアイデンティティとなっていたにも関わらず、mixed-race が少ない日本社会において、マイノリティーであることに改めて気付かされた。日本人でもなく、同時にニュージーランド人と言えるほど、ニュージーランド人として自分自身をアイデンティファイする事もできなかった。「日本人である」という定義は何か。単一で、島国根性と揶揄される日本で育った自分のアイデンティティは何処にあるのか。漠然とした疑問が残った。

実行委員になり、分科会のテーマを決定する際、単一国家で集団主義的な日本と、多民族国家で個人主義的なアメリカの、異なる社会構造を持つ二国における、mixed-race である人々のナショナルアイデンティティの形成を比較し、議論できたらと考えた。また、ナショナルだけにフォーカスせずに、セクシャルやジェンダーアイデンティティにも焦点を当てたかった。同性婚における権利を求める動きや、企業間で LGBTQ への支援制度が徐々に広がりつつも、まだまだ LGBTQ に関する課題が残る上で、より受け入れられる社会にするにはどうしたら良いか、若者同士がオープンに議論する必要性を感じた。以上の理由から、ナショナル、セクシャル、ジェンダーの3つのテーマを軸とし、アイデンティティについて日米両国の学生が真剣に議論できる分科会を発足した。

本会議前半では、ナショナルアイデンティティはいかにして形成されるのか、愛国心とナショナリズムの違いは何か、ナショナルアイデンティティの自己認識に於ける正当性について議論し、後半では、何がセクシャル/ジェンダーアイデンティティの形成と public

acceptance に影響を与えるのか、セクシャルアイデンティティに対するステレオタイプ、また、ジェンダー平等意識の形成における学校教育の影響を中心に議論した。

最後に訪れたポートランドでのフォーラム後、compliment circle をした事が特に印象に残っている。メンバーそれぞれの尊敬するところ、アイデンティティ分科会での貢献、その人が自分の人生にどのようないい影響をもたらしてくれたかを一人ずつ順番に言っていった。互いに涙を流し、全体の絆がより深まる大切な時間となった。アイデンティティについての議論を白熱させながら、絶妙なチームワークで最後までポジティブで熱心であった分科会のメンバー全員が、この先もアイデンティティについて思索し続け、今後の大学生活やキャリア等に役立ててくれたら嬉しい。

青山学院大学 文学部フランス文学科 3年 藤本ミケイラ

“Education: Re-envisioning the Purpose of Schooling and Education Reform” Roundtable

「教育の意義と改革」分科会

■分科会概要

教育とは過去と現在が結びつく場所である。そこでは、人類の歩みの中で蓄積された叡知が、教えるものから学ぶものへと受け継がれてきた。そして、その形態は一定ではなく時代の変遷とともに常に形を変えてきた。特に様々なものが境界を容易に越えていく現代においては、教育の本質への新たな問いが教育現場の内外から次々に提示されている。グローバリゼーションの波によって、国際社会で通用する人材を育てる動きが加速する一方で、洗練された知性を育むことこそが教育における至上目的だという主張もある。さらに、経済格差や精神の貧困といった現代社会のもたらす諸問題は、いじめ、教育格差、子の貧困など教育の根本を揺るがすものとなっている。当分科会では、教育という未来を育てる営みをより意義あるものにするために、教育現場の抱える諸問題について再考し、本当の意味で人を育てることへ新たな道を示すことを目指す。

■参加者の声

▼荒牧侑希

「自分が興味関心を持つ分野である教育に関して、自分とは違う国の教育機関で育ってきた人と”両国の教育の違い”について議論を交わしたい。また、英語を使って活発な議論をしてみたい。」このような思いを持って、私は教育 RT に参加した。

アメリカに到着してからの議論はとても刺激的だった。ハーバード大学等で行われているアフターマティブ・アクション※について話し合った時には、その話題に関する知見の深さや、長所・短所を客観的に把握して議論をしている姿から見習うべきものが多かった。それと同時に、自分が受けてきた日本の教育に関する知識の少なさと、論理的な意見を展開できなかった点、そして自分の英語力に対して恥ずかしさを感じた。「もっと日本の教育に対する深い知識があったら…、もっと議論をスムーズにこなせる英語力があれば…」そう感じたことは枚挙にいとまがなく、そう感じた自分を情けなく思った。

本会議でアメリカ側参加者と議論したことで、自分の伸ばすべき点をたくさん発見した。この先の将来、仕事を通して海外の人と英語で議論する機会は増えるだろう。その時には、本会議の議論よりも、もっと深い議論をスムーズに行いたい。本会議で感じた悔しさをバネに、自分の弱みを改善できるよう精一杯の努力をしようと決意した大学生活最後の夏休みだった。

慶應義塾大学 総合政策学部総合政策学科 4年 荒牧侑希

▼宇波壮一郎

「教育」は万人が生涯で少なからず経験するものであり、それ故に社会に長期的な影響を与え得るものである。僕は「教育」を通して人・社会を変える事に関心を持ち、この RT を志望した。

教育 RT のメンバーは様々な知識分野に造詣が深く、頭の回転が早い人々が揃っていた。議論のペースも速く、様々な視点から矢継ぎ早に意見が飛び交った。彼らの会話に積極的に参加し本気で議論をする事は、学習意欲を強く刺激し自分の思考を磨いてくれた。

RT メンバーは各々教育に対して異なる価値観を持っていた。

特に、e ラーニングをどの程度まで学校教育に導入すべきか・アメリカの個人主義的なレベル別の教育システムと日本の集団主義的な均一の教育システムのどちらが理想的か・金銭的に貧しい子どもたちにどのような格差是正措置を取るべきか、についての議論は意見が大きく分かれ、RT のメインピックとなった。

これらの問いに対し、大部分のメンバーは自分の主張・価値観を確固たるものとして持っていた。そのため、議論の最中で意見は度々食い違い、RT 内の議論の時間だけでは収まり切らない対立にまで発展して話し合いがままならない、という事もあった。

しかし、多種多様な意見をどのようにまとめ上げ、ファイナルフォーラムで RT 全体の成果物として発表するかを熟考する事は他では体験できない学びであったし、何より教育に対する様々な視点を会得する事が出来た。

英語という言語を通して、他の RT メンバー8人の意見を吸収し、同時に自分の意見も発信するという相互交流を実現させる事に全神経を注ぎ込んだ3週間半。その経験は間違いなく学生時代の一端を成す宝となった。

この半年間、教育 RT で得た仲間・学びがこの先の自分の人生をどのように色付けるのか、非常に楽しみである。

東京大学 法学部 2年 宇波壮一郎

▼鈴木 大雅

私が JASC70 に教育 RT を第一希望として応募した理由は教育が良くなれば世界が良くなると信じているからである。なぜ教育 RT なのかという質問に、教育 RT のメンバー皆が「教育の可能性を信じている」と答えたとき、私はなんて頼もしい仲間なのだろうかと感じた。

本会議が始まり、アメリカ側の参加者各々の確立された意見を聞いたときに、自分は教育に対してどのような意見を持っているのかが分からなくなってしまった。その結果、教育 RT の議論への貢献もできなくなり、RT の時間が拷問かのように思えた。周りは自分の意見を期待しているのにも関わらず、自分は何が自分の意見なのかわからない、よって何も自分から発信することができない。そんな周りの期待と自分の現状の乖離がさらに自己嫌悪を酷くした。

JASC70 が終了し、私はいまだに後悔をしている。参加者として選ばれたにも関わらず議論へのコミットができなかったこと、コミットできるように知識を得るためのアンテナを張っていなかったこと。しかし、これは大いなる学びでもある。自身の努力にムラがあるという自身の弱みに気づける良い機会となった。これからの課題はいかにそのムラを無くせるかということになるだろう。

その一方で得たものも大きい。相談に対して真摯に耳を傾け、解決策を模索してくれる友人、津々浦々に散らばった、熱い想いをもち、個人の価値観を偽りなく自分に見せてくれる友人。JASC70 で得た交友関係は決して他では手に入れることのできないものであり、この出会いに感謝している。

東京外国語大学 国際社会学部北西ヨーロッパ地域 3年 鈴木 大雅

▼庄坪 孝敏

私は、今回第70回日米学生会議の教育 RT のメンバーとして参加するにあたり、大きな目標を二つ設定した。一つ目に、日米間の教育においての問題点などを共有して『理想の教育とは』をテーマに議論していき、一つの結論を導きたいと考えていた。二つ目は、教育 RT 日米の学生間で演繹法を用い、理想の教育について幾つかの仮説を立て、それをアメリカで検証し、最終プレゼンでその成果を発表していこうと考えていた。本会議前の事前準備として日本の参加者と我々の受けてきた教育や教育の問題点などについて毎週議論を交わした。私の所属する教育 RT メンバーの経験は特殊で、留学した国がそれぞれ違っていたので、日本と海外で受けた教育を幅広く比較することができた。このメンバーのおかげで、毎週の議論の時間が私にとっては、とても刺激的で新たな価値観との邂逅の連続であった。

しかし、残念なことにアメリカに飛び立つ二週間前の予定が全く合わず日本側での意見を固

めることが出来ないまま、第一サイトに到着してしまった。このことが原因で、第一サイトではアメリカ側の主導のもと議論が進行し、その上英語で未知の専門用語が飛び交い理解に苦しみ準備不足が露呈してしまった。

このままでは議論が進まないので、解決方法として日米に別れて議論の題目について15分間双方で話し合ってから議論を始める方法を取ることにした。

このことにより、お互いの理解度が格段にあがり議論が円滑化し、日米の教育問題や考え方の違いを共有し相互の理解を深めることができた。

日々、日米間で議論を進めていく中で何度も私の中で今までの価値観を覆されていった。大きな価値観の転換は、最終プレゼンの三日前だった。私は必死になって当初の目標として掲げていた教育 RT としての結論や成果物を何とか残そうと奮闘し、悩んでいた。しかし、教育 RT の一人と話したことがきっかけで、結論や成果物を求めるのではなく、異なる価値観の共有こそが大事であることに気づいた。そのことで、肩の力が抜けて最終プレゼンに集中することができた。この会議を通じて、一人で悩み、考えても答えが出ない時は他者に本音を打ち明けて対話をする事の大切さを教育 RT の仲間から学んだ。

関西学院大学 総合政策学部 国際政策学科 2年 庄坪 孝敏

▼コーディネーター後記

「理想な教育とは何だ？」私たちの分科会はこの正解がない哲学的な問いから始まった。教育に関する視野を広げるため、私たちは事前準備段階で様々なフィールドワークに足を運んだ。日本では珍しいバイリンガル教育を行う中華学校に訪ねたり、教育困難校に優秀な社会人を先生として派遣する団体の話を聞きに行ったり、主権者教育を学校で広めようとするNPOにも伺った。個性が強く、多様なバックグラウンドを持つメンバーが集まったことは確かな一方、教育資源に恵まれた育ち、同じく一流大学に所属する大学生、という点から見ると私たちは偏った視点を持つ集団でもあった。フィールドトリップを通して、私たちは教育に対する理解を深め、本会議中の議論に備えた。渡米中、分科会の議論は苦戦となった。しっかりしていた教育観を持つアメデリとぶつかった瞬間、日本側は圧倒されつつあった。それに加え、アメリカの教育問題に重視する議論、どうしてもアメリカ側が主導権を握り締めることも悩んでいた。途中から「自分は正直に教育にそんなに興味ないかも」と自分のモチベーションを疑い始めたデリもでたり、アメリカ側も自己主張の強さに圧倒されて日本側の意見をうまく聞いてあげなかったと申し訳無さを感じたりする人もいた。議論は決して順調とは言えなかったが、それでも、誰一人とも諦めたい、を言い出す人はいなかった。先が見えなくても、伝えたいことがなかなかアメリカ側に伝わらなくとも、教育分科会のメ

ンバーたちはより一層優れた「粘り強さ」と「優しさ」を見せてくれた。「尊重」「相互理解」と「対話」の姿勢を最後まで守り続き、会議を成し遂げることができた。誰からも学び、誰にでも教える。教育のことより、私は教育分科会のメンバーからもっと大切な学びが数えきれないくらいあった。人と真摯に向き合うこと、諦めないこと、信念を貫き通すこと…70回教育分科会は61回のように可視化な成果を残されなかったかもしれないが、この夏で築いた友情や交わった夢は、必ず20年、30年後の世界のどこかで輝くだろう。私にとって、教育分科会で過ごした時間は最高に理想な教育であった。

国際教養大学 国際教養学部 4年 リー ロイ

A large, stylized graphic of the American flag is positioned on the right side of the page. It features a blue canton with white stars and red and white horizontal stripes. The graphic is partially cut off by the right edge of the page.

■□第 6 章

事後期間中の活動報告

第6章 事後期間中の活動報告

【10月】中国研修報告会

■概要・目的

昨年クラウドファンディングを通して行った中国研修の報告、そして支援をしてくださった皆様へ感謝を伝えるために10月13日(土)に国立青少年総合オリンピック記念センターにて開催しました。

■スケジュール

【日時】2018年10月13日(土) 18:30 開場 19:00 開演

【場所】国立青少年総合オリンピック記念センター

■協力

一般財団法人国際教育振興会(日米学生会議主催団体)

日米学生会議同窓会

第61回日米学生会議実行委員長 松本秀也様

クラウドファンディングサイト Readyfor

ご支援頂いた皆様(順不同)

岡本 実様 / 武田 尚樹様 / 天野 順一様 / 竹本 秀人様 / 富川 秀二様 / 橋本 徹様
福谷 尚久様 / 松本 秀也様 / 松居 純平様 / 杉岡 昌太様 / 市川 比呂也様 / 金谷 憲様
河島 慧美様 / Ken Isogai 様 / 秋間 修様 / 今井 義典様 / 西田 尚弘様 / 横山 紀子様
乗竹 亮二様 / 岩子 泰生様 / 大塚 雄三様 / 北島 千佳様 / 竹本 周平様 / 濱本 良一様
田村 和生様 / 廣田 隆介様 / 山下 祐里奈様 / 今井 けい様 / 加藤 優一様 / 棟久 佑子様
北條 直樹様 / 長沼 奈絵子様 / 長谷川 諒様 / 吉田 真也様 / 升元 美和様
八木澤 龍大様 / 吉田 知史様 / 倉持 あゆみ様 / 河崎 涼太様 / 新郷 雅大様 ほか多数

【12 月】第 70 回会議報告会 兼 第 71 回会議説明会

■概要・目的

毎年冬に行われる日米学生会議の恒例イベント、報告会が 12 月 15 日（土）に明治大学にて開催された。お世話になっている方々に感謝を示すとともに、日米学生会議が持つ様々な魅力をこの一日に凝縮してお伝えする場が報告会である。当日は、日米学生会議のアラムナイ、日米学生会議に興味のある学生、日米学生会議にご支援くださった方々、参加者のご家族、ご友人など様々な方にお越しいただいた。また Facebook にてライブ配信することにより来場できない方々に対しても発信することができた。

■スケジュール

【日時】 2018 年 12 月 15 日（土） 12:30 ~ 17:30

【場所】 明治大学リバティタワー リバティホール

■プログラム内容

1. 開演
2. 日米学生会議概要説明
3. 第 70 回日米学生会議報告
4. 参加学生によるパネルディスカッション
5. 第 71 回日米学生会議概要説明
6. 閉会
7. 来場者と日米学生会議参加者との交流

A large graphic on the left side of the page, partially cut off by the edge. It features a red circle on the left and a blue circle on the right containing white stars, resembling the top half of the American flag. Below the circles are horizontal stripes in white and red.

■□第7章

第71回会議 概要

第7章 第71回会議 概要

第71回会議 テーマ

学生が紡ぐ日米平和 ～ 対話と衝突から己を拓け ～

The Evolving Japan-US Relationship: Think Globally, Act Locally

実行委員長挨拶

日米学生会議は、満州事変勃発による日米関係の悪化を憂慮した4人の日本人学生が、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念のもとに、1934年に創設した日本で最も歴史ある国際学生交流プログラムである。

85年の歴史を持ち、来夏で71回目の開催となる日米学生会議。日米間の平和が達成されて久しい今、その存在意義はあるのか。創設当時とは違い、現在、ほぼ誰でも自由に海外に行くことができ、在留外国人数も250万人を超える。リアルにもバーチャルにも世界と触れ合える機会が増えた今、この会議が存在する意義はあるのであろうか。

私はこの歴史ある日米学生会議の意義は、今なお薄れていないと信じる。「本音の対話」、これこそ日米学生会議の根幹をなす考えであり、この会議がある大きな理由である。日本は第二次世界大戦後70有余年、平和と繁栄を享受してきた。しかし、世界に目を向けると米国での移民排除、格差拡大、様々な分断、反グローバリズムの動きをはじめ世界各地で紛争や貧困が存在し世界平和を綻びさせかねない要素が多々存在する。自らの思想やアイデンティティ、意見、それら全てが他者との交わりの中で現れ、時にはそれが衝突の種を生むことも多い。しかし、何もしがらみのない我々日米の学生たちが衝突を恐れずに自分をさらけ出し対話することで初めて化学変化が生まれる。その化学変化こそが相互理解であり、より良い未来を作り平和を紡ぐ基盤になると私は信じる。

日米学生会議の80有余年の歴史には数知れないOBOGの平和への思い、そして彼らの人生そのものが日米平和を紡いできた。私たちもその思いを受け継ぎ、自らの未来を切り拓いていこうではないか。

第71回日米学生会議日本側実行委員長

タクール 小迫 亜満

実行委員メンバー

【日本側実行委員】	【米国側実行委員】
タクール小迫 亜満(実行委員長)	Jamie Miura (Chair)
国際教養大学 国際教養学部 2年	McGill University
南 秀弥(副実行委員長)	Kaho Maeda (Vice Chair)
法政大学国際文化学部 3年	Northeastern University
アドリアン ウィルダンディヤワン	Shunji Fueki
電気通信大学 情報理工学域 3年	Soka University of America
細越 賢	Aimee Rodriguez
学習院大学 経済学部 3年	Washington and Lee University
並木祐太	Makiko Miyazaki
明治大学 総合数理学部 3年	Wellesley College
村上 真優	Nathaniel Chute
国際基督教大学 教養学部 2年	Wake Forest University
	Teresa Wrobel
	University of Alaska Anchorage
	Mason Williams
	University of St. Thomas

分科会テーマ

(1) **Culture, Media and Soft Power:**

Examining U.S.-Japan Relations Through the Lens of Cultural Exchange

メディアとソフトパワー

～文化交流から日米関係を考察する～

(2) **Diversity:**

Dissecting Human Rights Concerns within A Diversified Society

ダイバーシティ

～多様化する社会における人権～

(3) **Environment and Technology:**

Ecological and Technical Solutions for a Sustainable Society

環境とテクノロジー

～持続可能な社会に向けた環境にやさしいテクノロジーを目指して～

(4) **Health and Exercise:**

Modern Fitness Trends and Their Effect on Physical and Mental Health

スポーツが作る健康

～フィットネスと私たちの肉体・精神～

(5) **Nationalism and Globalism:**

Shifting Paradigm in the Modern Era

ナショナリズムとグローバリズムの連関性

～現代における日米の政治的・社会的パラダイムとは～

(6) **Responsible Approaches for Population Issues :**

Evolving Technology, Law and Ethics

法・技術の真価と人々の倫理

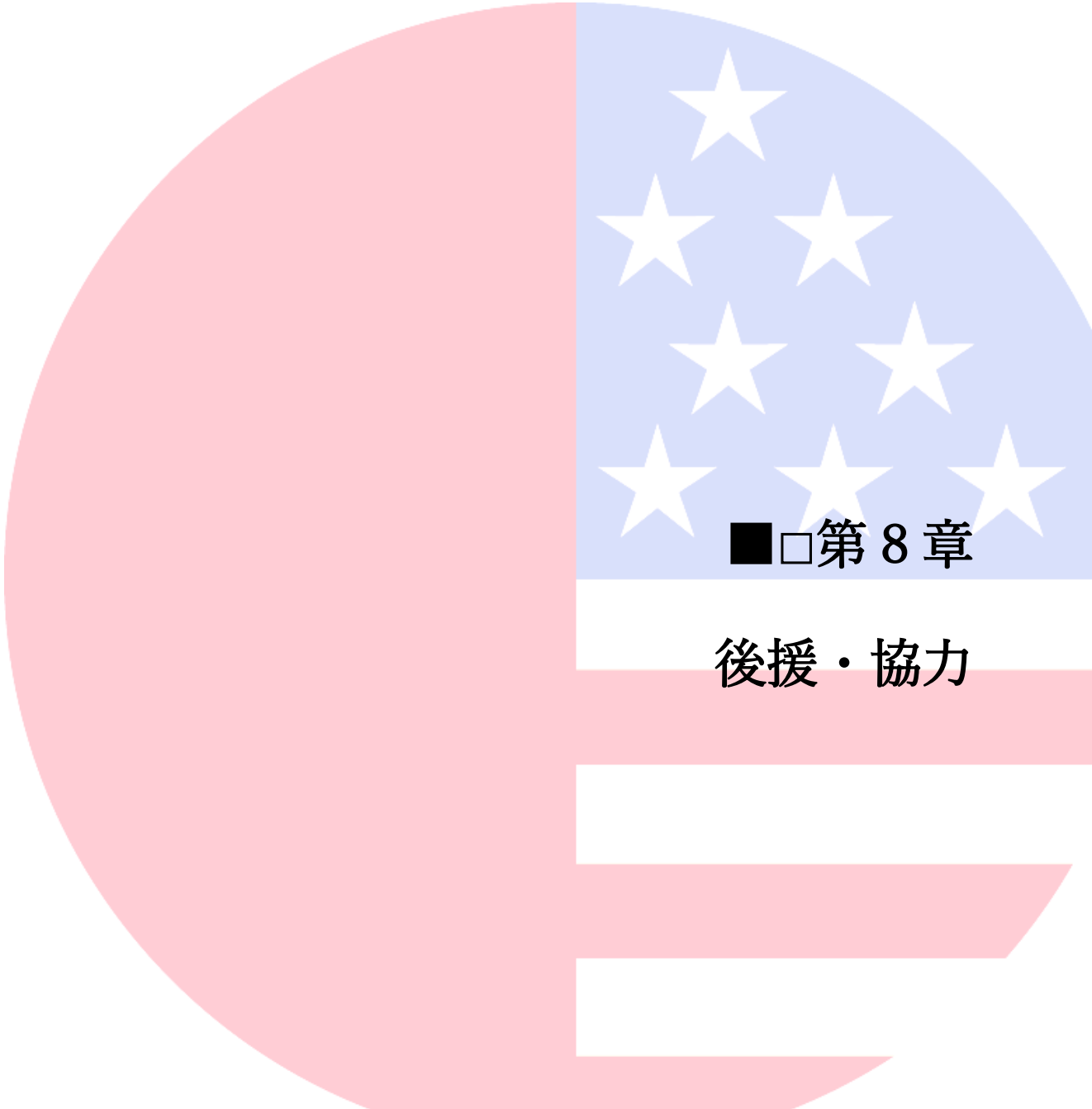
～人口問題から考える、豊かな暮らしの本質～

(7) **U.S.-Japan Relations in the Context of East Asia:**

Change and Continuity in the 21st Century

東アジアにおける日米関係

～21世紀の日米関係の役割とは～



■□第 8 章

後援・協力

第8章 後援・協力

■主催者

一般財団法人国際教育振興会

代表理事 伊部 正信

代表理事 金野 洋

事務局 稲田 脩

伊部 亜理子

後藤 明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃久子殿下

会長 橋本 徹

事務局長 伊部 正信

事務局 伊部 亜理子

International Student Conference, Inc

理事長 Kristy Holch

事務局長 Linda Butcher

■後援団体

外務省

大臣官房 官房長 下川 眞樹太

国際文化交流審議官 宮川 学

大臣官房人物交流室 尾田村るい子

文部科学省

大臣官房 国際課長 里見 朋香

大臣官房 国際課 国際交流企画室 人物交流係長 小泉 朝生

大臣官房 総務課 総務班 吉田 守

米国大使館

首席公使 Jason P. Hyland

広報・文化交流部 教育・人物交流担当官 Gregory Aurit

広報・文化交流部 ユース・アウトリーチ・コーディネーター

石川 乃佑里

広報・文化交流部 井上 よう子

一般社団法人日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 渡辺 隆

■賛助団体

京都日米協会 会長 村田晃嗣 様

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団 理事長 三木繁光 様

公益財団法人双日国際交流財団 理事長 佐藤洋二 様

公益財団法人平和中島財団 理事長 中島潤 様

一般社団法人日米協会 会長 藤崎一郎 様

住友商事株式会社 文書総務部 菊地由一 様 / 加藤由之 様

日本たばこ産業株式会社 CSR 推進部 寺田 国博 様

日本航空株式会社 事業創造戦略部 森田 健士 様

ANA ホールディングス（株）グループ総務部 日野 裕司様 / 北村 朱央 様

楽天株式会社 グローバル人事部 山永 航大 様

一般社団法人 尚友倶楽部

理事長 山本 衛 様 / 常務理事 牧野 忠由 様 / 常務理事 野村 親玄 様

SunBridge Global, Inc.

CEO Allen Miner Kanako Sanford / Assistant to Allen Miner Kanako Sanford

■協力

日本航空株式会社 様

日米学生会議共催シンポジウムの協力、JAL Innovation LAB 会場提供

事業創造戦略部 森田 健士 様 / 金森 詩音 様
コーポレートブランド推進部 今北 恭平 様 / 松尾 知子 様
デジタルイノベーション推進部 桑田 陽介 様 / 水俊弥 様
日米学生会議 参加者 堀尾 裕子 様
(株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷 浩介 様

ANA ホールディングス (株)

新潟県佐渡島研修における航空券のご賛助

グループ総務部 日野 裕司様 / 北村 朱央 様

楽天株式会社

フィールドトリップ訪問協力

副社長執行役員 コミュニケーションズ&エナジーカンパニー プレジデント
山田善久 様 / グローバル人事部 山永 航大 様
通信&メディアカンパニー プレジデントオフィス 時本 薫里 様
JASC OB 鈴木 良祐 様 / 梅原 彩花 様 / 松居純平 様

Horwath Asia Pacific, Japan Managing Director

高林 浩司 様

デルタ航空日本支社

支社長 森本 大 様 / 法人営業部 高野 和実 様

株式会社 JTB

岡本 一郎 様

株式会社セールスフォース・ドットコム 非営利セクター担当営業 日本支社責任者

上田圭祐 様

LINKtheSKY 代表理事

新井 幸子 様

Gakko Project

Director Natalie Akers / Art Director Leyla Levi

Next Generation Leadership Shaping the Future of the Asia Pacific へのご招待

嶋田浩子 様

上智大学 出口 真紀子 准教授

淑徳大学 村松 弘一 教授

学習院大学 国際社会学部 野崎 與志子 教授 / 総合企画部広報課 湯元 陽介 様

中京大学 行政本部 秘書部長 刀根 實 様

米国大使館広報・文化交流部 アメリカンセンターJapan 鈴木 佐和子 様

朝日新聞名古屋本社 報道センター・社会グループ 佐藤剛志 様

■広報活動（順不同）

国際教養大学

企画課 研究・地域連携支援チーム RCOS)

米国大使館

広報・文化交流部 石川 乃佑里

Fulbright Japan

Executive Director Matthew S. Sussman

青山学院大学 国際政治経済学部

教授 武田 興欣

国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科

上級准教授 Stephen R. Nagy

慶應義塾大学 / 津田塾大学 / 東京外国語大学 / 東北大学 国際交流課 / 東京大学 Go Global / 明治大学 / 立教大学 / 三重大学 / 関西学院大学 / 同志社大学 / 立命館大学 / 大阪府立大学 / 神戸大学 / 愛媛大学 国際連携 / 九州大学 / 琉球大学 総合企画戦略部 国際連携推進課

■選考活動

面接官協力

国際ウェールズ環境総研

代表 竹本秀人

京都文教大学総合社会学部総合社会学科

教授 島本晴一郎

日本女子大学 文学部日本文学科

教授 田邊和子

株式会社アルコパートナーズ

代表取締役 西田尚弘

特定非営利活動法人 日本医療政策機構

事務局長 乗竹亮治

公益財団法人 日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）

副理事長 和田昭穂

昭和女子大学 大学院 文学研究科 文学言語学専攻

教授 横山紀子

NPO 法人 じぶん未来クラブ

市川比呂也

京都選考協力

澤晃太郎(67,68) / 野澤 知亜(67,68) / Andrew Fischer(69)

東京選考協力

川邊拓也(63,64) / 杉岡昌太(63,64) / 八木澤龍大(63,64) / 松居純平(66,67)

小山琢夫(66,67) / 今井けい(67) / 加藤優一(67) / 齊藤和平(68,69) / 新郷雅大(68,69)

小倉匠海(69) / 阪上結紀(69) / 戸嶋寛大(69) / 藤井一樹(69) / 諸星渚(69) / 吉村 彩(69)

※括弧内は日米学生会議参加回

選考委員会

金谷憲(委員長) / 竹本秀人 / 田邊和子 / 市川比呂也 / 伊部正信 / 金野洋

選考関係者

東海大学国際教育センター 関根広太 様

東海大学代々木キャンパス 山本 碧 様 / 竹内沙於 様

同志社大学 スポーツ健康科学部 事務局長 采野正明 様

法学部 政治学科 飯田健教授

■春合宿

独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立オリンピック記念青少年総合センター
特別講演

キャノングローバル戦略研究所 瀬口 清之 様

■本会議直前合宿

特別講演

世界銀行駐日特別代表 宮崎成人 様

■防衛大学校研修

防衛大学校

学校長 國分 良成

総務部総務課 社会連携推進室連携推進専門官 防衛事務官 常井重志

竹岡 勇人

特別講義

倉田秀也教授

野末一等陸佐、甘中二等海佐、渡邊二等空佐

■サイト活動協力

▼マディソンサイト

Larry Ingraham, Mya Fisher, Consul-General Naoki Ito, Bil White, Caren Stelson, Pamela Kleiss, Patrick, Geoghegan, Gordon Greene, Jennifr Lu, Ron Brisbois, Nancy Kavazanjian

▼レキシントンサイト

Nikuyah Walker, Wes Bellamy, Amenie Hall, Francesco Benincasa, Julie Knudson, Meg Hall, Tom Camden, Janet Ikeda, Robin LeBlanc, Mark Drumb

▼ワシントンD.C.サイト

Brigit Schulte, Takehiro Shimada, Julie Chung, Hiroyuki Takai

▼ポートランドサイト

June Schumann, Bruce Brenn, Angel Prater, Cyreena Ashby, Ron Raynes, Debra Porta, Mitsuhiko Yamazaki, Rick Turoczy, Jennifer Fox, Kaede Yoshioka, Jeff Barker, Masami Nishishiba, Florence Maher, オレゴン州政府駐日代表部 目代純、ポートランド日本 寺岡総領事、須田領事

■その他

▼日米学生会議同窓会事務局

日米学生会議常任幹事会

秋間 修、天野 順一、飯田 智紀、伊丹 彦、今井 義典、岩崎 洋一郎、梅崎 渉、岡本 実、大塚 雄三、加藤 道子、金井 隆、岸田 守、木ノ上 高章、グレン・S・フクシマ、小林 規威、橘・フクシマ・咲江、竹内 幸美、竹本 秀人、辻 喜久子、寺田 恭子、富川 秀二、西田 尚弘、乗竹 亮治、橋本 徹、平竹 雅人、福谷 尚久、降旗 健、細野 恭平、山田 勝、大和 亜基、和田 昭穂

▼日米学生会議

【賛助団体・企業・個人】

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団 / 公益財団法人双日国際交流財団

公益財団法人平和中島財団 / 一般社団法人日米協会 / 京都日米協会 / 住友商事株式会社

日本たばこ産業株式会社 / 楽天株式会社 / ANA ホールディングス株式会社

日本航空株式会社 / 市川比呂也

▼国際教育振興会賛助会（順不同）

株式会社アルコパートナーズ / 伊藤忠商事株式会社 / 株式会社オリエンタルランド

オリックス株式会社 / キッコーマン株式会社 / サントリーホールディングス株式会社

株式会社 CEAFOM / 新日鐵住金株式会社 / 株式会社セブン&アイ・ホールディングス

禅林寺 / ダウ・ケミカル日本株式会社 / タカラベルモント株式会社 / デルタ航空会社

株式会社電通 / 東京海上日動火災保険株式会社 / 東京ガス株式会社 / 一般財団法人凸版

印刷三幸会 / トヨタ自動車株式会社 / 株式会社ニコン / 日産自動車株式会社

株式会社日本政策投資銀行 / 日本生命保険相互会社 / 日本テレビ放送網株式会社

日本電信電話株式会社 / ネスレ日本株式会社 / 野村ホールディングス株式会社

株式会社パソナグループ / パナソニック株式会社 / ぴあ株式会社 / 富士急行株式会社

富士ゼロックス株式会社 / 丸紅株式会社 / 株式会社みずほフィナンシャルグループ

株式会社三井住友銀行 / 三井物産株式会社 / 三井不動産株式会社 / 三菱重工業株式会社

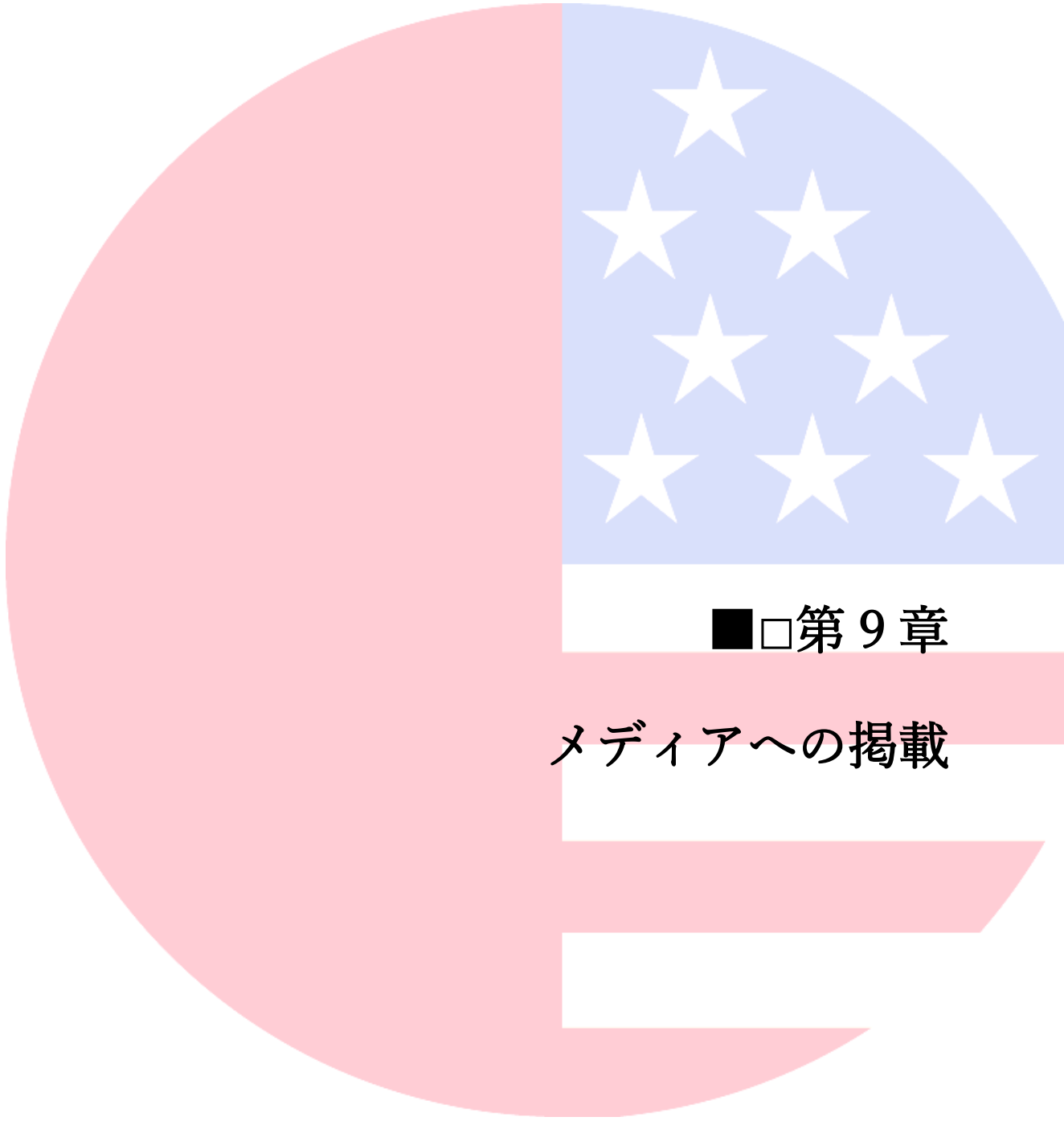
三菱商事株式会社 / 株式会社三菱 UFJ 銀行 / 三菱 UFJ リース株式会社

メリックス株式会社 / 森ビル株式会社 / ユナイテッド・マネジャーズ・ジャパン株式会社

今井 義典 / 岡本 実 / 北城 恪太郎 / 木村 浩一郎 / 橘・フクシマ・咲江 / 谷家 衛

富川 秀二 / 橋本 徹 / アーネスト・エム・比嘉 / 平竹 雅人 / 茂木 健一郎

山田 勝 / 和田 昭穂



■□第9章

メディアへの掲載

佐渡島自主研修の様子（朝日新聞）



朝日新聞

日米交流の芽、育てて70回日米学生会議 首相や経営者、国務長官も輩出

(<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20180728001536.html>)

朝日新聞デジタル (<https://www.asahi.com/articles/DA3S13611371.html>)

アメリカンセンター

(<https://americancenterjapan.com/event/201808285668/>)

NHK world Japan
NHK 総合

2018/08/21 NHK総合【NHKニュース】

「日米学生会議」ことしで70回目

日米学生会議は1934年に始まり、太平洋戦争での中断を挟んでことしで70回目の節目を迎えた。

今回は両国の学生60人余が参加して米国で行われていて、20日、ワシントンの旧日本大使公邸で学生たちに加えて米国国務省の日本部長らも参加してのパネルディスカッションが行われた。

参加者たちは、軍事力や経済力などのハードパワーではなく、文化や価値観で相手の共感を得るソフトパワーを外交にどう取り入れるべきかを議論。

米国の学生からは「トランプ政権が関税の引き上げなどで強制的に他国を従わせようとする中、ソフトパワーにもっと目を向けるべきだ」という意見が出された。

また日本の学生も「草の根レベルでの文化交流を促進し、ソフトパワーを活用した平和的な外交を進めることが重要だ」と応じていた。

東京大学2年生・宇波壮一郎のコメント。

外資就活

(<https://gaishishukatsu.com/archives/111625>)

中京大学

- ① 「平和を希求する日米学生会議に挑戦」

<https://nc.chukyo-u.ac.jp/challenge/vol3.html>

- ② 「総合政策4年生の金澤つき美さんが昨年に続き日米学生会議に参加 安村学長を訪問」

https://www.chukyou.ac.jp/achievement/news/2018/10/013161.html?fbclid=IwAR07BWK_hYUpLMfRTO7fzWV43BbOI65yTQbX9wAR7tt2brduSL3On2yA8

- ③ 「総合政策学部金澤つき美さんに学長賞

日米学生会議に参加」

<https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2019/01/013438.html>



カシオペアフレンズ

(http://779.jp/listen_program/c_friends/8015/)

広報なんぶちょう

(p6 右下(<http://www.town.aomori-nanbu.lg.jp/index.cfm/12,11300,59,html>))

学習院大学 TIMES

自分を成長させてくれた日米学生会議
(https://www.yomiuri.co.jp/adv/gakushuin/special/sp069/page_01.html)

国立大学法人群馬大学

第70回日米学生会議に群馬大学生が参加
(<http://www.gunma-u.ac.jp/information/47693>)

日米交流のまとめ役として活躍

第70回日米学生会議

日米学生会議の実行委員長を務めた当町出身の長谷川信寿さん（学習院大学3年）が、9月13日、役場本庁舎に報告のため訪れました。

日本とアメリカの大学生らが合宿生活をしながら議論を交わす「日米学生会議」。参加した両国合わせた70人は、8月6日から約3週間にわたり首都ワシントンなど4都市を巡りながら交流を深めました。長谷川さんは「まとめ役を担い素晴らしい経験になった。学生ならではの自由な意見交換ができた」と振り返りました。



日米学生会議での経験を工藤町長に報告する長谷川さん④

特別レポート：第 69 回日米学生会議 西予市応援プロジェクト

～平成 30 年 7 月豪雨にかかる愛媛県西予市への募金活動報告～

▼ 概要

第 70 回会議直前の 2018 年 6 月末～7 月初旬にかけて、西日本は集中豪雨の被害を受け、第 69 回会議開催地の 1 つである愛媛県西予市でも、民家の一階部分が水没して泥が流入するなど、甚大な被害が出ました。

第 69 回日米学生会議実行委員会では、住民と市役所のみなさんのお話を伺う機会を設けていただいたのを始めとして、多大なるご支援とご協力を賜ったご恩に少しでも報いるために、過去会議参加者から義援金と応援メッセージを募り、西予市に赴いて西予市長に直接お渡しして参りました。

日米学生会議は、日本の各地方で多くの方々に支えていただきながら存続しており、ご協力いただいた皆様には賜ったご恩をできるだけ返していきたいと代々考えつつ、社会に寄り添って発展して参りました。

これからも、日米学生会議にご協力いただいた各地方に貢献していけないか、と私自身日々考えつつ、日米学生会議が日本とアメリカの各地方と協力・連携しながら、相互に発展していくことを心より願っております。

(第 69 回会議実行委員 愛媛サイト担当 齊藤 和平)

▼ 詳細

募金収集方法：フレンドファンディングアプリ「Polca」

(本プロジェクト URL：<https://polca.jp/projects/1ZyGPUNuMms>)

募金期間：2018 年 7 月 15 日～8 月 7 日

支援者数：29 名

募金金額：50,100 円

西予市訪問日：2018 年 9 月 26 日

▼ 支援者名簿

日米学生会議 西予市応援プロジェクト 寄付者名簿

第69回日米学生会議 実行委員・参加者

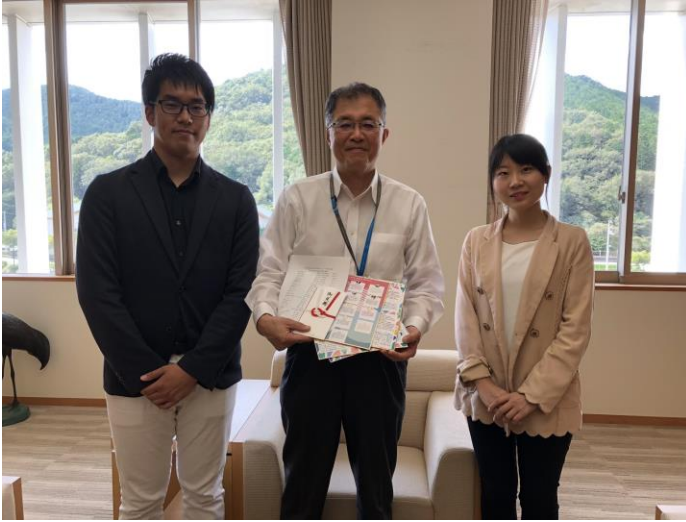
東京外国語大学3年	塩崎 諒平 (実行委員長)
東京大学4年	新郷 雅大 (副実行委員長)
同志社大学卒業	有田 彩子 (実行委員)
同志社大学4年	河崎 涼太 (実行委員)
九州大学4年	齊藤 和平 (実行委員)
慶應義塾大学3年	中川 奈津子 (実行委員)
慶應義塾大学4年	吉川 久美 (実行委員)
同志社大学4年	岩井 凌太
京都大学4年	大野 あゆみ
慶應義塾大学修士1年	大野 友
明治大学4年	押切 彩
中京大学4年	金澤 つき美
防衛大学校3年	古賀 彩
東京大学3年	古座 匠
北海道大学卒業	小島 直毅
国際基督教大学3年	阪上 結紀
カリフォルニア大学バークレー校4年	谷崎 迅
東京大学3年	戸嶋 寛太
東京外国語大学3年	豊坂 竹寿
京都大学卒業	野間 康平
カールトン大学3年	馬場 雄太
国際教養大学3年	藤井 一樹
東京大学3年	松村 謙太郎

日米学生会議 関係者

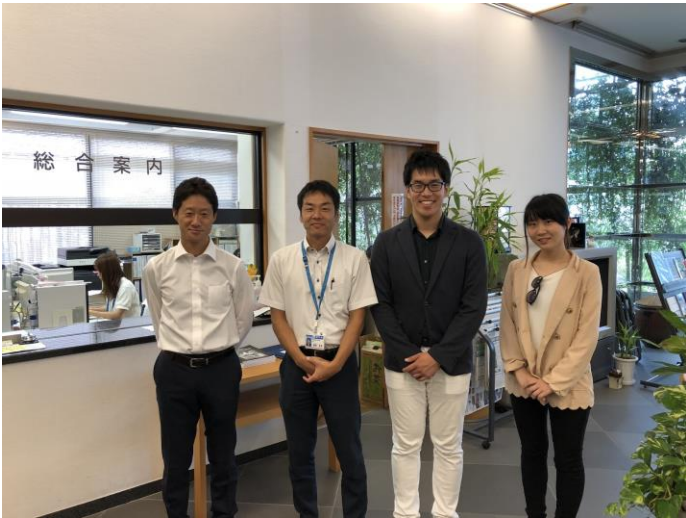
アメリカ側主催団体 元職員	相川 めぐみ
日米学生会議アラムナイ	森田 修弘 (64/65回)
	木村 優吾 (65/66回)
	萩原 夏花 (67/68回)
	常 恵喬 (70回)
	堀 晃輝 (70回)

計 51,000 円

▼ 写真



(左から) 齊藤/管家一夫市長/愛媛大学医学部医学科3年(当時)萩原彩さん



(左から) 西予市役所 総合政策課 清家祐一さん/経済振興課 都築卓郎さん(愛媛サイトの企画実務を一手にご担当いただきました)

■編集後記

第 70 回日米学生会議 報告書、お楽しみいただけただしょうか。

我々、第 70 回日米学生会議は 2017 年 8 月末の実行委員発足から 2018 年 8 月末までの丸一年間、報告会や報告書作成を含めると 2018 年 12 月まで活動してきました。本当にたくさんのドラマがありました。特に共に戦った実行委員とは笑い合い、涙にくれ、時には激しくぶつかり合いながらも最後まで一緒に進み続けられたことに心からの感謝の気持ちでいっぱいです。時間とともにあの鮮やかな感動は少しずつ思い出となり、記憶として、あるいは忘却の彼方へと飛んで行ってしまいます。編集をしながら、そういえばこんなこともあったなあと感慨深く、写真を選ぶにもあれこれと思い出すことがあり、作業がとんでもなくゆっくりになってしまいました。報告書担当、佐々木は香港、そして私はノルウェーへと留学中で、文字通りリモートワークでしたが、二人で力を合わせながら楽しく、最後の EC としての仕事を全うできたように思います。

二度と戻らぬ「第 70 回日米学生会議」という時間を私たちにに捉え、向き合い、文字にしようともがいた結果が本報告書です。これを読んだ皆様に、少しでも希望や日々の生活の糧が生まれましたら、編集者として無上の喜びです。

お読みいただきまして本当にありがとうございました。

何かご意見、ご感想などありましたら、下記のメールアドレスまで。

jasc70.media@gmail.com (第 70 回日米学生会議 広報担当：伊藤)

第 70 回日米学生会議 日本側報告書

発行月	2019 年 3 月
編集	伊藤江理華 佐々木彩乃
表紙デザイン	藤本ミケイラ
発行	日米学生会議 報告書編集委員会 〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-50 一般財団法人国際教育振興会内 日米学生会議事務局

Japan-America Student Conference Since 1934

主 催：一般財団法人 国際教育振興会
企画・運営：第70回日米学生会議実行委員会